

夕田茶臼山古墳 範囲確認調査報告書

(平成21~24年度)

2014
岐阜県富加町教育委員会

夕田茶臼山古墳 範囲確認調査報告書

(平成21~24年度)

2014
岐阜県富加町教育委員会

序

富加町には、原始・古代の遺跡や神社・仏閣などの有形文化財が多く残され今も人々の暮らしの中で息づいています。

また奈良正倉院に現存する、最古の戸籍「大宝二年（702）御野国加毛群半布里戸籍」の故地としても知られており、歴史と関わりが深い町であります。

夕田茶臼山古墳は、昭和35年に町史跡に指定されましたが、古墳の築造年代や規模、墳形などの詳細な情報は今まで皆無と言って良い状況がありました。大切な歴史遺産を適切に評価する事が、史跡の保存や後世へ伝えていくことに繋がると考え、平成21年度より4ヶ年にわたって確認調査を実施しました。

今回の調査で、夕田茶臼山古墳が岐阜県で最古の前方後円墳であることが確認され、この示された事実に驚くとともに、我々の故郷の歴史の奥深さを感じさせてくれました。岐阜県の歴史、ひいては東海地方の古墳の誕生の過程を把握する上で貴重な遺跡であると思われます。

今の時代は、故郷が辿ってきた道のりを知り、それを次代へ受け継いでいくことの重要性が問われていると深く感じております。本書が刊行されることを喜ばしく思うとともに、本書が我々の「故郷」を知り、郷土を愛する心が育つ一助になることを心から願っております。

最後になりましたが、調査に対してご理解とご協力をいただきました地元住民の皆様方や、調査に参加していただいた方々、ご指導ご助言賜りました調査検討委員会の先生方、岐阜県教育委員会をはじめとする諸関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

富加町教育委員会

教育長 山田 孝幸

例　　言

1. 本書は平成 21～24 年度に実施した夕田茶臼山古墳確認調査の報告書である。
2. 当事業は、国庫補助金の交付を受けて実施した。
3. 当事業は、岐阜県教育委員会及び夕田茶臼山古墳調査検討委員会の指導のもと、富加町教育委員会が実施した。
4. 調査の体制は以下の通りで実施した。

調査主体……富加町教育委員会

事務局……教育課長 小関 正好（平成 21・22 年度）

大竹 浄司（平成 23 年度）

粥川 友和（平成 24・25 年度）

教育グループ長 足立 宏司（平成 21・22 年度）

川合 耕平（平成 23・24 年度）

大竹 昇（平成 25 年度）

調査担当 島田 崇正

【夕田茶臼山古墳調査検討委員会】

平成 21・22 年度

委員長 八賀 晋（三重大学名誉教授）

副委員長 安藤 剛（富加町文化財審議会会長）

委員 早川 万年（岐阜大学教育学部教授）

工藤 正弘（富加町文化財審議会委員）

織部 博夫（富加町文化財審議会委員）

山田 孝幸（富加町教育委員会教育長）

オブザーバー 三輪 晃三（岐阜県教育委員会社会教育文化課）

長谷川幸志（岐阜県教育委員会社会教育文化課）

平成 23～25 年度

委員長 八賀 晋（三重大学名誉教授）

副委員長 工藤 正弘（富加町文化財審議会会長）

委員 早川 万年（岐阜大学教育学部教授）

村井 正覚（富加町文化財審議会委員）

織部 博夫（富加町文化財審議会委員）

山田 孝幸（富加町教育委員会教育長）

オブザーバー 長谷川幸志（岐阜県教育委員会社会教育文化課）

近藤 大典（岐阜県教育委員会社会教育文化課）

5. 現地調査での調査支援業務として作業員・現場監理者派遣、労務管理、遺構測量及び図化作業等を下記の業者に委託した。

平成 22 年度… (株) アーステクノ

平成 23 年度… (株) 帝国建設コンサルタント ※現 (株) テイコク

平成 24 年度… (株) イビソク

【調査参加者】

織部博夫、粥川圓博、柴田典子、高垣浩規、野口英雄、松山武夫

6. 出土遺物の洗浄・注記・復元作業、実測図化作業、図版作成は島田崇正（富加町教育委員会教育課主査）と土屋由香利（調査補助員）が行った。

7. 本書の執筆分担は目次に記した。特に明記がない場合は島田が執筆した。

8. 本書に使用した地図は、富加町が平成 16 年に作成した 25,000 分の 1 都市計画図を、縮小して使用した。

9. 発掘調査に際して地権者の方々並びに夕田地区の皆様のご理解とご協力を賜った。

10. 本書の作成に際して以下の方からご指導を賜った。記して感謝の意を表します。

赤塚次郎・石黒立人・恩田知美・小谷和彦・近藤大典・齋藤基生・酒井将史・高木宏和・

田中弘志・長谷川幸志・藤田英博・松野晶信・三浦直木・成瀬正勝・長屋幸二・櫛宜田佳男

(敬称略)

11. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006 『新版標準土色帖』による。

12. 本文中の方位は座標北を指す。

13. 出土品及び調査記録類は富加町郷土資料館にて保管している。

14. 本書の編集は島田崇正が担当した。

凡 例

1. 遺物実測図の縮尺は 1 / 3 とした。

2. 遺構略号は溝状遺構 = SD、中世墓 = SX とした。

3. 遺構実測図の縮尺は、それぞれに縮尺を表記した。

4. 遺物の編年觀は次の文献を参考とした。

赤塚次郎 1990 「廻間遺跡」財團法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1997 「廻間 I ・ II 式再論」「西上免遺跡」財團法人愛知県埋蔵文化財センター

藤田英博・高木宏和 2002 「美濃」「弥生土器の様式と編年－東海編」木耳社

恩田知美 2004 「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」

『美濃の考古学』第 7 号

多治見市教育委員会 2002 「北小木古窯跡群」

目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1章 夕田茶臼山古墳の立地と環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第2章 調査の概要 | |
| 第1節 調査の目的と調査に至る経緯 | 7 |
| 第2節 規査確認調査の経過 | 7 |
| 第3章 調査の成果 | |
| 第1節 調査の方法について | 11 |
| 第2節 基本層序について | 14 |
| 第3節 第1次調査（平成21年度） | |
| (1) T1について | 14 |
| (2) T2について | 18 |
| 第4節 第2次調査（平成22年度） | |
| (1) T3について | 18 |
| (2) T4について | 23 |
| (3) T5について | 25 |
| 第5節 第3次調査（平成23年度） | |
| (1) T6について | 28 |
| (2) T7について | 30 |
| (3) T8について | 32 |
| 第6節 第4次調査（平成24年度） | |
| (1) T9について | 38 |
| (2) T10について | 40 |
| (3) T11について | 43 |
| (4) T12について | 45 |
| (5) T13について | 47 |
| 第7節 出土遺物について | |
| (1) 出土遺物の状況 | 49 |
| (2) 出出土器の所属時期 | 54 |
| (3) 古代・中世の遺物 | 55 |
| 第4章 自然科学分析（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ） | |
| 第1節 放射性炭素年代測定と炭化材樹種同定 | 56 |
| 第2節 夕田茶臼山古墳出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析 | 60 |

| | |
|-----------------------------|----|
| 第5章 考 察 | |
| 第1節 墳丘構築工程の復元（島田崇正） | 62 |
| 第2節 夕田茶臼山古墳の墳丘盛土について（日紫喜勝重） | 69 |
| 第3節 夕田茶臼山古墳の墳丘形態について（島田崇正） | 75 |
| 第6章 総 括 | 77 |

挿 図 目 次

| | |
|--------------------------------------|----|
| 第1図 夕田茶臼山古墳の立地 (S = 1/6,000) | 2 |
| 第2図 夕田茶臼山古墳の位置と町内遺跡分布 (S = 1/30,000) | 4 |
| 第3図 トレンチ配置図 | 7 |
| 第4図 夕田茶臼山古墳地形測量図 (S = 1/3,000) | 12 |
| 第5図 夕田茶臼山古墳トレンチ実測図 (S = 1/3,000) | 13 |
| 第6図 前方部T 1 実測図① (S = 1/60) | 16 |
| 第7図 前方部T 1 実測図② (S = 1/60) | 17 |
| 第8図 前方部T 2 実測図 (S = 1/60) | 19 |
| 第9図 くびれ部T 3 実測図① (S = 1/60) | 20 |
| 第10図 くびれ部T 3 実測図② (S = 1/60) | 21 |
| 第11図 後円部西側T 4 実測図 (S = 1/60) | 24 |
| 第12図 前方部コーナーT 5 実測図① (S = 1/60) | 26 |
| 第13図 前方部コーナーT 5 実測図② (S = 1/60) | 27 |
| 第14図 後円部北側T 6 実測図 (S = 1/60) | 29 |
| 第15図 後円部と前方部の接合部T 7 実測図 (S = 1/60) | 31 |
| 第16図 墳頂部T 8 実測図① (S = 1/60) | 33 |
| 第17図 墳頂部T 8 実測図② (S = 1/60) | 36 |
| 第18図 墳頂部T 8 実測図③ (S = 1/60) | 37 |
| 第19図 後円部北西T 9 実測図 (S = 1/60) | 39 |
| 第20図 後円部北西T 10 実測図 (S = 1/60) | 41 |
| 第21図 後円部北西T 10 遺物出土ドット (S = 1/60) | 42 |
| 第22図 前方部東側T 11 実測図 (S = 1/60) | 44 |
| 第23図 前方部東側T 12 実測図 (S = 1/60) | 46 |
| 第24図 前方部前面T 13 実測図 (S = 1/60) | 48 |
| 第25図 出土遺物実測図① (S = 1/3) | 50 |
| 第26図 出土遺物実測図② (S = 1/3) | 51 |
| 第27図 出土遺物実測図③ (S = 1/3) | 52 |
| 第28図 出土遺物実測図④ (S = 1/3) | 55 |

| | | |
|--------|------------------------------------|----|
| 第 29 図 | 夕田茶臼山古墳出土炭化材の実体および走査型電子顕微鏡写真と暦較正結果 | 59 |
| 第 30 図 | 試料採取位置、赤色顔料の蛍光 X 線分析結果および生物顕微鏡写真 | 61 |
| 第 31 図 | 旧地形と墳丘の関係 | 62 |
| 第 32 図 | 後円部築造工程の復元図 | 64 |
| 第 33 図 | 墳丘縦横断面図① (S = 1/150) | 65 |
| 第 34 図 | 墳丘縦横断面図② (S = 1/80, 1/200) | 66 |
| 第 35 図 | 夕田茶臼山古墳築造過程模式図 | 68 |
| 第 36 図 | 神郷亀塚古墳断面図 (S = 1/120) | 71 |
| 第 37 図 | 墳丘盛土の類例① | 73 |
| 第 38 図 | 墳丘盛土の類例② | 74 |
| 第 39 図 | 夕田茶臼山古墳墳形復元図 | 76 |
| 第 40 図 | 有孔直口短頸壺の類例 (S = 1/6) | 77 |

表 目 次

| | | |
|------|---------------------|----|
| 表 1 | 富加町内遺跡一覧表 | 5 |
| 表 2 | 調査年次とトレンチの成果の概要 | 11 |
| 表 3 | 測定試料および処理 | 56 |
| 表 4 | 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 | 57 |
| 表 5 | 夕田茶臼山古墳出土炭化材の樹種同定結果 | 57 |
| 表 6 | 東海地方の墳丘盛土一覧 | 70 |
| 表 7 | 前期古墳の墳丘盛土一覧 | 70 |
| 表 8 | 墳丘罐部の標高と墳丘傾斜角 | 75 |
| 表 9 | 夕田茶臼山古墳の諸属性 | 76 |
| 表 10 | 丘陵上に立地する弥生墳丘墓の規模 | 78 |

写 真 図 版

| | | | |
|------|----------|------|---------------|
| 図版 1 | 空撮写真 | 図版 5 | 墳頂部 T 8 |
| 図版 2 | 空撮写真 | 図版 6 | 墳頂部 T 8、T 10 |
| 図版 3 | くびれ部 T 3 | 図版 7 | T 10、墳頂部からの眺望 |
| 図版 4 | 墳頂部 T 8 | 図版 8 | 出土遺物 |

第1章 夕田茶臼山古墳の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

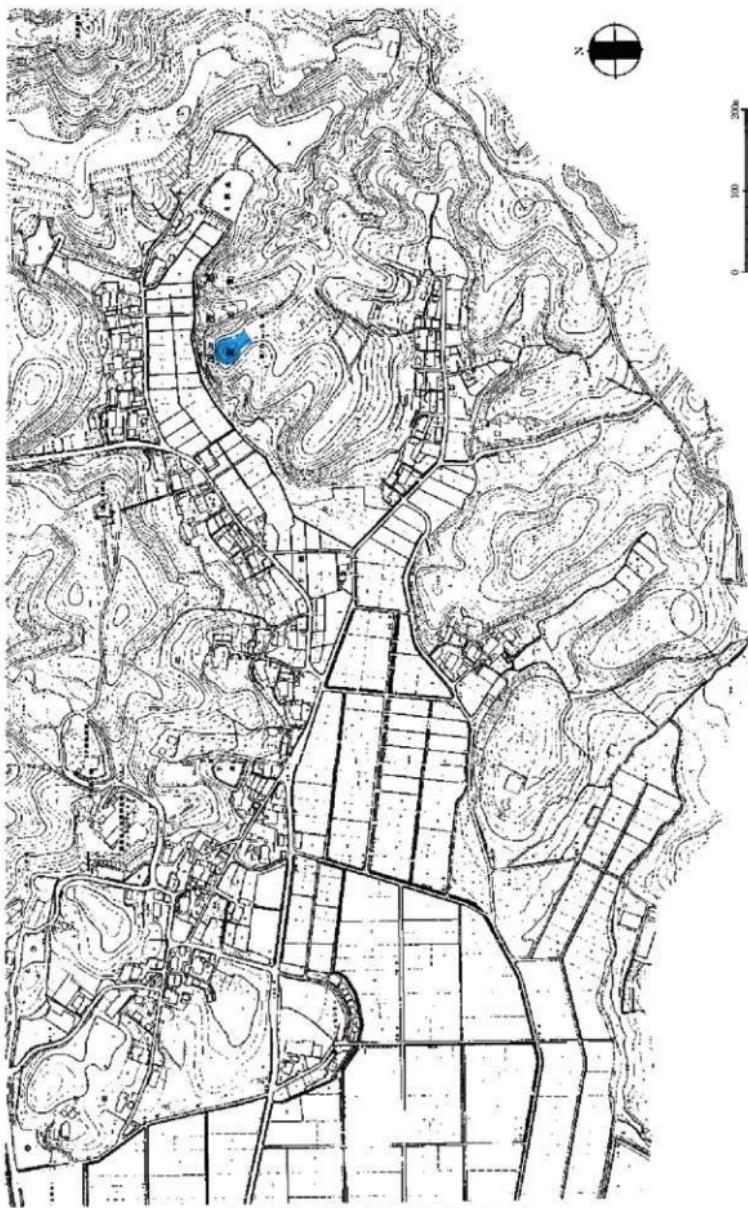
富加町は岐阜県の中南部に位置し、東部から南部にかけて美濃加茂市と、西北部を関市と接している。東、西、北を丘陵に囲まれた盆地状の地形であり、町の北東部に控える山地の合間に津保川が西南へ流れ、東部の丘陵地より流れ出た川浦川と町の西端で合流し、関市南部を通って岐阜市北東部で長良川へそそぐ。三和の山塊地（美濃加茂市）を出た川浦川は、町内を2分するように東西へ流れ、加治田沖で丘陵地から平野部に抜ける。ここで川幅を広げ、右岸側に後背湿地、左岸側に扇状地を形成する。左岸扇状地には、川に沿って、東西に舌状の微高地が発達し、その南側がやや低い後背湿地となる。

夕田茶臼山古墳が立地する夕田地区は、富加町の南西部に位置し、大きな谷状の地形になっている。谷状地形の奥部は、2つの谷に分岐し、北側を北洞、南側を南洞と呼ぶ。2つの谷に挟まれた中央部の丘陵北側に夕田茶臼山古墳は立地する。北洞の谷奥部の北東に延びたやせ尾根状の丘陵の先端部頂上に古墳が築かれている。夕田茶臼山古墳の周辺に古墳は確認されていない。平成16年度に実施した詳細分布調査に関連した踏査においても墳墓を想定できるような高まりなどは確認できていない。現状としては単独墳を想定している。

現在の集落は山沿いに広がり、谷底の平坦部は水田に利用されている。夕田茶臼山古墳が立地する北洞の最奥には溜め池があり、記録に残る限りでは、江戸時代から谷内部の水田に供給する水源として利用されてきた。谷の入口辺りには「寺坪」や「大沼」といった条里地名が残っており、土地改良以前は



富加町俯瞰写真



第1図 夕田茶臼山古墳の立地 ($S=1/6,000$)



夕田字北洞で採集された勾玉

第2節 歴史的環境

町内に分布する遺跡や周辺の遺跡を時代ごとに概観する。

まず岐阜県の旧石器研究の先駆けとなった恵日山遺跡がある。昭和28年に県立関高校社会研究部による踏査で、細石器文化期を主体とする石器群であることがわかった。その他にも、恵日山山麓の北野遺跡、川浦川右岸の大山北野遺跡でもナイフ形石器・槍先形尖頭器などが採集されている。

縄文時代の遺跡としては、車塚遺跡、恵日山遺跡、で前期北白川下層式土器が、本郷遺跡では中期加曾利E式土器の散布が確認されているが、いずれも未調査であり実態は判明していない。

弥生時代以降、平野部にも遺物の散布が見られる。昭和53年から実施された県教委による半布里遺跡範囲確認調査では、中期の貝田町式に属する竪穴住居跡2棟が確認されている。また東山浦遺跡D地点発掘調査（平成9年）では信州の弥生中期である百瀬・栗林式の土器が出土すると伴に、後期凹線文土器も一定量出土している。発掘調査や表採資料の中に、現在までのところ、弥生前期の資料の確認はなく、川浦川左岸の平地部に中期貝田町式が多く分布する傾向から、左岸微高地に当該期集落が展開した可能性は高い。その他、津保川左岸段丘上の大山地区でも当期の土器が採集されており、川沿いの段丘上に集落が点在する可能性がある。

弥生時代後期から終末期の遺跡としては、大平賀の後平遺跡において山中式期～廻間I式期の集落跡が確認されている。山間地の丘陵の斜面に営まれた集落で、闇の砂行遺跡や深橋前など中濃地域の中山間部において特徴的に見られる集落形態として認識されている³。

平地部においては半布里（東山浦）遺跡や絹丸堀畠遺跡において、山中式期～廻間I式期の遺構や遺物が確認されている⁴。住居跡等は確認されていない。また、高畠地区の稻荷遺跡では廻間式期の竪穴住居跡が調査されている⁵。

次に古墳の分布をみると、前方後円墳は、夕田地区の夕田茶臼山古墳、蓮野古墳、杉洞1号古墳、津

条里地割りを良好に残していた。八賀晋氏の研究によると、この条里地割りが平行四辺形を呈しており比較的古い条里地割りであると考察されている¹。

夕田地区は、夕田茶臼山古墳の他にも谷の前面には蓮野古墳、杉洞1号古墳といった前方後円墳が築かれており、前方古墳が密集する地域である。

また、夕田字北洞の夕田茶臼山古墳の立地する尾根の麓付近の畑において、勾玉が採集されている²。

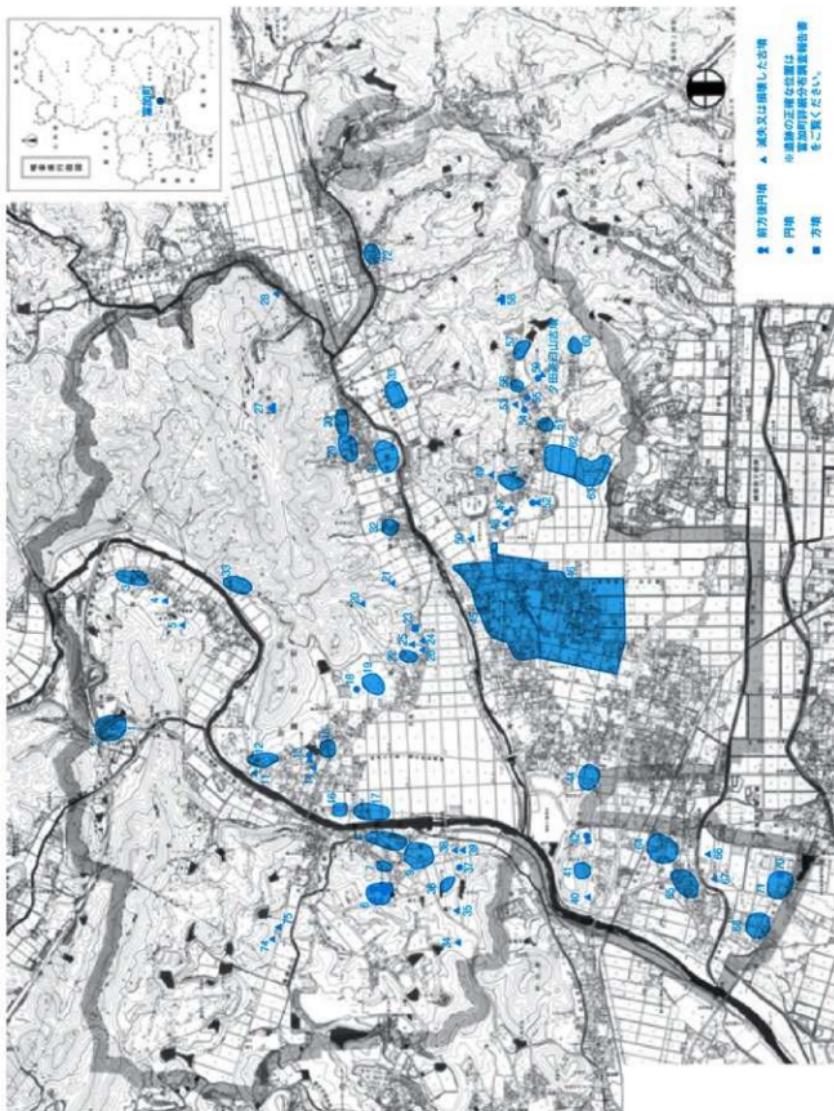
¹ 八賀晋 1968「古代における水田開発」『日本史研究』96

² 末松清子氏よりご教示いただいた。

³ 成瀬正勝 2000「砂行道路における住居形態と集落形態」『砂行道路』（財）岐阜県文化財保護センター

⁴ 富加町教育委員会 2006「町内遺跡発掘調査報告書」富加町教育委員会

⁵ 富加町 1980「富加町史」下巻



第2図 夕田茶臼山古墳の位置と町内遺跡分布 (S=1/30,000)

表1 富加町内遺跡一覧表

| No. | 遺跡名 | 種別 | 時代・特徴 | 遺跡名 | 種別 | 時代・特徴 | No. | 遺跡名 | 種別 | 時代・特徴 |
|-----|-----------|-----|--------|--------------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|
| 1 | 後平糸臼古墳 | 古墳 | 5世紀 | 31 馬場遺跡 | 散布地 | 弥生～戰國期 | 61 | 釜洞遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 |
| 2 | 後平遺跡 | 集落 | 弥生時代終末 | 32 繩丸堀烟道跡 | 散布地 | 弥生～戰國期 | 62 | 寺坪遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 |
| 3 | 小竹原遺跡 | 散布地 | 繩文 | 33 中島遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | 63 | 駒田遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 |
| 4 | 小竹原古墳 | 古墳 | 古墳 | 34 山崎車塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 64 | 村東遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 |
| 5 | 南坂茶臼古墳 | 古墳 | 古墳 | 35 山崎3号古墳 | 古墳 | 古墳 | 65 | 野嶋遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 |
| 6 | 福宜屋古墳群 | 古墳 | 7基の群集墳 | 36 關田1号古墳 | 古墳 | 古墳 | 66 | 高畠号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 7 | 中里北遺跡 | 散布地 | 古代～中世 | 37 關田2号古墳 | 古墳 | 古墳 | 67 | 春日古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 8 | 中里敷遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | 38 中障子1号古墳 | 古墳 | 古墳 | 68 | 市場裏遺跡 | 散布地 | 弥生～戰國期 |
| 9 | 木郷遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | 39 中障子2号古墳 | 古墳 | 古墳 | 69 | 於妻里古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 10 | 坂本古窯 | 古窯 | 須恵器窯 | 40 北野経塚 | 経塚 | 中世・戰國期 | 70 | 高畠号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 11 | 大山古墳 | 古墳 | 古墳 | 41 北野古墳群 | 古墳 | 古墳 | 71 | 福荷遺跡 | 集落跡 | 弥生終末期 |
| 12 | 大山北野遺跡 | 散布地 | 繩文 | 42 愛宕古墳 | 古墳 | 古墳 | 72 | 前畠遺跡 | 散布地 | 古代～中世 |
| 13 | 池下1号古墳 | 古墳 | 前方後円墳 | 43 海老(萬日)山遺跡 | 古墳 | 古墳 | 73 | 日燒田古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 14 | 池下2号古墳 | 古墳 | 古墳 | 44 北野遺跡 | 散布地 | 旧石器～中世 | 74 | 小万錦古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 15 | 池下2号遺跡 | 散布地 | 弥生～中世 | 45 東山浦遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 | 75 | 後平号古墳 | 古墳 | 6世紀 |
| 16 | 兼畠遺跡 | 散布地 | 平安～戰國期 | 46 羽生遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 | 76 | 老梅号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 17 | 大山神社遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | 47 杉洞1号古墳 | 古墳 | 古墳 | 77 | 老梅2号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 18 | 大山車塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 48 杉洞2号古墳 | 古墳 | 古墳 | 78 | 打越古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 19 | 荒神洞遺跡 | 散布地 | 旧石器～中世 | 49 杉洞3号古墳 | 古墳 | 古墳 | 79 | 山崎1号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 20 | 天神野北古墳 | 古墳 | 古墳 | 50 杉洞4号古墳 | 古墳 | 古墳 | 80 | 山崎2号古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 21 | 金戸古墳群 | 古墳 | 古墳 | 51 蓮野遺跡 | 散布地 | 弥生 | | | | |
| 22 | 白山神社遺跡 | 散布地 | 古墳 | 52 蓮野古墳 | 古墳 | 古墳 | | | | |
| 23 | 井高1号古墳 | 古墳 | 方墳 | 53 北野1号古墳 | 古墳 | 古墳 | | | | |
| 24 | 井高2号古墳 | 古墳 | 古墳 | 54 北野2号古墳 | 古墳 | 古墳 | | | | |
| 25 | 井高3号古墳 | 古墳 | 古墳 | 55 北野3号古墳 | 古墳 | 古墳 | | | | |
| 26 | 井高4号古墳 | 古墳 | 古墳 | 56 北洞遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | | | | |
| 27 | 加治田城跡 | 山城跡 | 戰國期 | 57 北洞池遺跡 | 散布地 | 弥生～戰國期 | | | | |
| 28 | 片町古墳 | 古墳 | 古墳 | 58 堂洞城 | 山城跡 | 戰國期 | | | | |
| 29 | 上之磨敷遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | 59 夕田糸臼山古墳 | 古墳 | 古墳 | | | | |
| 30 | 伝佐藤紀伊守塗敷跡 | 散布地 | 中世・戰國期 | 60 南洞遺跡 | 散布地 | 古墳～戰國期 | | | | |

保川左岸大山地区の大山池下古墳、津保川右岸の高畠地区の丘陵上にある愛宕古墳の5基が確認されている。夕田地区は前方後円墳が密集する地区である。

6世紀代では津保川沿いの大平賀地区に後平茶臼古墳がある。平成11年に東海環状富加・関インター建設に伴い岐阜県文化財保護センターによる発掘調査が行われ、6世紀の「作り出し付き円墳」であることが判明し、馬具や尾張型円筒埴輪が出土している。

6世紀後葉～7世紀初頭になると津保川右岸の大平賀地区や夕田地区で群集墳が築かれ、大平賀地区的閔田古墳や、夕田地区的稻荷山古墳などの直径20m級の首長墓も継続して築かれる。また、7世紀初頭には津保川左岸の井高地区において、山裾に独立して一辯20m以上の方墳である井高1号墳が築かれている。

詳細分布調査¹の成果をみると、全体的に4～6世紀代の遺物の散布が少ない。4世紀～6世紀の集落の動きが見えない状況である。大きな拠点的集落は平地上に確認できない。古墳は継続して築かれており、丘陵の裾の微高地など現在の集落と重なる位置に、当該期の集落が点在しているのかもしれない。平地上の集落が見え始めるのが6世紀後葉からである。富加町淹田・羽生地内にまたがる東山浦遺跡と羽生遺跡は、6世紀後葉以降から集落が継続的に営まれる拠点的集落と考えられる。この両遺跡での集落経営は位置や形態を少しづつ変えながら中世・近世、そして現代まで繋がっていく。東山浦遺跡においては6世紀後葉～8世紀末までの建物跡が現在までに155棟確認されている。当町は奈良正倉院に残る「大宝二年(702)御野国加毛郡半布里戸籍」の故知として知られており関連が注目されている。半布里戸籍には1,119人、54戸分の記載が残っており、当時の家族や集落を知る上で欠かせない一級資料である。また、里の中で優勢な県主や県造などの氏姓集団については、前代の在地豪族の系譜を引くものとして注目される。他にも秦人姓などの渡来系の氏族もかなり見られる点も集落のあり方を考える上で重要である。

また、「和名類聚抄」では賀茂郡に埴生郷、武芸郡に大山郷、掛加郷の記載があり、それぞれ現在の羽生、大山、美濃加茂市の伊深に比定できることから、9世紀代には現在の川浦川が賀茂郡(加茂郡)と武芸郡(武儀郡)の境であったことが推定される。

中世に入ると鎌倉期の石組墓が半布里遺跡で検出されている。全体的に室町期の遺跡かた量が増えた傾向にある。町内の寺院の中には、この頃に創建と伝わるものもあり、大平賀に所存する東香寺は1315年の建立で、夢想國師ゆかりの寺とされ、庭園(通称、心字池)は国師の作とされている。戦国期には、永禄8年(1575)織田信長の東美濃侵攻に深く関係する「加治田城」と「堂洞城」がある。特に加治田城は、その城下に古い字名や城館伝承地、城主佐藤紀伊守の菩提寺「龍福寺」などがあり、景観復元が試みられている。永禄期には加治田の町中を飛騨へ抜ける街道が通っており、旅籠の存在も示唆される。

¹ 富加町教育委員会 2005『富加町詳細分布調査報告書』

第2章 調査の概要

第1節 調査の目的と調査に至る経緯

夕田茶臼山古墳は昭和35年に当時の富加村の史跡に指定されている。

富加町史によると5世紀代の前方後円墳と推定されている¹⁾ものの、古墳の形や築造年代を考える具体的な資料がなく、遺跡の正当な評価を提示できていなかった。

平成16年度に町内の遺跡分布調査の一環として、墳形や規模を推定する検討材料を得るために墳丘の平板測量を実施した。これにより築造当初の墳形を留めている可能性が高く、極めて保存状況が良い古墳であると分かった。

町では富加町を代表する古墳を正当に評価し、後世へ受け継ぎ、適切に保護していくとともに広く遺跡の価値を周知するためにも墳形や築造年代を考える基礎資料を整備する必要があると考えた。そして平成20年度に範囲確認調査の実施が決定し、調査や今後の保護策を講じる基礎図として精密な測量図が必要であったため、調査に先立って平成21年8月より墳丘の地形測量を実施した。等高線間隔は計画線1.0m、主曲線20cm、補助曲線10cmを標準とする1/100地形図を作成した。

第2節 範囲確認調査の経過

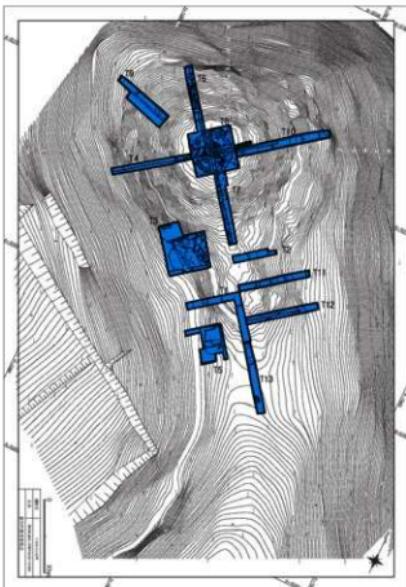
(1) 第1次調査(平成21年度)

調査着手前の平成21年12月4日に第1回調査検討委員会を開催し、夕田茶臼山古墳の調査主旨や、調査へ向けての課題などを整理し、調査箇所や調査方法を検討した。1次調査は調査トレンチT1・T2の発掘調査を実施することが決定し、平成22年1月6日に着手した。

L字に設定したT1の南北側、前方部前面に延長したT1南北では、明瞭な墳丘端部を確認することができず、トレンチ南端において東西方向へ延びる溝SD01を検出した。1次調査の時点ではこの溝が前方部前面を区画する区画溝の可能性を考えたが、墳端の立ち上がり位置や形態において若干の疑問が



調査前風景



第3図 トレンチ配置図

¹⁾ 富加町 1980「富加町史」下巻



残った。前方部西側へ延長したT1東西においては、墳端を特定し、盛土も非常に良好に残存していることを確認した。T1南北のSD01埋土からは、S字状口縁台付壺の口縁部片が出土している。出土遺物はいずれも小破片であったが、すべて週間式期の範疇であることがわかり、想定した古墳の年代より古いため、混入であるのか否かを迷うこととなる。

平成22年3月8日に第2回調査検討委員会を開催した。出土土器から初期の前方後円墳であるこ

とも想定して調査を進めることとSD01については区画溝と断定するには尚早であり、T1南北は、次年度以降の調査でさらに延長し、南側の鞍部まで延長する必要があるとのご指摘をいただいた。ひとまずT1、T2トレーニングをそれぞれ若干拡張することが決定し、調査を継続した。

平成22年3月13日(日)に現地説明会を開催し、約40名の参加を得た。

掘削排土は隨時フリイ通しを行い、土糞に戻した。平成22年3月15日に各トレーニングを土糞で埋め戻し、調査を終了した。調査面積は19m²であった。

(2) 第2次調査(平成22年度)



2次調査はくびれ部、前方部西側コーナー、後円部西側を確認するために当初は4ヶ所のトレーニングを設定したが、調査の過程で1ヶ所を次年度以降に延期したためT3・T4・T5の調査を実施となった。平成22年10月5日に着手した。

くびれ部T3では、地山岩盤を削り出してくびれ部の形を作り出していることが分かった。また盛り土には岩盤由来の凝灰岩礫を土に混ぜて盛土しており、岩盤と盛土の判別に苦慮した。主丘部が、前方部との取付部から緩やかに弧を描いて延びていることを確認したため、墳形は前方後円形である可能性が高くなった。

T4では地山の削り出しとその上面に水平に盛土を行っている事が確認された。この盛土は後に基盤造成のための盛土と判別されることとなる。

T5では前方部の西コーナーを特定することができたが、墳端部が不明瞭である事、西面は地山を削りだして墳形を作り出しているが、コーナーと前面部分は地山を削りだしてアウトライ恩を整形した後に、盛り足して形作っている事が分かった。これによりT1南北で検出したSD01も元の丘陵地を削ってアウトライ恩

を作ったものと想定するに至った。

平成22年10月25日に第3回調査検討委員会を開催して調査成果や調査方法の検討を行った。調査検討委員会では、出土土器の様相が古く、弥生時代の終末期の可能性が指摘された。墳形も前方後円形の可能性が高いが、墳形も不整形である見通しが出され、定型化する以前の前方後円墳、または弥生墳丘墓である可能性も視野に入れて調査する必要性が確認された。

また、前方部コーナーを特定するために設けたT5でコーナー部分が不明瞭であったため調査区を拡張し精査することが決定した。このため当初調査予定の後円部北西に設ける予定であったトレンチの調査を延期する事となった。この延期したトレンチは4次調査でT9として調査した。

平成22年11月7日(日)に現地説明会を開催し、約40名の参加を得た。掘削排土は随時フルイ通しを行い、土叢に戻した。平成23年1月13日に各トレンチを土叢で埋め戻し、調査を終了した。第2次調査の調査面積は60.9m²であった。



現地説明会（2次）

(3) 第3次調査（平成23年度）

3次調査は後円部北側にT6、後円部南側から前方部にかけてT7、墳頂部にT8を設定した。平成23年11月24日に着手し、第4回調査検討委員会を平成24年2月27日に開催した。

T6では墳端の特定と、地山削平と基盤造成の工程を確認した。

T7では前方部と後円部の盛土の関係を確認した。盛土は後円部側が先行して行われている可能性が考えられた。

T8の調査で、墳頂部の盛土が周堤状になされている事が確認され、墓壙は構築墓壙である可能性が高い事を確認した。調査検討委員会において、周堤状盛土の輪郭を把握するためにT8の拡張が決定した。さらに墳頂部のほぼ中心あたりに盗掘坑が掘られていたが、この盗掘坑の壁面を精査し埋葬主体部の情報を抽出すること、墓壙内は疊を含む上層埋土を慎重に除去し、埋葬主体部の検出に努めることが指示された。石槨や粘土槨などの埋葬施設の検出は無く、木棺直葬であることが考えられた。木棺は確認することができなかったが、おそらく腐朽しているものと思われる。最終的には棺部の埋土上面と思われる面を検出し、盗掘坑で棺部の断面を確認することができたため木棺直葬であることが判明した。3月に検討委員会委員長に現地を確認いただいた。主体部については盗掘坑が北東隅をかすめているだけで、保存状態は良好であることが判明したため、今回の調査では主体部内の調査は行わなかつた。

T8の出土遺物では、最終盛土を除去した面で赤彩のある有孔直口短頸壺が出土地。廻間I～II式までしか存在しない器種であるため時期決定の有力な土器となった。



調査風景（3次）



検討委員会（3次）



現地説明会（3次）

墳頂部に周堤状の盛土を施すことによる構築墓壙のあり方や木棺直葬、赤彩短頭壺など弥生時代的な様相を色濃く残す古墳であることが確定的となり、時期についても3世紀の前半を視野に入れる事が確認された。周辺地域には3世紀代の前方後円墳は確認されておらず、全国的にも初現的な前方後円墳がなぜ当地に築かれたのか、その歴史的背景は何かについては不明な点が多く、調査後の大きな課題となつた。

掘削排土は隨時フリイ通しを行い、土糞に戻した。平成24年3月16日に各トレンチを土糞で埋め戻し、調査を終了した。T8の埋葬主体部に付近の土については玉類などの微小な遺物が混入している可能性もあるため、水洗選別を行うこととし、一部を郷土資料館へ運んだ。水洗選別は平成25年度に実施し、平成26年2月に現地に埋め戻した。玉類の出土は無かつた。

平成24年3月4日（日）には現地説明会を開催し、天候不良にも関わらず約80名の参加を得た。第3次調査の調査面積は58.3m²であった。

（4）第4次調査（平成24年度）

第4次調査は後円部西北側にT9、後円部東側にT10、前方部東側にかけてT11・T12、前方部前面にT13を設定し、平成24年12月1日から調査に着手した。

T9では主丘部の墳形が円形である事を確認するとともに、墳丘裾部では表土下で岩盤が露呈し、盛土の前に地山をほぼ水平に削平している事が分かった。T10でも岩盤を水平に削平している事が分かり、墳丘盛土の前に丘陵を岩盤まで削平し平坦な造成面を築造していることが確認され、想定を超える大規模な造成工事であることが判明した。造成面には炭化物が散布しており、これらをサンプルとして採取してAMS年代測定分析を実施した。T11・T12でも岩盤を削平していることを確認したが、盛土の墳端は非常に不明瞭であった。T13では前方部前面の区画溝SD02を確認した。これにより古墳の全長が明らかとなった。

第5回調査検討委員会を平成25年2月27日に開催した。検討委員会では墳丘盛土の前に丘陵を削平する造成工法、周堤状の盛土、東面の墳端部などについて確認された。

出土土器については、考古学的には3世紀前半の可能性が指摘されるとともに、古墳の年代については他地域との比較や歴史的解釈を根拠に位置づけるのではなく、自然化学分析や出土遺物の編年的位置づけを適正に行い、その実年代を当てることとの意見をいただいた。

平成25年3月1日（土）に現地説明会を開催し、約100名の参加を得た。掘削排土は隨時フリイ通しを行い、土糞に戻した。各トレンチを土糞で埋め戻した。

最終年度であるので、調査をした13ヶ所のトレンチの表面に元土を戻し、平成25年3月15日に調査を終了した。第4次調査の調査面積は57.2m²であった。



調査風景（4次）



排土フリイ通し



現地説明会（4次）

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法について

調査は平成21～24年度の4ヶ年にわたり実施した。古墳の規模や墳形・築造年代などを特定する事を念頭に置き、計13ヶ所のトレンチを設定し185.4m²の発掘調査を実施した。トレンチは原則幅1mとしたが、墳頂部・くびれ部・コーナー部については形状を把握するためやや広範囲で調査区を設定している。トレンチの設置箇所や、調査成果の評価については各年次ごとに調査検討委員会を開催し、現地で検討をおこなった。

トレンチ配置の基本は、平成20年度に実施した地形測量調査で設定した古墳の推定主軸（T3-1・T3-2）を基準として、直交または並行するように計画し、調査後に土層断面等を接合または対比できるように配慮した。第2次調査を終了した時点で、推定の墳丘主軸が、実際の主軸よりもやや西へ振っている可能性が考えられたが、主軸の補正是行わず当初のまま調査を進めた。

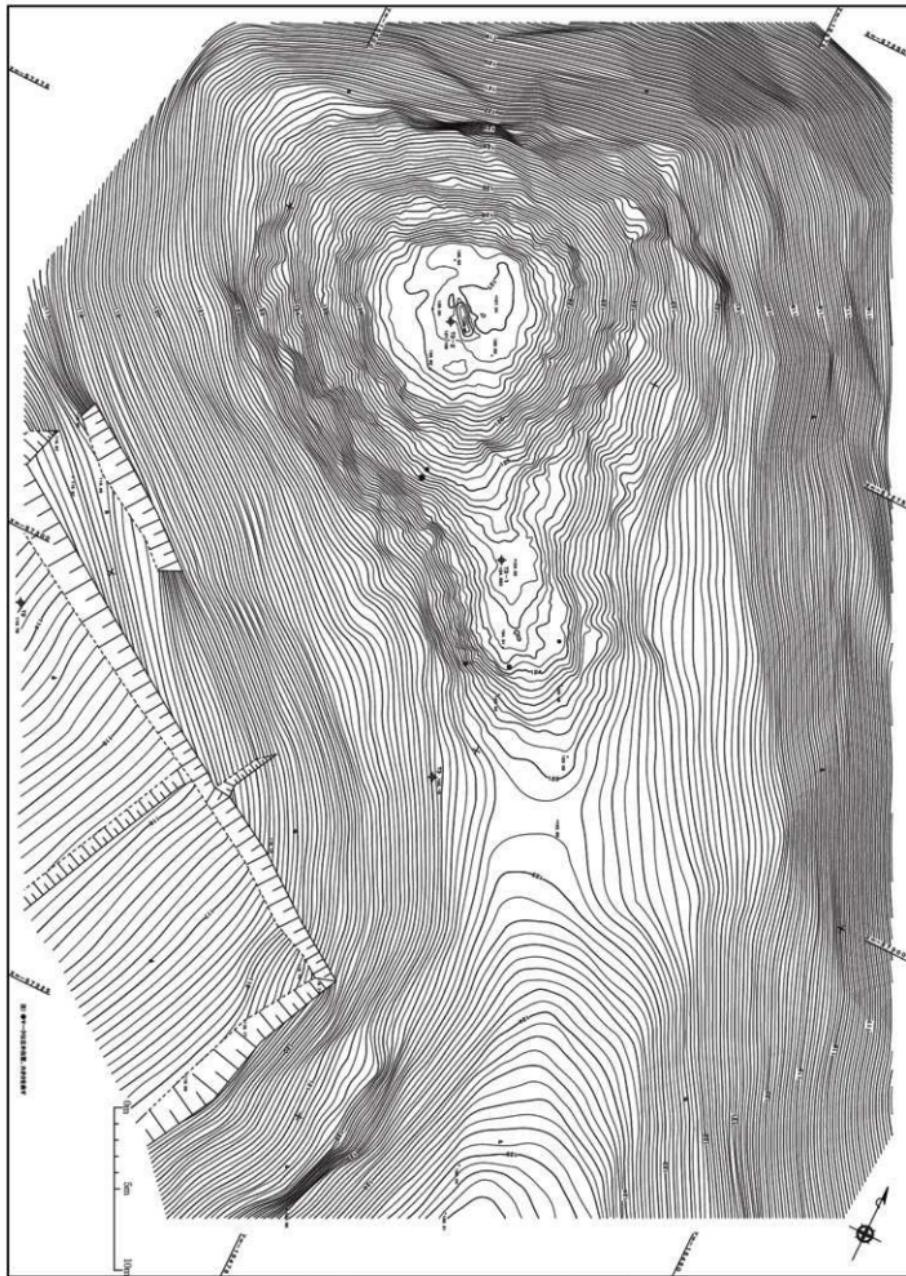
発掘調査はすべて人力で実施した。表土、流土を除去して残存している墳丘盛土を検出して墳形を出すことを優先した後、トレンチを半裁または一部を深く掘り下げるなどして盛土の築造工程を確認した。図面は1/20で平面図・断面図・遺物分布図を作成した。

調査終了後は土糞で埋め戻し、表面の10cm程度を土で埋めた。

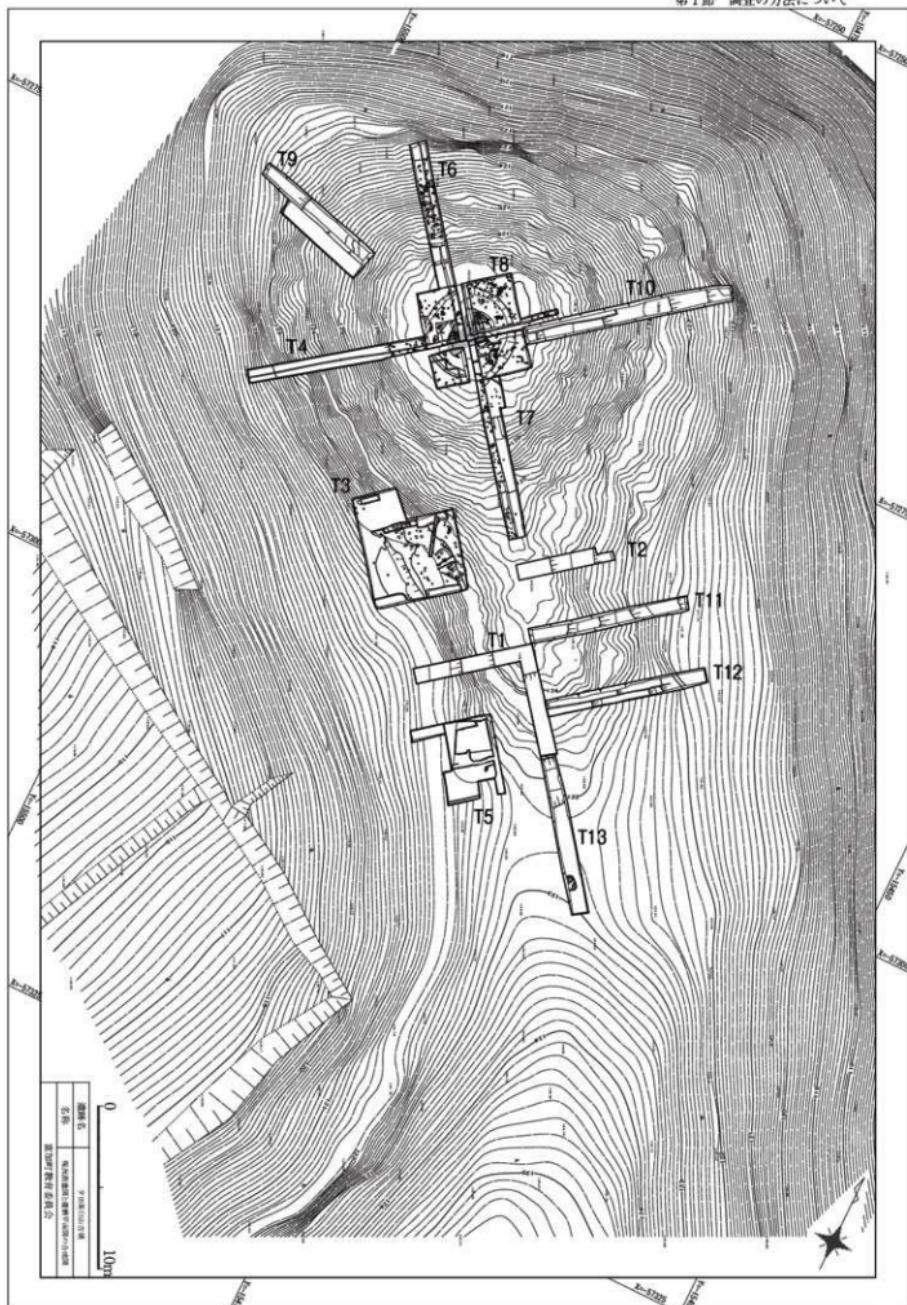
墳丘盛土の調査排土については現地でフリイ通しをおこない、墳頂部T8の主体部上面のサブトレンチ内排土や主体部検出面排土、盗掘坑断面精査排土については富加町郷土資料館へ一度持ち帰り、平成25年度に水洗選別作業を実施して現地へ戻した。

表2 調査年次とトレンチの成果の概要

| 年次 | 調査区 | 成果の要約 |
|----------|----------------|---|
| 1次(21年度) | T1・2 | 前方部は地山を削平して整形した後、盛土を施している。 前方部の側面は岩盤を削り出している。 前方部の盛り土は拳大の礫を混入している。傾斜変化点には礫を多く盛ったり、大型の礫を混ぜて土留め効果を出している。 前方部前面にて溝SD01を検出。 |
| | | |
| 2次(22年度) | T3・4・5 | くびれ部から前方後円形の可能性が高まる。 前方部コーナーを特定、形状は隅丸で傾斜は緩やかであった。 1次調査の溝SD01は地山削平溝であり区画溝ではないと判明。 T4において基盤造成の工程を把握。（盛り足し工程を確認） |
| | | |
| 3次(23年度) | T6・7・8 | 地山を削り出し、一部盛土を施して基盤を造成し、その端部から周堤状に盛土をして墓壙を構築し木棺を設置していると推定。 墓壙は構築墓壙であり、主体部は石楠や粘土壙は無く、木棺直葬と推定。 主体部は北東隅に盗掘坑が及んでいるものの保存状況は良好。 木棺は舟底形を呈し頭位は北北東を向くと推定。 全体形は古墳時代のものでありながら埋葬部については弥生時代の墳丘墓の要素を強くもつてることを確認。 |
| | | |
| 4次(24年度) | T9・10・11・12・13 | 築造前に地山を整形し、地山削平は岩盤まで及んでいる。 後円部墳頂は岩盤まで整地した後に粘性土を敷き平坦部を作り出している。粘性土の上面で炭化物や焼けた土粒を確認した。 前方部、後円部ともに墳端（裾部）の作り方が明瞭ではない。 前方部前面に区画溝SD02を確認した。 |
| | | |



第4図 夕田茶臼山古墳 地形測量図 (S=1/3,000)



第5図 夕田茶臼山古墳 トレンチ実測図 (S=1/3,000)

第2節 基本層序について

調査の結果、古墳築造は大きく3工程に分けられることが分かった。第1の工程は地山を削平して整形する工程で「地山削平工程」と呼ぶ。次の工程は、やせ尾根状の丘陵稜線部に築造されるため、地山削平で十分に面積が確保できない部分は、盛り足しを行い古墳の基盤や墳形を造成している。墳形の輪郭を形成する段階と思われるが、これを便宜的に「基盤造成工程」と呼称する。次に、主体部・埋葬部の築造や墳頂部の周堤状盛土や墳丘盛土をおこなう段階で「墳丘築造工程」と呼ぶ。

基本層序は、「表土」、墳丘盛土や盛土内の礫が流れ出した「流土」、墳丘築造のために人為的に移動された「盛土」、築造以前の堆積物である「地山」、凝灰岩で構成される「岩盤」である。

「地山」は古墳築造に先駆けて地山の削平を行っているため、T 4・T 6・T 13以外のトレンチでは確認できていない。「岩盤」は表面の凝灰岩が風化して脆くなり人頭大の礫が重なるような状態の風化岩盤と、固く締まった1枚岩の状態の岩盤がみられた。前者を風化岩盤、後者を下層岩盤と呼称した。「盛土」を大別すると、

- ・盛土①褐色系の砂質土に岩盤由来の拳大凝灰岩が混入するもの
- ・盛土②やや暗い褐色系の砂質土で礫が混入しないもの
- ・盛土③子供の人頭大ほどの凝灰岩と粘質土が混じるもの
- ・盛土④褐色系の粘性土に拳大礫が混入するもの
- ・盛土⑤赤褐色の粘性土のもの

以上の5つに分類できる。盛土①は主に後方部の盛土や、全体の最終盛土に利用されている。

盛土②は主に後円部の基盤造成にて地山削平部への盛り足しの工程で利用されている。T 4とT 9で検出したが、盛土①と盛土②が互層になっている。盛土③はくびれ部やコーナー部の成形で利用され、盛土④は墳頂部の周堤状盛土や墓壙埋土で利用されている。盛土⑤は後円部の基盤造成面に敷かれている特徴的な粘土である。一部黄褐色を呈する粘土もみられた。

混入する礫はいずれも凝灰岩であるので、岩盤由來のものである。風化岩盤の礫は人頭大ほどのものが多いのに対し、盛土のものは拳大以下のものが多い。おそらく風化岩盤を割り碎いて土に混入し、盛土用の土を作っていると推定している⁷⁾。

第3節 第1次調査〔平成21年度〕

(1) T 1について〔第6図、第7図〕

前方部南西コーナーを挟むようにL字状に配置した調査区で、東西をT 1東西、南北をT 1南北とした。幅1.0m、長さは東西が7.5m、南北が7.0mを測る。前方部の築造方法及び前方部前面と前方部コーナー付近の西端を特定する事を目的とした調査区である。

墳丘側で厚さ約10cmの表土を除去すると直径5~10cmの凝灰岩礫が混入するしまりのある土を検出し、これを残存する盛土と考えた。その後、トレンチ北壁及び東壁に幅30cmのサブトレンチを設け、盛土築造の過程を知るために掘り下げを行った。

T 1東西では、墳端部付近のトレンチ西端辺りに、流土(2層)が堆積し、それを除去すると炭化物層(3層)を確認したが、おそらく近代以降、周辺の果樹林の造園に伴うものと思われる。4層~22層までが盛土、23層~25層・27~29層が地山、30層が岩盤であると推定される。盛土は約10cmほど

⁷⁾ 愛知県犬山市に所在する東之宮古墳においても盛土は礫と土をブレンドしていると推測されている。

の単位で盛られ、岩盤由来の拳大の凝灰岩が混入している。傾斜変化点となるような部分にはやや大きめの直径 20 ~ 30cm の凝灰岩をかためて盛っており、部分的に土留めを意図した土手を構築しながら盛土した事がわかる。

前方部西側の墳丘端部について、4層は土質から盛土であると思われるが、礫をあまり含まず、早い段階で流出しているため、明確な端部が特定できなかった。しかし、4層を除去した段階で、若干の浅い掘り窪みが認められた。その窪みの埋土（26 層）で週間 I ~ II 式期と思われる広口壺口縁が（第 25 図 5）が出土しており、自然地形と墳丘部分を区画した人為的なものと考え、26 層の立ち上がり付近を墳端と推定した。結果的には、T 3 や T 5などのその後の調査で検出される前方部西側の墳丘端部と位置的に整合性が確認された。浅い掘り窪みの意図については、地山削平か基盤造成の工程において墳形の輪郭付けの意味を想定している。

前方部西側の墳丘斜面は急で、傾斜角度は約 43 度を測る。墳端部の標高は約 121.6 m を測る。

T 1 南北では、岩盤、地山の堆積物（26・27・29 層）を確認した。これらがほぼ水平に堆積する事から、元々の丘陵の頂部は平坦かもしくは傾斜が緩やかであった事が推定できる。

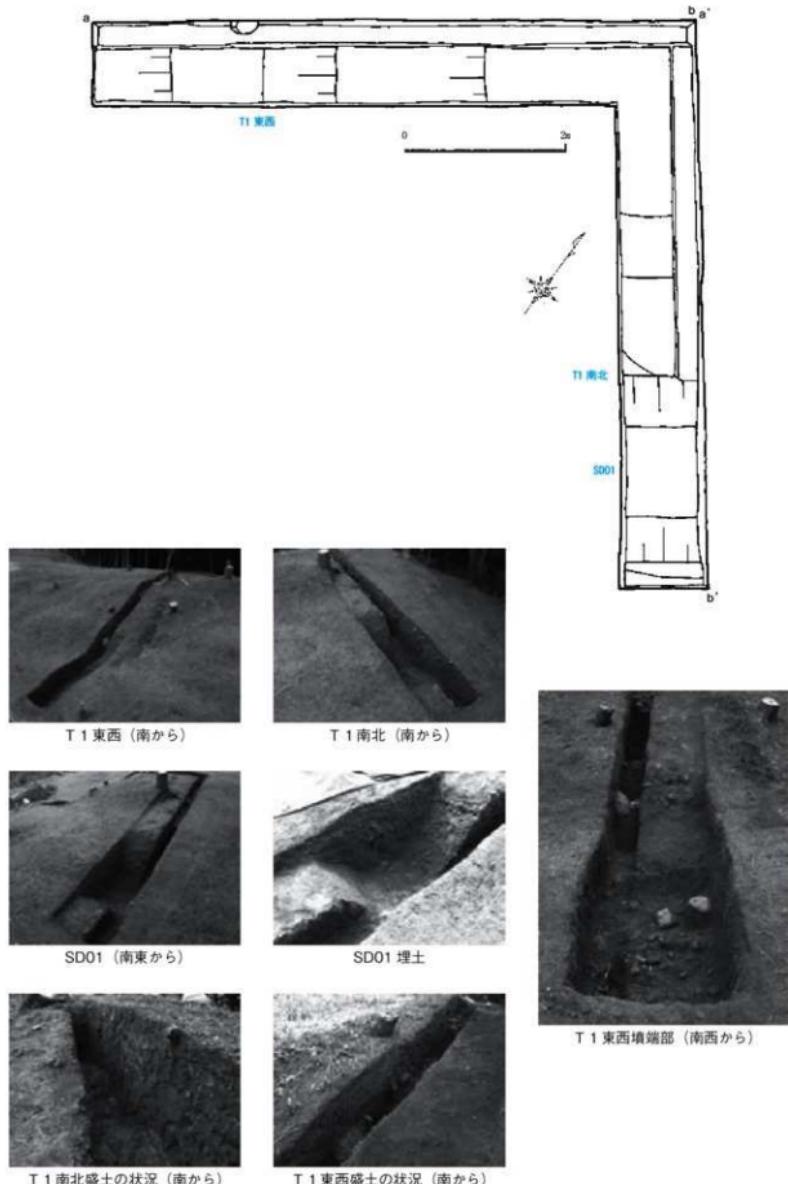
トレチ南端から 2.5 m 付近で東西へ延びると考えられる幅約 20 m の溝 SD01 を検出した。調査当初は、前方部と自然地形を区画した溝であると考えたが、SD01 を区画溝として考えると、溝の北側立ち上がりを墳端とみる事になる訳であるが、この場合、あまりにも傾斜が急である点、前方部の形状が非常に短く寸詰まりな形状になる点、そして SD01 の埋土が前方部の盛土と全く同質の土である点から区画溝であるかどうかについては疑問が残った。また、溝底部に腐食土層や細かい粒子の土層も認められない事から、溝が露呈した期間は非常に短いか、もしくは人為的に埋められた可能性があると考えられた。結果的には、第 4 次調査で T 1 南北をさらに 10 m 南へ延長した T 13 において区画溝と考えられる SD02 が検出されたため SD01 は墳端を定めた溝ではないと特定したが、SD01 の意図については非常に疑問が残る。ただ、後述する第 2 次調査 T 5においては、前方部南西コーナー成形の事前工程として地山の削り出しを行っている事が明らかとなった。この削り出し部分と SD01 が対応するのかもしれないとの見解をもっている。SD01 についても事前の輪郭付けに伴うものの可能性も考えられる。

堆積の詳細をみてみると、埋土は基本的に盛土とほぼ同質の土で構成されている。また、2 層と 20 層、4 層と 25 層はほぼ同質の土であるので、地山の堆積と考えられる 26 層から掘り込まれている可能性が高いと考えられる。

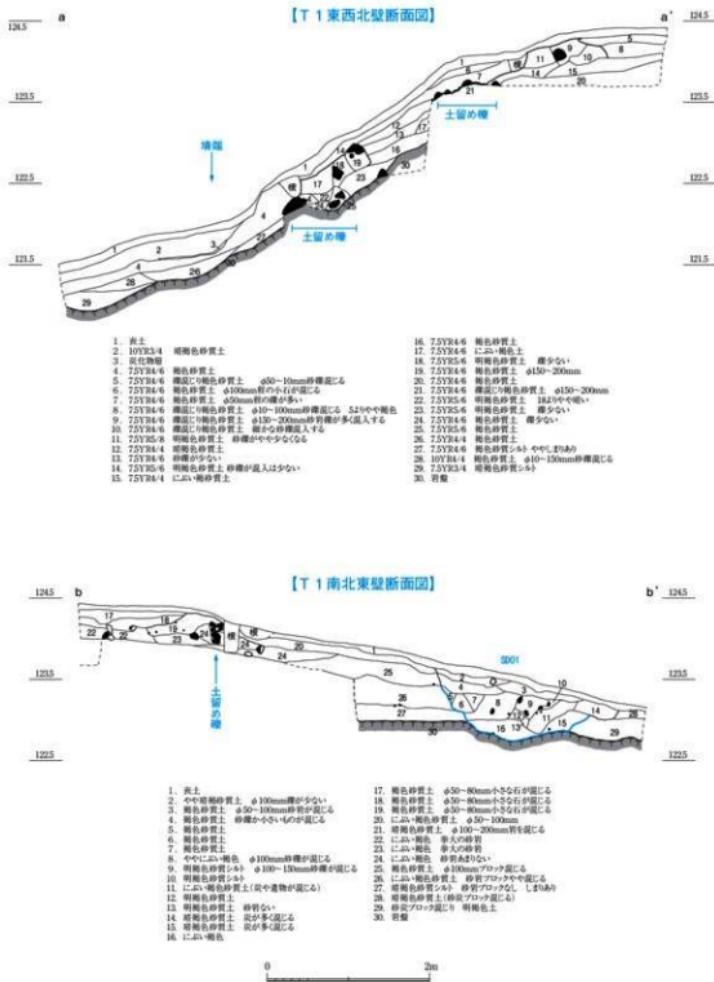
溝 SD01 を掘削した意図については不明な部分もあるが、調査の所見として、地山削平か基盤造成の段階で、墳形の輪郭付けのために掘られた溝の可能性を提示しておく。

築造工程については、T 1 の土層の観察から、地山の削り出しは行っているが、掘削は岩盤までは至っていない。地山頂上部は標高 123.5 m で平坦に削平され、その上に傾斜をつけるように 20cm ~ 80cm の盛土を行っている。また、盛土の際に、傾斜変換点となる部分には大きめの凝灰岩礫を据えて土留め用の土手を築いている。東西で 2ヶ所、南北で 1ヶ所確認した。西側の傾斜は非常に急傾斜となっている。

出土遺物は盛土内からの出土であり、碎片ばかりであるが、S D 01 から S 字状口縁台付壺片（第 27 図 53 ~ 59）が、盛土より広口壺や高壺脚部の破片が出土している。



第6図 前方部 T1 実測図① (S=1/60)



第7図 前方部T 1実測図② (S=1/60)

(2) T 2について〔第8図〕

主軸に直交するように配置した調査区で、幅1.0m、長さは東西が50mで設定した。調査着手後に墳端部が特定できなかったため、幅0.5m、長さ1.0mを拡張した。築造方法及びくびれ部付近の前方部東側の墳端を特定する事を目的とした調査区である。

土層の観察から盛土の前段階として地山の削平を行っている事が分かった。頂部は標高123.8mで平らに削平し、傾斜面については階段状に岩盤を削り出して整形している。

岩盤上に20～60cmの盛土を行って墳形を成形している。完成時の墳頂部の標高は約124.5mと推定される。東の傾斜は丘陵傾斜に沿って、岩盤削り出しがなされ、その上に盛土が施工されている。墳丘斜面の傾斜角度は頂部で約30度、墳端部分は傾斜が緩く約15度を測り、トレンチ東端から2.5m付近から東はフラットな面となっている。墳丘傾斜は西面と比較して緩やかな傾斜である。東側墳端部の標高は123.1mを測る。

盛土は、T 1で見られたような礫による明確な土手状の盛土は無いが、頂部は外縁部から丁寧に盛土しているものと思われる。墳頂部は10cm程度の単位で薄く盛っている。また、墳頂部の盛土には拳大の凝灰岩が多く混入するが墳端部は礫があまり混入しない。

トレンチ西端から1m付近で直径1.0mの土坑を検出したが、埋土に礫の含まない暗褐色土であり、後世の掘り込みと思われる。時期については特定できなかったが、T 8で検出した中世遺構の埋土とよく似ている。

第4節 第2次調査（平成22年度）

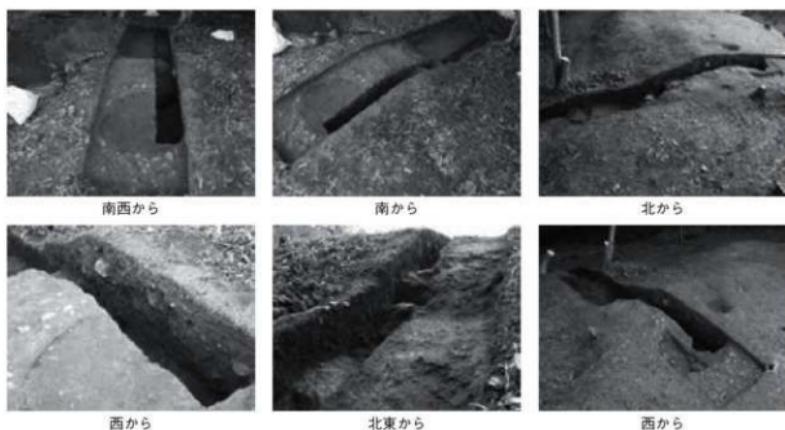
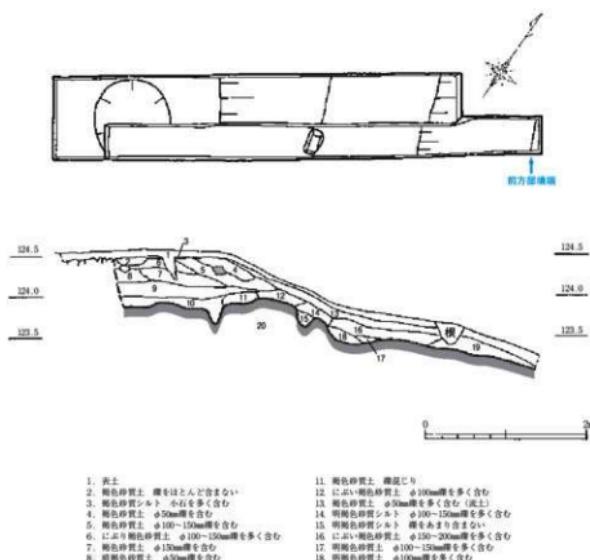
(1) T 3について〔第9図、第10図〕

T 3はくびれ部の形状や構築方法に関する情報を得るために、広範囲に面的な調査区を設定した。調査区は主軸と並行して設定している。調査面積は36.0m²を測る。

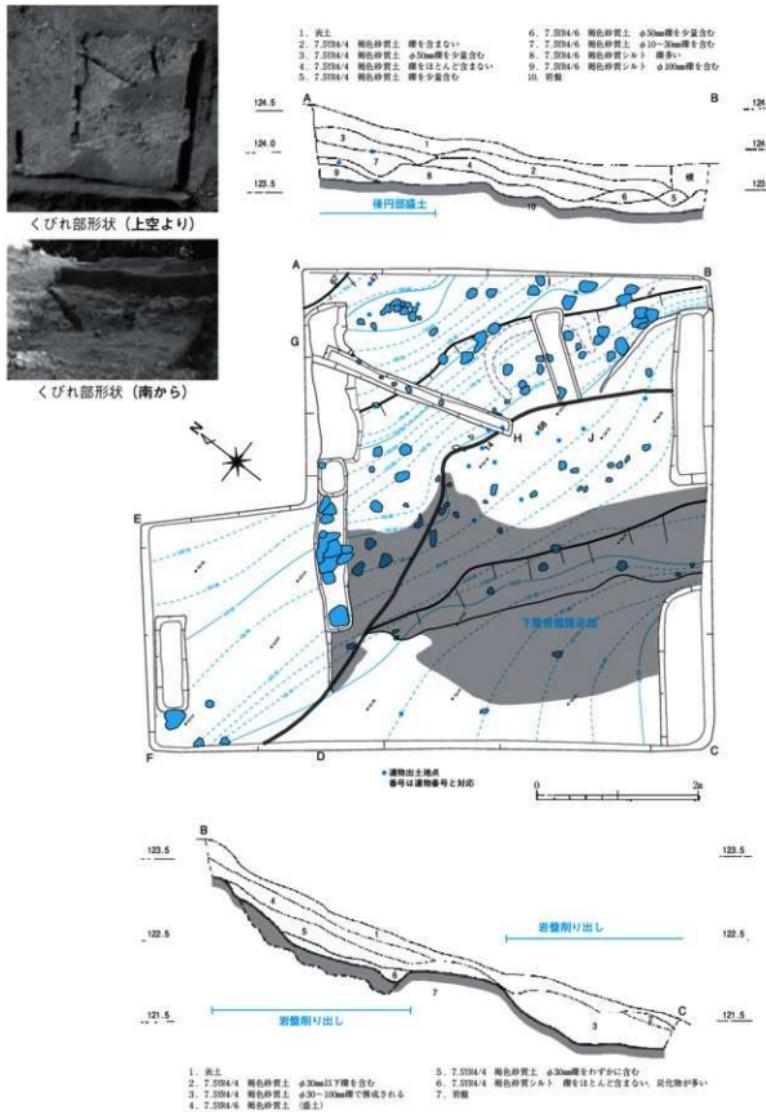
10～20cm程度の表土を除去すると、直径5～20cmの凝灰岩角礫を多く含む面が検出され、盛土と認定し、墳形の検出を行った。この検出過程で、前方部側の盛土がかなり流れ出したり、崩落していることが分かった。一方、主丘部については盛土が良好に残存しており、比較的の形状を留めているものと推測された。復元される前方部の傾斜角は40度と、かなり急傾斜であった点が要因であろう。また、主丘と前方部の接合部付近は盛土に岩盤由来の凝灰岩角礫が多く混入されており、岩盤と盛土と流土の判別を面的に行うのは非常に困難であった。そこで盛土検出の途中で、調査区南東壁（断面図B-C）と、調査区のほぼ中央（断面図A-D）に沿ってサブトレンチを掘り下げ、堆積の確認をしたところ、風化岩盤を削りだしておおまかな形を作出した後に、岩盤由来の凝灰岩を混入して盛土し、墳形を成形している事が分かった。くびれ部の接合部周辺や前方部側は特に直径20cm程度の凝灰岩角礫を非常に多く含むため、風化岩盤と盛土の境界が面的に把握しづらい状況であった。

そこで、くびれ部の形状を把握することを優先し、流土や盛土を慎重に除去しながら墳形の洗い出しに努めた。結果的にくびれ部の接続部から前方部側は、一部岩盤まで、または風化岩盤直上に盛った凝灰岩礫の混じった盛土まで掘り下げることとなった。

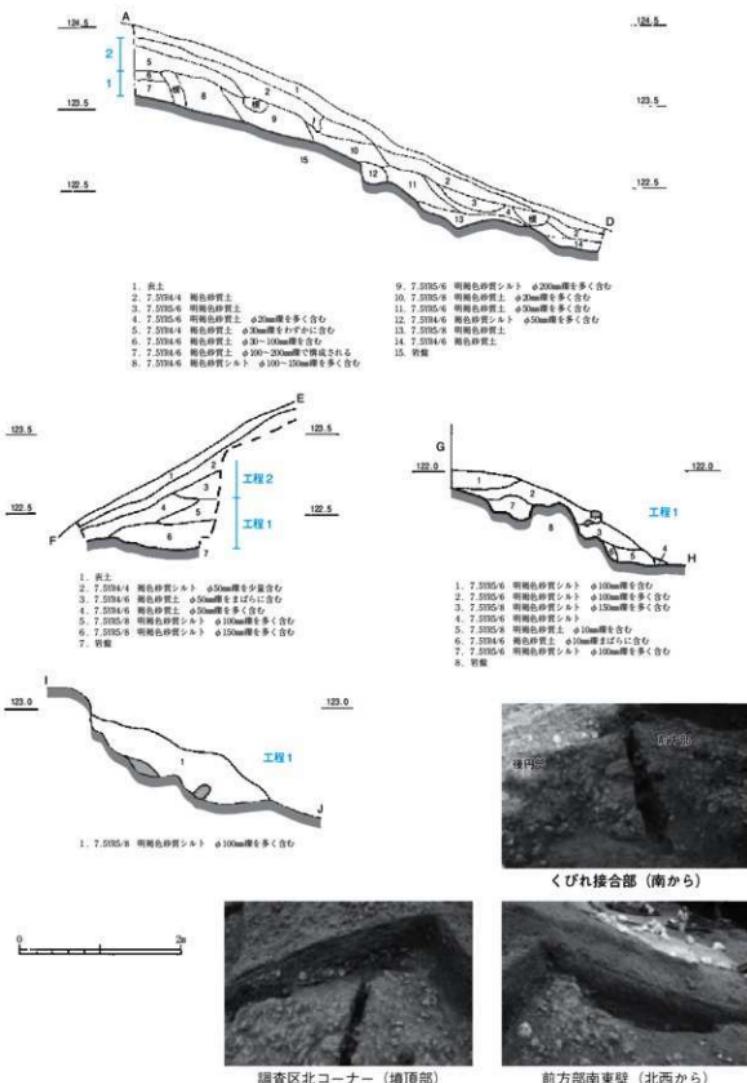
検出したくびれ部の平面形は、主丘部が緩やかに弧を描きながら前方部に接続している事が分かった。岩盤削り出しの形状も方形となるような明確なコーナーを形作る意図は確認できなかったため、やや不整形であるが主丘部は円形の可能性が高いと判断した。また、接合部において前方部から後円部へ盛土が連続している事を確認したため、T 3調査時点で「前方後円形」である可能性がかなり高まった。



第8図 前方部T 2実測図 (S=1/60)



第9図 くびれ部 T 3 実測図① (S=1/60)



前方部と後円部の接合部分は直径20cmの凝灰岩角礫を裾部に割り付けて成形しており、比較的良好な保存状況であった。接合点は角を作るようにはば直角に割り付けられている。この接合点は、頂上部調査区壁の土層断面A-Bで確認した後円部の盛土3層・7層の接合点との位置関係も整合性を保っているので、原位置と考えて問題ないだろう。

築造方法についてであるが、盛土の前段階として、地山の整形を行っている。地山整形は頂上部では風化岩盤まで、裾部では下層岩盤まで及んでいる。頂上部はおよそ平坦に削平し、側面は前方部で40度近い傾斜角をつけ、裾部に至っては幅1.1～1.2mの緩やかな平坦面を削り出している。裾部は風化していない下層岩盤に至るが、前方部の形状を作り出すことと平坦面を確保する事を意図して、下層岩盤も意図的に削っていると思われる。築造当初はおそらく平坦部から墳丘裾にかけては、下層岩盤が露呈している状況（第9図トーン部分）であったと推測される。意図的にくびれ部にテラス状の平坦面を作り出したものと思われるが、この平坦面上に堆積する土層断面図B-Cの6層には炭化物が多く散布している。平坦面の裾部付近では赤彩を施した壺と思われる破片（第25図14）や廻間式期の土器や石鏃（第27図68）が出土している。

盛土の工程は大別すると2工程に分かれる。

前段階：地山の削り出しによる墳形のアウトラインの作出。

工程1：整形した風化岩盤上に岩盤由来の直径5～20cmの凝灰岩角礫を混入した明褐色でやや

粘性のある土を墳丘の裾部から順に20～40cm盛土する。（基本層序：盛土③④）

工程2：直径5cm程度の凝灰岩角礫を混入した褐色系の砂質土を20cmほど盛土する。（基本層序
盛土①）

前方部側では、工程2の盛土の流出が激しかった。土層断面B-Cの3層は、おそらく早い段階で工程2の盛土が流れてしまったものと思われる。盛土は基本的に、裾部を盛土した後に頂上部から何段階かに分けて行っている。この際に、後円部と前方部の接合する辺りには凝灰岩角礫を多く混入して入念に形作っている。

次に前方部と後円部の盛土割付の前後関係については、工程1の裾部盛土において後円部を先に割り付け、そこに前方部の裾部盛土（土層断面図G-H 3～6層）を接合している状況が平面的に確認することができた（第10図上段写真）。

頂上部付近の盛土については調査区北東壁の土層断面A-Bで確認を行った。地山整形は岩盤まで及んでおり、後円部から前方部へ向けてやや傾斜を付けており、断面図中央やや後円部寄りのあたりで若干の段を削出しているようにもみられる。元々の地山の地形に沿うような形であると思われるが、段の意味を推測する材料は持ち合わせていない。岩盤上にまず後円部側への盛土9層が行われている。また、7層と3層の関係、3層と2層の関係をみても後円部の盛土を先に施しているようである。裾部の割付も後円部が先であるとした点とも整合するものであり、後円部を先に成形するという意図があると考えている。

出土遺物は頂上部、盛土9層の上面で砾石（第27図67）が、7層中で高杯脚部（第26図47）が出土している。砾石は変成岩系の石材で、ほぼ全面に使用痕と思われる細かな擦痕が残っており、使い込んだものである。出土位置は最終盛土より前の工程である後円部基盤造成の盛土（9層）上面からの出土であることから、所属時期は古墳築造よりも以前であると言える。いわゆる細砾と呼ばれる鉄製品などの仕上げに使われるものと推測される特殊な遺物であり、出土位置がくびれ部である事を考慮すると盛土の過程で意図的に遺棄または混入した可能性も想定しておく必要がある。とするならば、盛土に使

用品を混入させる意図を想定させるものであり、その他の土器片も同様に何らかの意図を持って工程の節目ごとに混入させている可能性も視野に入れておく必要があるのではないだろうか。

T 3での出土遺物の総数は18点と少なかったが、出土土器の年代は週間I式からII式の範疇であると思われる。

T 3で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・岩盤削平面……標高 123.2 ~ 123.7 m
- ・前方部墳端……標高 122.3 ~ 122.5 m
- ・後円部墳端……標高 121.9 ~ 122.5 m であった。

(2) T 4について〔第11図〕

T 4は後円部西端の特定と墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅10m、長さ85mで、調査面積は8.5m²を測る。

トレンチ中央部から下半で地山堆積物と風化岩盤を検出した。31~33層が地山堆積物で、34層が風化岩盤である。岩盤及び地山堆積物がおよそ28度~30度の傾斜角で堆積しているのに対し、上層の盛土はほぼ水平に堆積している。この堆積角の境目は28・29・30層下部の地山が接する部分にあることが分かる。このことから標高123mの辺りで地山を削平し平坦部を削出して、その上に水平に盛土を行った事が分かる。地山削平の標高は前方部においては123.5~123.8mであるので、近い高さであり、前方部の削平と高さを揃えている可能性は十分考えられる。いずれにしても非常に大規模な造成を行っていることは間違いない。

古墳が立地する丘陵はやせ尾根状の地形であり、単純に丘陵頂上部を削平してもおそらく必要な面積は確保できないだろう。特に当該古墳の後円部は丘陵より西へ迫り出して構築されている。西から見られる事を意識しているのだろう。西側へ迫り出して後円部を形成する場合に必要な面積を作出するには、盛り足しを行う必要があり、T 4の地山の削平や水平な盛土工程はこのことに起因すると考えられる。

水平な盛土は大別すると、直径5~10cmの凝灰岩角礫を含む褐色系砂質土（基本層序盛土①）と、礫を含まない暗褐色土（基本層序盛土②）が0.8~1.1mごとに互層状になっている。おそらく、この基本層序①と②で1単位として3工程で盛土されたものと推察する。

礫の多く含む土と、あまり含まない土を互層にするのは、墳丘に浸透した雨水の排水を考慮し後円部の崩落を防ぐために意図的に施工されたと思われる。土木的知見がうかがえる。

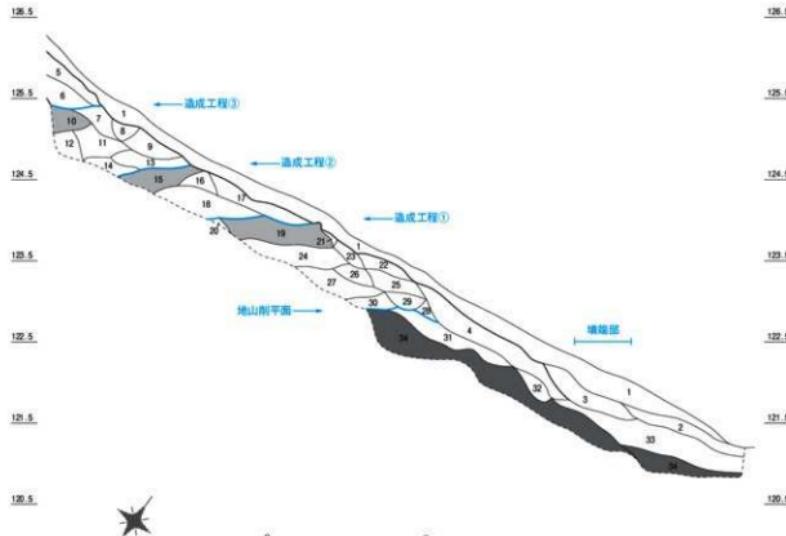
墳形をおよそ形作った後に、最終に礫のあまり含まない土を表面に盛土して墳形を整えている。

葺石や列石ではなく、墳端については傾斜角が急で土の流出があるため、盛土から明確に特定することは難しい。4層はしまりがある土であり最終盛土の可能性がある。3層はしまりがなく、流土の可能性が高いが4層と非常に似た土であり由来は同じであろう。以上の点から、ここでは3層裾部から4層裾部までの範囲を墳端と推定しておく。

土器の出土はトレンチの墳頂部付近で集中した。盛土工程③の盛土上層からの出土が多い。出土遺物は全て碎片で13点であり、高环片が多い。第26図37は有縫高环であり縫が比較的明瞭で、底部が平らになる。週間I式後半の様相がみられる。

T 4で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・基盤造成面……………標高 125.4 m
- ・地山削平面……………標高 123 m



1. 73YB4/6 表土
 2. 73YB4/6 しまりなし 粒性少ない 土上
 3. 73YB5/8 しまりややあり 粒性あまりない 土上
 4. 73YB5/8 しまりややあり 粒性少ない 土上
 5. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 特徴がない
 6. 73YB5/8 しまりややあり 粒性ややあり 小石多い
 7. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 帯はあまり含まない
 8. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり φ20~80mm碎岩塊を多く含む
 9. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 70mm以上大粒を含む
 10. 73YB4/6 しまりややあり 粒性あり やや破碎がかった土 遷移あり
 11. 73YB5/8 しまりややあり 固り気のある土 粒物あまり含まない
 12. 73YB5/8 しまりあり 粒性あり φ10~150mm碎岩塊を多く含む
 13. 73YB5/8 しまりあり 粒性あり φ30mm 破砕面を多く含む
 14. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 破砕面を多く含む
 15. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 破砕面を多く含む
 16. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり φ50~100mm碎岩塊多め含む
 17. 73YB4/6 しまりあり 粒性あまりない φ20~50mm 破砕面を多く含む
 18. 73YB4/6 しまりあり 粒性あり 小石を多く含む
 19. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり
 20. 73YB5/8 しまりあり 粒性なし φ100mm~ 破砕面から構成される
 21. 73YB4/6 しまりややあり 粒性なし φ50mm 破砕面を多く含む
 22. 73YB4/6 しまりややあり 粒性あり φ20mm~ 破砕面を多く含む
 23. 73YB4/6 しまりなし 粒性なし 破砕面を多く含む
 24. 73YB5/8 しまりややあり 粒性あり 帯はあまり含まない
 25. 73YB4/6 しまりややあり 粒性あり 帯はあまり含まない
 26. 73YB4/6 しまりややあり 粒性あり φ20mm~ 破砕面を多く含む
 27. 73YB5/8 しまりややあり 粒性あり 小石を多く含む
 28. 73YB5/8 しまりややあり 粒性あり 小石を多く含む
 29. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり φ20mm~ 破砕面を多く含む
 30. 73YB5/8 しまりややあり 粒性ややあり 小石を多く含む φ30mm破砕面を多く含む
 31. 73YB4/6 しまりややあり 粒性ややあり 小石を多く含む φ50mm破砕面を多く含む
 32. 73YB5/8 しまりややあり 粒性ややあり φ50mm以上破砕面を多く含む
 33. 73YB5/8 しまりややあり 粒性ややあり 田舎浜土
 34. 岩盤



填端部付近の堆積（北西から）



全景（北西から）

第11図 後円部西側T4実測図 (S=1/60)

- ・後円部西側墳端……標高 121.6 ~ 121.8 m
- ・墳丘傾斜角………38 ~ 40 度

(3) T 5について〔第12図、第13図〕

T 5は前方部コーナーを特定することを目的にやや広範囲に面的な調査区を設定した。調査当初は3.0m × 4.0 mで設定したが、調査委員会での指導により部分的に適宜拡張した。調査面積は16.4m²を測る。

10 ~ 20cmの表土及び10cm程度の流土と思われる土を除去すると、3 ~ 10cmの凝灰岩礫を混入する面を確認し盛土と考えた。一部後世の攪乱か風倒木の痕跡であろうか盛土が攪乱されている部分があったため、その部分を掘り下げてみると、盛土は10cm程度で、赤褐色の風化岩盤層と思われる堆積が確認できた。

葺石や列石は確認できないので、この段階ではコーナー部分を特定することは困難と判断し、北壁と東壁沿いにサブトレーニングを設けて掘り下がったところ、北壁・東壁ともに岩盤を削りだして整形していることが判明した。西面はおそらく地山を岩盤まで含めて削り出して墳端部を成形した後、岩盤の上に凝灰岩礫の混じる土を盛土して墳形を整えているが、前方部前面側は風化岩盤を削り出した後、端部に盛り足しを行っている可能性が考えられた。

そこで、全体を岩盤上面まで掘り下がったところ、岩盤と盛り足し部分の境目を検出し、前方部前面からコーナーかけては別の盛土で成形をおこなっていると考えた。

盛り足し成形部分は、やや粘性のある褐色系の東壁断面図5・6・7層と、拳大礫が混じる赤褐色系の東壁8・9・10層である。5cm以下の凝灰岩礫を含む土であり、上層の褐色砂質土を除去すると、緩やかな傾斜をもって隅丸のプランを検出する事が出来た。この隅丸プランの外縁付近で土器が多く出土しており、こうした状況からも当該部分をコーナーと特定した。

コーナーと前面部のみ地山を削り出した後であえて盛土を足して成形しているが、その理由を特定する材料は得られていない。ただ、T 5で検出した前方部前面は、傾斜角が15度~18度であり、前方部側面よりもかなり緩やかである。コーナー部分に至っては緩やかに下る傾斜はそのまま丘陵の傾斜に繋がっており、明確な「段」が存在しない。この点は盛り足しの理由を考える上で重要な点である。また、T 1においては、前方部前面では、基盤造成段階でSD01を掘削している。SD01は、西へ延長するとT 5の前方部前面の岩盤削り出し部分と完全には一致しないが近い位置となる。他のトレーニングの成果からも、盛土の前段階として事前に地山や岩盤を削り出すことで全体の輪郭づけを行っている可能性は高い。前方部前面も、盛土の前段階として事前に地山を一部削り出すことで、旧地形と古墳部分の境目をつける輪郭づけを行っている可能性は少なくない。その上で、改めて前方部前面とコーナー部分は緩やかな傾斜を意図して盛り足しを行って丁寧に成形したのではないかと考えている。

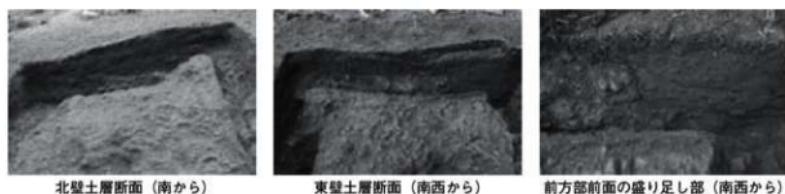
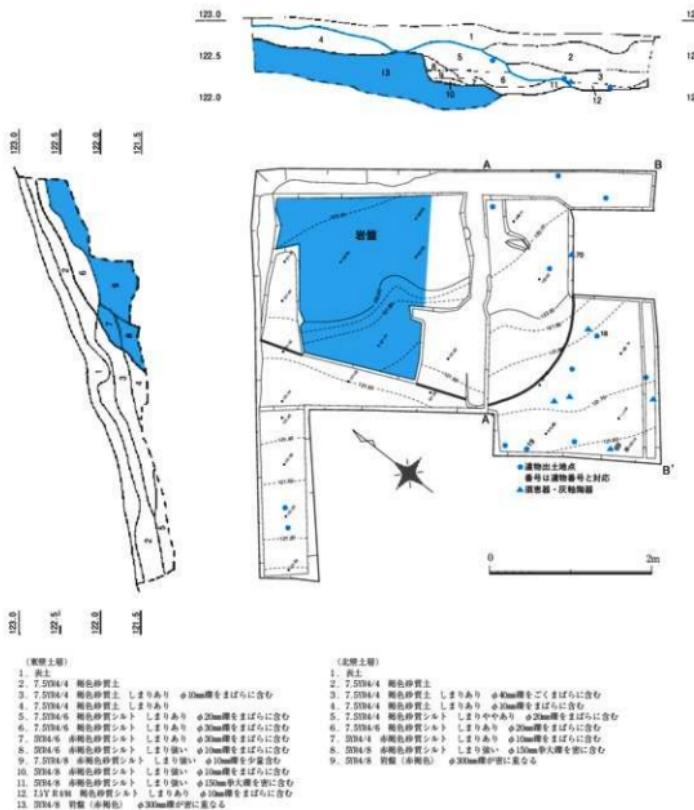
調査前の現況ではコーナー部分は埋没していたが、コーナーから緩やかに下る地山面では灰釉陶器(第28図69)が出土しており、平安時代まではこの面が露呈していたと考えられる。

出土遺物は土器が19点出土した。碎片が多く実測図を作成できるものは少ない。19点のうち須恵器3点、灰釉陶器3点が出土した。その他は弥生時代終末期~古墳時代初頭の土器である。

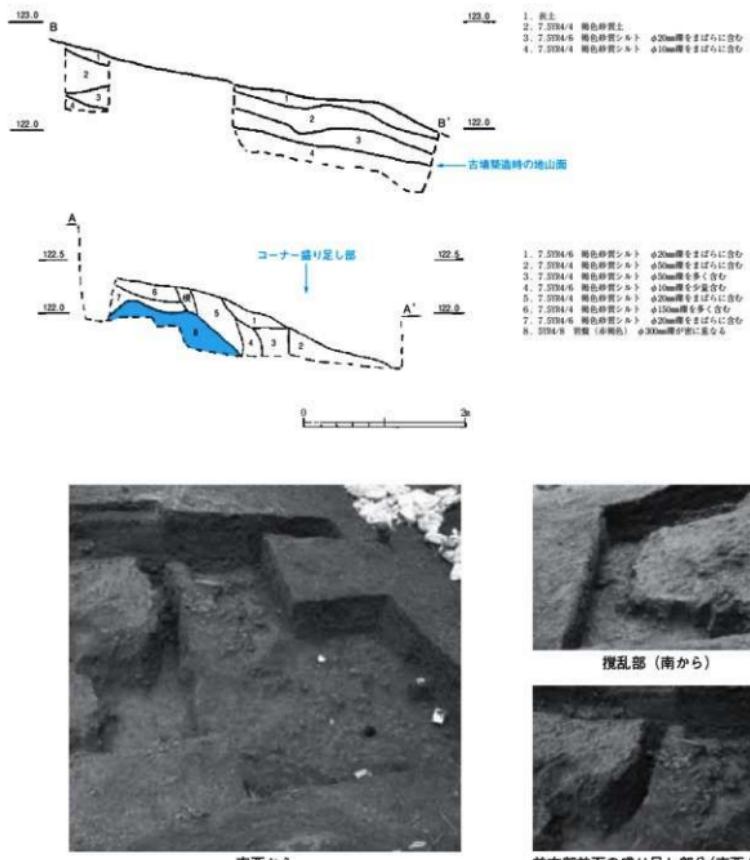
出土土器は盛土上またはコーナー外縁部の地山直上で出土することが多かった。コーナー外縁部では壺底部(第25図18・19)が出土しており、盛土上からは高坏片が出土している。

T 5で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・地山削平面………標高 122.7 m、



第12図 前方部コーナーT 5実測図① (S=1/60)



第13図 前方部コーナーT 5実測図② (S=1/60)

- ・前方部東側墳端……標高 121.5 m、コーナー部分が 121.7 m、前面が 122.2 m
- ・墳丘傾斜角…………東側が 33 ~ 39 度、前面が 15 度 ~ 18 度

第5節 第3次調査〔平成23年度〕

(1) T 6について〔第14図〕

T 6は後円部の北側の墳丘端部を特定することと、墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅 1.0 m、長さ 9.0 m で、調査面積は 9.0 m²を測る。

調査前の現況で、標高 125.5 m 付近で幅 1.2 ~ 1.5 m の段（平坦面）があることを認識していた。この段（平坦面）は、西側には認められず、北西から東側のみに確認できた。

墳丘端部は地山堆積物 19 層を削り出して作出している。同じく地山堆積物である 18 層の上面を削平して平坦部を造成して、それを土台にしてその上に水平に盛土を行っている。この状況は T 4 で確認された構築方法と同様である。水平な盛土工程は、17 層並行と 16 層並行の 2 段階に分けて行われており、16 層並行を墳丘のやや内側、中心寄りに盛土したために段（平坦面）を作り出されている。おそらく現況で認められるように後円部の北西から東側にだけ帯状に巡っているものと推定される。盛土は明らかに内側にずらしており、意図的に平坦面を作っているものと推定できる。

T 4 の項でも触れたが、水平盛土工程は、やせ尾根上に古墳を作るための基盤造成工程である。言い換えれば墳頂部に設置する埋葬部の面積を確保するための基盤造成であると考えている。後円部の水平盛土は、後円部西側の T 4 では 3 工程であったが、T 6 では 1 工程少ない。これは地山削平面が T 4 で 123.0 m であるのに対し、T 6 では 124.7 m である事に起因する。すなわち、元来の旧地形を考慮しながら、そして制約されながら、必要な盛土の量や工程を調整しているものと思われる。

16 層より上層は盛土の様相が変わる。盛土の単位が細くなり、周辺に土手状の盛土を形成するようになっている。また、16 層上面は、標高 125.8 m であり、後述する T 8 で確認した主体部の棺底のレベルとほぼ整合する。これらの点からも 16 層・17 層並行の盛土が、埋葬部を作り出すための基盤造成工程であることが読み取ることができる。

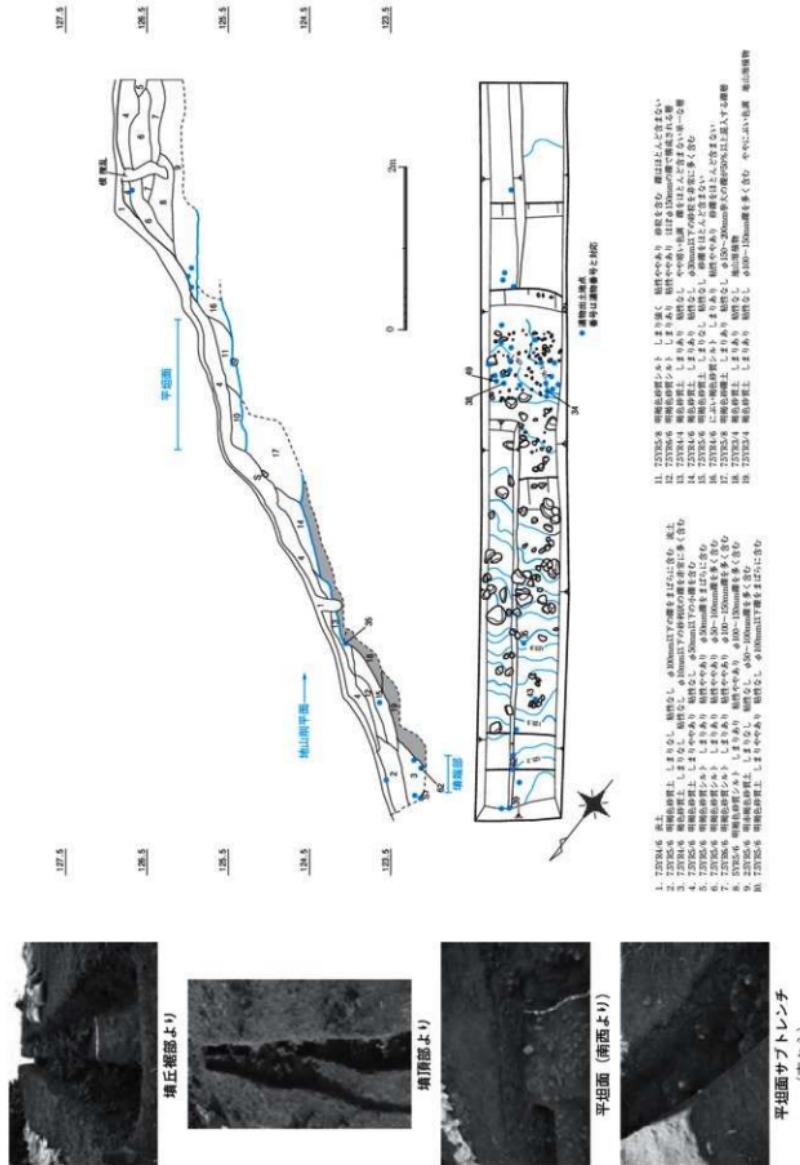
基盤造成の過程で作り出された平坦部にはしまりのある粘性土 10・11 層が堆積しており、他の盛土とは若干異質である。また、この部分からは土器が多く出土しており、すべて 17 層並行の上面あるいは 11 層中に包含されている。第 26 図 34・38・49 など平坦部で出土する土器は高壊片が多い。この点からもこの平坦面は意図的に作出している可能性が高い。

T 6 で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・墳頂部標高…………標高 125.7 m
- ・基盤造成面…………標高 125.8 m
- ・地山削平面…………標高 124.7 m
- ・後円部北側墳端……123.0 m
- ・後円部傾斜角…………墳端部分が 40 度、墳丘が 30 度

(2) T 7について〔第15図〕

T 7 は前方部と後円部の取り付きと、後円部南側の墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅 1.0 m、長さ 10.0 m で調査区を設定し、調査を経てトレンチ北端部付近を 0.6 m 強張した。調査面積は 10.6 m²を測る。



第14図 後円部北側T6実測図 (S=1/60)

10～20cmの表土を除去すると、トレンチ北端ではT 8に繋がる墳頂部の周提状盛土（4～8層・10・11層）を検出した。周提状盛土の外側、トレンチ北端から1.2m～7.2mまでの墳丘斜面では拳大の凝灰岩角礫を混入する赤褐色の粘性土（9・12層）が検出され、墳丘の最終盛土と特定した。古墳表面を飾る土として人為的に疊と赤褐色の粘性土をブレンドして盛土しているものと思われる。

トレンチ北端から7.2mの地点で、墳丘の傾斜変化点がある。ここより前方部側は傾斜が緩やかになる。後円部の盛土である12層・16層がこの傾斜変化点で収斂する事を考えると、墳丘上段における後円部盛土の境界意識はこの点にあると思われるが、くびれ部で確認した墳丘下段における前方部と後円部の境界とは整合しない。傾斜が緩やかになるスロープ状の部分を後円部に含めると、くびれ部の境界点と整合する。以上の点から、傾斜の緩やかな部分は後円部のスロープ状の接合部であると理解したい。スロープ状接合部の盛土13層はそのまま前方部の盛土となっているが、くびれ部との位置関係を考えると、スロープ状接続部は後円部に含まれるものと考える。

旧地表土の堆積物は認められないので、地山の削平は行われていると思われるが、岩盤までは及んでいないものと推定される。風化岩盤上にある17層の上面の標高は124.7mであり、T 6の地山削平面のレベルと一致する。このことから17層は地山堆積物であり、17層上面が地山削平面であると考えられる。

地山削平後、まず後円部側に盛土（16層）が行われており、後円部の造成から着手したものと思われる。前方部盛土へ繋がる13層の盛土を行った後に、後円部の最終的な盛土を施している。

標高126.0mあたりで後円部墳丘に平坦面が認められる。12層を掘り下げなかったため詳細は不明であるが、同様の平坦面はT 6でも見られる。標高レベルも同様であることから対応関係にあることは整合性があることからT 7の平坦部も、T 6で確認したように基盤造成に起因する平坦面と推定した。

T 6については、特に墳頂部をもう少し掘り下げを行って墳丘構築過程を根拠付ける必要があったと感じている。堆測の部分も多いが後円部から前方部にかけての構築工程については、T 6、T 8などの他のトレンチの成果と照らし合わせて下記のような工程を提示する。

- ・第1段階：前方部から後円部にかけて地山を削平して盛土の準備をする（17層上面）。
- ・第2段階：後円部に盛り足しを行って標高125.9m付近まで基盤造成を行う（16層、14・15層）。
- ・第3段階：墳頂部に周提状盛土を行い埋葬部を構築する（4～10層）。

スロープ状接合部と前方部に盛土を行う（13層）

- ・第4段階：凝灰岩礫と粘性土を混ぜて最終的な盛土を施す（9・12層）。

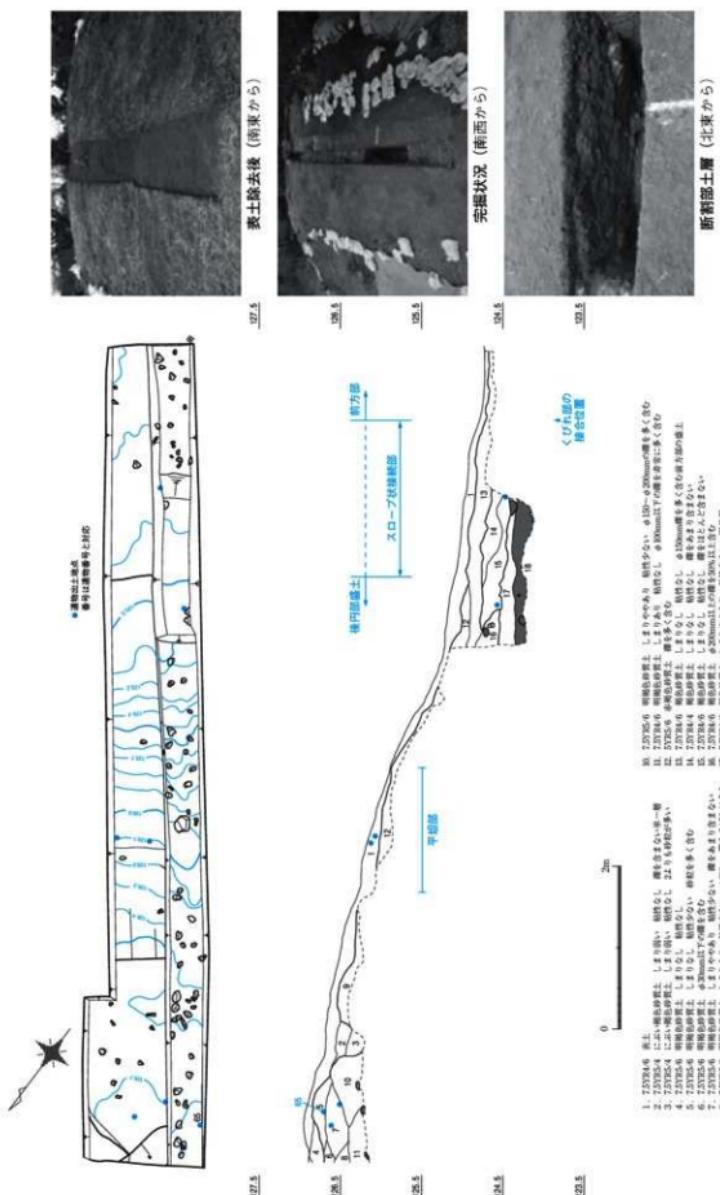
第3段階の墳頂部の盛土と前方部盛土の前後関係は直接は判断できない。しかし、前方部の盛土よりも後円部墳頂部の基盤造成の方が先行する可能性が高いという情報を得られたことは収穫であった。

また、13層がほぼ水平であるのに対し、14・15層が16層と同様の傾斜を有しているの事から、14・15層は第2段階の帰属と考えた。

遺物は、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が出土している。小破片が多く実測に耐えないものが多くあったが、地山17層上面、平坦面盛土上や平坦部、墳頂部周提状盛土から土器が出土している。

T 7で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・墳頂部標高………標高126.9m
- ・基盤造成面………標高125.9m付近
- ・地山削平面………標高124.7m
- ・後円部北側墳端………標高123.0m



- ・墳丘傾斜角……………22度、スロープ状接合部が17度。

(3) T 8について【第16図、第17図、第18図】

T 8は後円部墳頂の墓壙プランと埋葬部構築方法を調査する目的で設定した調査区である。調査前の知見として、墳頂部のはば中央に幅約1.0m、長さ約2.5m、深さ約40cmの窪みがあり、盜掘を受けていることが想定された。盜掘坑の周囲は土手状に若干高くなっており、掘削した排土が周辺に堆積していた。

第1・2次の調査において、当該古墳が3世紀代の初期古墳であることが想定されていたため、石櫛や粘土櫛が築かれない場合も考えられた。このため検討委員会において、狭小なトレント調査ではなくやや広範囲に面的な調査区を設定することが決まった。

調査前の計画として、墓壙プランを慎重に検出する事、墓壙検出後はサブトレントを設定して掘り下げて埋葬主体部の情報や保存状況を把握する事、埋葬主体部の発掘は保存状況が良好の場合は着手しない事とした。

調査当初は、後円部の中心に設定した杭(T3-2)を中心に、主軸を基準に5m四方の調査区を設定した。墓壙検出後に、北東及び南西に調査区を拡張し平面プランの全体形の検出を行った。また、2次調査のT 4と土層接合を行うため西へトレント状に延長してT 4に接続した。

5～10cmの表土と、盜掘坑の周辺の排土を除去すると、調査区周辺部で粘土質のしまった土に直径10cmの凝灰岩角礫を非常に多く含む土が検出された。中央部分は15～20cmの拳大礫が混入するもの。周辺部よりは礫は少ない粘性土であった。この土質の違いは墳丘盛土と墓壙埋土の質的差を反映するものと考え、調査区を拡張しながら、周辺部分の礫層の境界を慎重に検出した。全体の平面形は、非常に不整形であるが、およそ正方形の隅丸方形を呈する事がわかり、これを墓壙と考えた。

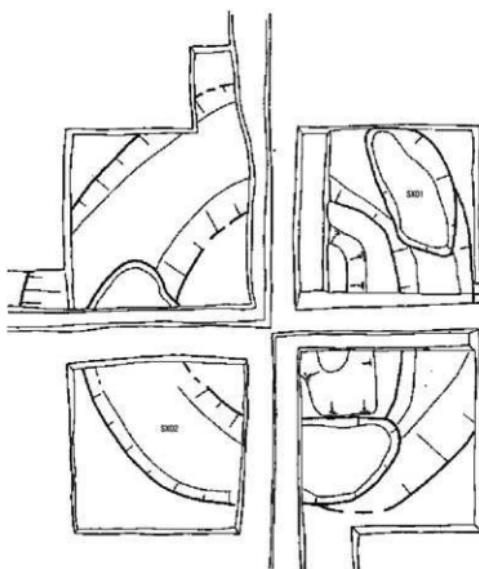
【中世墓について】【第16図】

墳頂部からは中世の遺物が出土しており、これらが盛土とは明らかに異質な暗褐色砂質土に包含される事がわかり、中世の改変が考えられた。遺構の検出のために精査したところ、弧を描くような梢円形の浅い土坑2基を検出しSX01と02とした。また平面的には捉えられないものの墳頂部には中世土坑SXの埋土と同様の土が部分的にみられる。この土が中央部分にはみられない事から、墳頂部をドーナツ状に浅く掘削しているものと考えられた。SX01・02もこの中世の掘り返しであり、本来はひとつの遺構であろう。SX02からは陶製の經筒容器(第28図74)が出土していることから墳頂部にマウンドをつくり經筒を埋納した中世墓が築かれた可能性が考えられる。

【墓壙の構築と平面形】【第17図、第18図】

墓壙推定プランと中世遺構が重なっている事がわかつたため、墓壙の正確な平面形を特定するために、中世遺構の埋土除去と、面的な掘り下げを行った。同時進行で墓壙の断面形を特定するために、土層観察用の十字畦沿いにサブトレントを設定し深く掘り下げた。

サブトレントでは土層断面で墓壙の立ち上がり(断面図青ライン:A-A'断面16～19・23層、44層、B-B'断面18・21、14層)を確認した。この立ち上がり部分から内と外で土質が明らかに異なった。外は10～15cmの礫が多く混じるが、内側は粘土質で礫が小さく少ない。また、明確な墓壙の掘り込みの痕跡を確認できない点や、土層の立ち上がり(断面図青ライン)が緩やかである点、立ち上がり傾斜と



中世遺構分布図 (S=1/60)



中世遺構埋土（南から）



中世遺物出土状況



中世遺構検出状況



盛土に混じる

第16図 塗頂部T 8実測図①

同じように土層が内側へ傾斜していることから、掘り込み墓壙では無い可能性を想定した。土層の立ち上がり（断面図青ライン）は、墳頂部の盛土へ繋がるものであると推定し、墳頂部の基盤造成後にその外側から周堤状に盛土しているものと考えられたため、墳丘構築の過程で埋葬を行う「構築墓壙」であると推定した。

その後、T 4 土層図との接合結果や、次年度のT 10 の調査でも周堤状に盛土が行われていることが確認され、T 8 で確認した墓壙の土層立ち上がりが周堤状盛土に繋がることが確認できた。

墓壙の平面形については、周堤状盛土の上場と思われる面まで掘り下げて特定した。平面形は多少中世墓の影響を受けているものの、当初検出したプランがおよそその平面形であると考えら、5.3～5.5m四方の、丸に近似する隅丸方形の平面形であると特定した。

隅丸方形の平面プランの軸は、古墳の主軸とは斜軸の関係にあることが分かったが、これについては、この後の掘り下げで検出した埋葬主体部の傾きとほぼ同じ軸であることが分かった。このことから検出した墓壙の平面形が埋葬主体部とも整合性を保つことが確認できた。

【埋葬主体部について】

土層を観察するなかで、盜掘坑の部分で盛土や埋土が下方へ沈んでいることが分かった。つまり、盜掘されるよりも以前に同様の部分が窪んでいた可能性がある事が考えられた。おそらくその窪みをねらって盜掘坑を掘削したのだろう。さらに土層断面C-C'において、断層のような「土層のずれ」が認められた。これらの現象は、埋葬主体部の陥没によるものであると想像され、埋葬主体部の位置特定の有効な情報と考えた。

主体部を損壊することなく位置を特定することは非常に難しい調査であった。周堤状盛土や墓壙埋土をできるだけ損壊させること無く、最小限の掘削で特定するよう計画し、慎重に調査を進めた。

まず土層観察用の十字畦沿いで掘り下げたサブトレンチにおいて、石柳や粘土柳は確認されなかった。墳頂部から1m程掘り下げたところで墓壙埋土とは異質なびい褐色の粘性土（46層・48層）を確認した。位置・方向が土層断面C-C'の「土層のずれ」部分へ繋がるため、主体部に関連する土質と考えた。

この状況を検討委員会において検討した結果、主体部は木棺直葬の可能性があり、平面形を検出することが指導された。サブトレンチの掘り下げ及び、T 8 西半は部分的に掘り下げ、東半は盜掘坑の壁面精査により主体部を特定することとした。

盜掘坑は先細りになっているが、主体部の一部に掛かっている可能性があったため、盜掘坑埋土をギリギリまで除去し、盜掘坑の断面を精査したところ、棺部と考え得る断面を特定した（写真図版5）。さらにサブトレンチの土層や、平面的な土質の違いを頼りに、平面形もおよそ特定することができた。

石柳・粘土柳は無く、木棺直葬であり、今回検出したのは木棺埋設部の上面であると考えられる。棺本体については今回確認することはできなかったが、おそらく棺本体は腐朽しており、棺体の埋土で平面形を検出したものと思われる。平面形は、およそ長方形で平面形で北東部がやや膨れた歪な形となっている。盜掘坑部分は棺の腐朽による陥没が認められるが、北東部の平面形の歪みもそれに起因するものかも知れない。幅は1.0m、長さ2.6～2.7mの長方形の木棺で、北側の小口はやや幅広な1.2～1.3mの可能性がある。土層断面の形状からは棺部の厚さは35～45cmで、舟底形木棺を想定する。棺の主軸はN 22～23°-E と推定し、北側小口が幅広である可能性を考えると頭位は北北東と想定される。

棺底のレベルは土層断面から125.7mと想定した。T 6、T 7 で想定された基盤造成面の標高が125.7～125.9mであり、翌年に実施した4次調査T 10 の調査成果においては基盤造成面の標高は125.6～

125.7 mと確認されたので、棺底レベルとの整合性が保たれ、埋葬主体部の解釈についての妥当性が確認できた。

埋葬主体部については北東隅が盜掘坑の影響を受けているだけで、その他は保存状況が良好であると判断されるため、今回の調査では主体部内の発掘調査は実施せず埋め戻した。埋葬主体部に伴う遺物は確認されなかった。埋葬主体部内の調査は今後の課題である。

【墳頂部の構築方法】

以上の調査成果を元に墳頂部の構築方法を復元する。

①基盤造成を行った後に、造成面の外側から周提状に盛土し、中央部分を盛り残す。

……A-A' 断面図 16～23層、25～31・44層、B-B' 断面図 15～23・39・41

②中央部分に棺を据える。

③棺と周提状盛土の間を小礫混じりの粘性土で埋める。

……A-A' 断面図 39～43層、45層、B-B' 断面図 38・43、34～37・40層

④10～15cmの凝灰岩礫を混ぜた土で棺の上面を埋める。棺の直上部分の埋土は粘性土で単位が厚く(約20cm)角礫が多い(A-A' 断面図 33～38層、B-B' 断面図 27・32層)。一方、周提周辺は厚さ10cmで水平に堆積し、比較的細かい礫が多い(A-A' 断面図 13・14・24層)。土層の重なりから見ても、中央に据えた棺の上場から埋めた(主体部上盛土)可能性が高いように思われる。

⑤最後に細かい礫が混じる明褐色土を墳頂に盛土を行う。

確認された諸属性については以下の通りである。

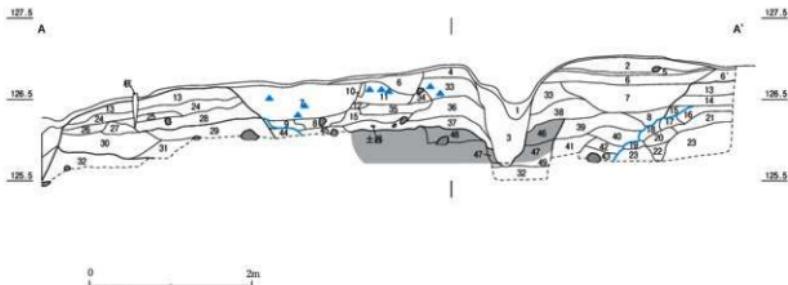
- ・墓壙平面形……5.3～5.5m四方の隅丸方形
- ・主体部種別……木棺直葬
- ・主体部規模……長さ2.6～2.7m、幅は南小口1.0m、北小口1.2～1.3mの長方形
- ・主体部主軸……N-22～23°-E
- ・棺底レベル……125.7 m

【遺物出土状況について】

中世墓に伴うものと思われる山茶碗と陶質経筒が出土している。

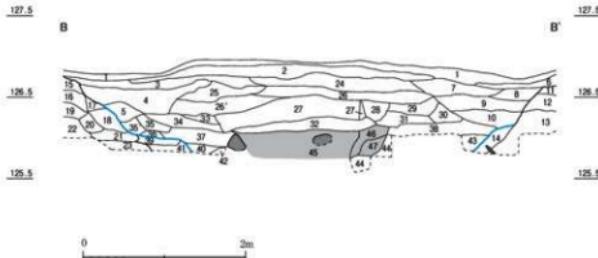
弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器は444点出土しており、墓壙埋土からの出土が多い。しかし破片が多く、接合率は低かった。感覚的にはあるが墓壙の下層からの出土が多い。所属時期は廻間I式～II式期に収まるものである。盛土中から土器が出土する現象が、意図的なものか混入なのかを特定する情報を得ることは出来なかつたが、土質の変わり目や下層からの出土が多い傾向は感じられた。

赤彩のある有孔直口短頸壺(第25図1)は破片で出土したが、接合により上半部を復元できた。墳頂部の最終盛土と中世遺構埋土より出土した。おそらく墳丘が完成した時点で墳頂部に据えられた供献土器と思われる。廻間I式～II式期に見られるもので、中濃地区では廻間I式期の方形周溝墓から出土することが多い。古墳の築造年代を決める最も有力な遺物であると考えている。



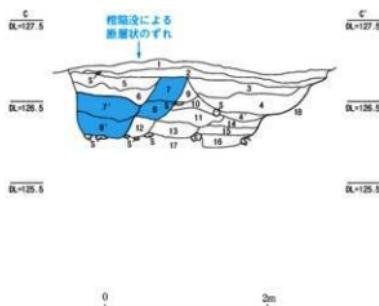
1. 7SYT4-4 黄土
2. 7SYT4-4 明褐色砂質シルト 地下水なし。粘性なし。φ30~100mmの層が多く含む(薄透徳土)
3. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水なし。粘性なし。φ50mm以下の層が多く含む(薄透徳土)
4. 7SYT5-6 明褐色砂質シルト(薄透徳土)
5. 10SYT4-2 黄褐色砂質土(薄透徳土)
6. 10SYT4-2 黄褐色砂質土(薄透徳土)
7. 10SYT4-3 黄褐色砂質シルト 地下水なし。粘性なし。砂層など多く含む(半固・底固強度土)/中等SX2(強土)
8. 10SYT4-3 にじみ黄褐色砂質シルト 地下水やや少。粘性なし。φ30~50mmを多く含む(中等SX2(強土))
9. 10SYT4-3 黄褐色砂質土 地下水なし。粘性なし。砂層を多く含む(中等SX2(強土))
10. 10SYT4-3 黄褐色砂質土 地下水なし。粘性なし。半固強度土
11. 10SYT4-3 黄褐色砂質土 地下水なし。粘性なし。半固強度土
12. 10SYT4-3 黄褐色砂質土(半固強度土)
13. 7SYT5-7 黄褐色土 φ100~150mmの層が特に認められる
14. 7SYT5-6 明褐色砂質土
15. 7SYT5-6 明褐色砂質土(薄透徳土)
16. 7SYT5-7 黄褐色砂質シルト 地下水なし。砂層少なし。ブロック状構造
17. 23SYT4-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水なし。粘性なし。基岩剥離が多い(ブロック状/薄透徳土)
18. 23SYT4-7 にじみ明褐色砂質シルト φ30mm以下の層が最も多く含む(薄透徳土)
19. 5YET4-4 砂礫地など多く含む(少なし) 地下水なし。半固強度土
20. 7SYT5-6 明褐色砂質土(薄透徳土)
21. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。半固強度土
22. 5YET5-6 明褐色砂質土 φ30mmの層が少なし(薄透徳土)
23. 5YET4-4 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。φ30mm以下の層が多く含む(薄透徳土)
24. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。φ50~100mm層認定なし
25. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。薄透徳土
26. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。薄透徳土
27. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。φ100~150mm層が特に多く含む(薄透徳土)
28. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。薄透徳土
29. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。φ100~200mm層多く、大部分を含む(薄透徳土)
30. 7SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。粘性なし。薄透徳土
31. SYT5-6 明褐色砂質シルト φ50mm以下の層が多く含む(薄透徳土)
32. SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。粘性やや少。φ100~150mm層を多く含む(薄透徳土)
33. SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。粘性やや少。φ100~150mm層を多く含む(薄透徳土)
34. SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。半固強度土
35. SYT5-6 黄褐色砂質土 地下水やや少。半固強度土
36. SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。φ100~150mm層を多く含む(半固強度土)
37. SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。半固強度土
38. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水やや少。半固強度土
39. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水やや少。半固強度土
40. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水やや少。半固強度土
41. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水やや少。半固強度土
42. 7SYT5-6 φ20mm以下の層が最も多く含む(にじみ明褐色砂質シルト/薄透徳土)
43. 7SYT5-6 明褐色砂質土 地下水やや少。半固強度土
44. 7SYT5-6 明褐色砂質土 地下水やや少。半固強度土
45. 7SYT5-6 明褐色砂質土 地下水やや少。半固強度土
46. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト(薄透徳土)
47. 7SYT5-6 にじみ明褐色砂質シルト 地下水やや少。粘性少ない。薄透徳土
48. 7SYT5-6 黄褐色砂質シルト 地下水やや少。粘性少ない。φ20mm層多く含む。大部分に覆多い(薄透徳土)
49. 7SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。薄透徳土
50. 7SYT5-6 明褐色砂質シルト 地下水やや少。φ20mm以下の層が多い。

第17図 塗頂部T8実測図②



1. T8T8M-6 黄土
2. T8T8M-6 黄色砂質土 上20cmややかみ 粘性少なし(面積広範囲)
3. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm 粘性少なし 0.30mm粒を多く含む(中等SX2地盤)
4. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(中等SX2地盤)
5. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(中等SX2地盤)
6. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし
7. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(中等SX2地盤)
8. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 14cmの筋状の谷を含む(中等SX2地盤)
9. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 72cmの谷を含む 0.10mmの砂を多く含む(中等SX2地盤)
10. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む 0.50~10mm粒を多く含む(中等SX2地盤)
11. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(面積狭範囲)
12. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(面積狭範囲)
13. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10mm粒以下の砂を含む 砂2cm多く含む(面積狭範囲)
14. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 12.2%やや硬(砂や砂礫の混入が少ない) (面積狭範団)
15. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.50mm以下T下の砂を含む(面積狭範団)
16. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.50mm以下T下の砂を含む(面積狭範団)
17. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 粒度多く含む(面積狭範団)
18. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 粒度多く含む(面積狭範団)
19. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 0.10~15mm粒を多く含む(面積狭範団)
20. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少ない 粘性少なし 粒度多く含む(面積狭範団)
21. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.10~10mm粒を多く含む(面積狭範団)
22. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50~10mm粒を多く含む(面積狭範団)
23. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.30mm以下T下の砂を含む(面積狭範団)
24. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50~10mm粒を多く含む(面積狭範団)
25. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.10~30mm粒を多く含む(面積狭範団)

26. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む 粒度多く含む(面積狭範団)
27. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50~10mm粒を多く含む(面積狭範団)
28. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50~10mm粒を多く含む(面積狭範団)
29. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(面積狭範団)
30. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(面積狭範団)
31. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(面積狭範団)
32. T8T8M-6 黄色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(面積狭範団)
33. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土(面積狭範団)
34. T8T8M-6 褐色砂質土(し20cm少なし) 粘性少なし 0.10~50mm粒を多く含む(面積狭範団)
35. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.30~50mm粒を多く含む(面積狭範団)
36. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.30~50mm粒を多く含む(面積狭範団)
37. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.30~50mm粒を多く含む(面積狭範団)
38. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(面積狭範団)
39. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 0.50~100mm粒を多く含む(面積狭範団)
40. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし(面積狭範団)
41. T8T8M-6 にじみ黄色の砂質土 し20cm少なし 粘性少なし(面積狭範団)
42. T8T8M-6 褐色砂質土(し20cm少なし) 粘性少なし(面積狭範団)
43. T8T8M-6 明暗色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒 粒度多く含む(面積狭範団)
44. T8T8M-6 にじみ褐色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(面積狭範団)
45. T8T8M-6 褐色砂質土(し20cm少なし) 粘性少なし 0.30~100mmの砂を多く含む(柱状の一組) 未発展
46. T8T8M-6 褐色砂質土(し20cm少なし) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 未発展
47. T8T8M-6 にじみ褐色砂質土 し20cm少なし 粘性少なし(面積狭範団)



1. T8T8M-6 (土上)
2. 10T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 砂をあまり含まない褐色砂質土(面積狭範団)
3. 10T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 砂礫はほとんど含まない 褐色砂質土(SX2地盤)
4. 10T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(柱状の一組) 0.50~100mm粒を多く含む(SX2地盤)
5. 7.5T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 0.10mm粒を多く含む(柱状の一組) 明暗色砂質土(面積狭範団)
6. 7.5T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 砂をあまり含まない 褐色砂質土(土上)
7. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
8. 10T8M-2 (L20cm) 砂を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
9. 10T8M-2 (L20cm) 砂を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
10. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
11. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
12. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
13. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
14. 7.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
15. 7.5T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
16. 7.5T8M-4 (L20cm) 粘性少なし 0.50mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
17. 2.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)
18. 2.5T8M-6 (L20cm) 粘性少なし 0.50~100mm粒を多く含む(柱状の一組) 褐色砂質土(面積狭範団)

第18図 塗顶部T8実測図③

第6節 第4次調査〔平成24年度〕

(1) T 9について〔第19図〕

T 9は後円部の墳形と、墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅20m、長さ6.0mで調査区を設定し、調査を経てトレンチ北西端部付近を幅10m、長さ22mを拡張した。調査面積は14.2m²を測る。

地形測量図からはT 9付近に張り出し部のような形状が認められた。造り出し又は前方後方形のコーナー部の可能性などが指摘されたため、トレンチ幅を2mとしてやや面的に把握できるよう掘削した。ところが、10～20cmの表土を除去した時点で、トレンチ北西部端、墳丘の裾部あたりでは岩盤が露呈した。このことから張り出し状に見えた部分が人工的なものではなく旧地形（岩盤）の形状である事が判明した。そこで、トレンチを半裁して北側を深く掘り下げて盛土を断ち割って墳丘構築方法を調査する事とした。

岩盤の傾斜角が20度ほどで、これが本来の丘陵の傾斜角であると推測されたが、盛土を断ち割ると、トレンチ北西端から3.7m付近、標高124.5mあたりで岩盤上の風化岩盤層がほぼ水平になっていることが判明し、その部分から盛土が始まっていることが分かった。墳丘北西側においても、T 4やT 6と同じく、盛土の前に地山の削平を行って平坦部を作り出している事が明らかとなった。

この地山削平部分から盛土が始まっている、それより下部に盛土と思われる堆積が認められないため、削平部分が墳丘端部であると推測した。前方後円形と推定した場合の墳形ライン上にある。前方後方であれば墳端はもう少し下部でなくてはならないだろう。またT 9トレンチでコーナー部分や角が確認できるのはずであり、本調査成果によって墳形が前方後円形であると確定する事ができた。

盛土は大別すると3つに分類できる。これは工程差によるものと思われる。構築工程は以下のように提示できる。

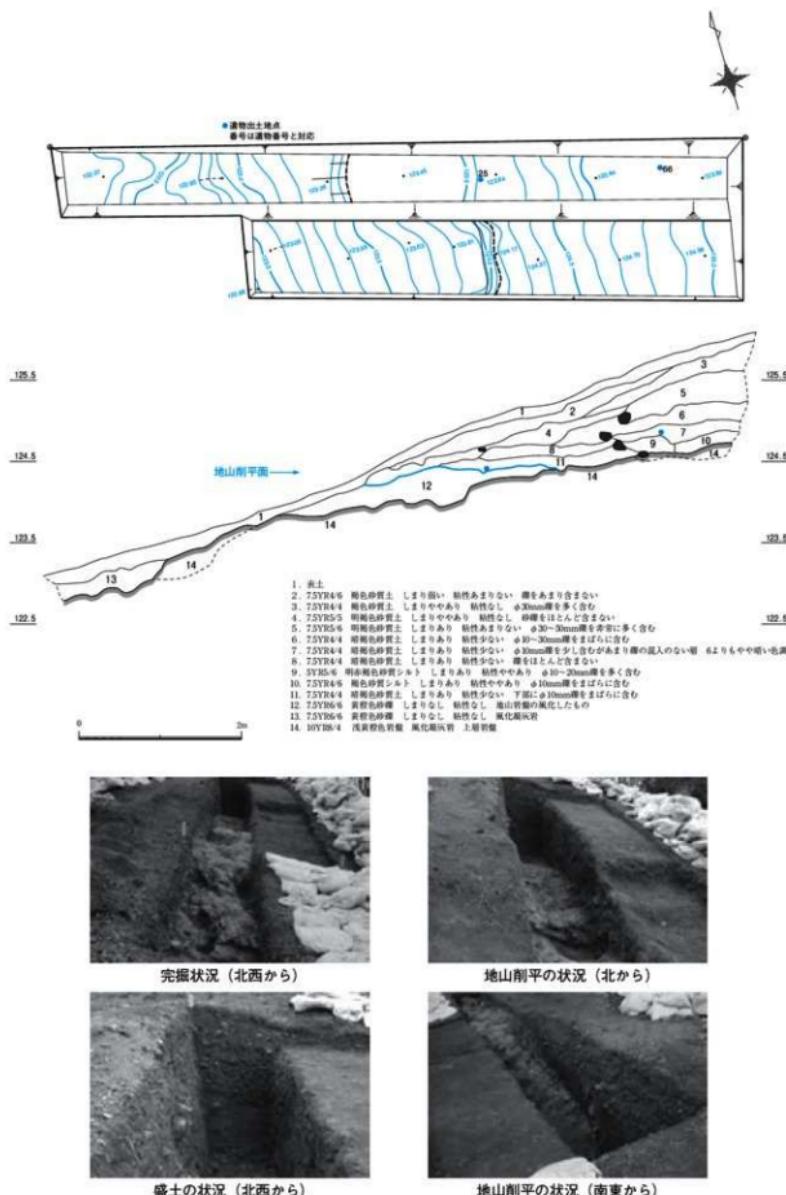
- ・事前段階：地山を削平して盛土の準備をする（風化岩盤12層上面）。
- ・第1段階：削平面の外側から粘性土を約10cm単位で薄くほぼ水平に盛土する（7～11層）。
- ・第2段階：やや礫の多い土を20～30cm単位で厚めに傾斜を付けて盛土する（5・6層）。
- ・第3段階：3～5cmの小礫を多く含む土を全体に盛土する（2～4層）

遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭、廻間式期の土器であった。壺底部（第26図25）や台付甕底部（第27図66）が出土している。その他に小破片が多く、地山削平面の上に堆積する第1段階の盛土（7～11層）から多く出土しており、地山削平後に使用した土器を遺棄している可能性も考えられる。

T 9で確認された諸属性については以下の通りである。

- ・地山削平面………標高は124.5m
- ・後円部北西側墳端………標高123.7m
- ・墳丘傾斜角……………22度

※トレンチは墳端部であるので上方の墳頂部は傾斜がきつくなる。



第19図 後円部北西T9実測図

(2) T 1 0について〔第20図、第21図〕

T 1 0は後円部東端の特定と墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅1.0m、長さ13.0mで調査区を設定し、調査面積は13m²を測る。

調査前の現況において調査区の西端から9m辺りで傾斜の変化点があり、これより上部が盛土であるとの目算を持って調査にあたった。

表土は、墳頂部では5～10cm程度であったが、墳丘斜面から下部へ下るほど厚くなり、墳端部と思われる傾斜変化点辺りで40cm程の厚みがあった。おそらく墳頂部の盛土が流出して、墳端部に堆積したものと思われる。表土を除去すると、墳頂部では3～10cmの凝灰岩角礫を多く含みしまりのある褐色土(11・3・5層)を、墳丘斜面において礫をあまり含まない褐色土(7層)を検出し、盛土と特定した。傾斜変化点より下部では岩盤が露呈した。T 1 0では盛土工程を把握することを優先し、盛土を掘削し調査区全体を風化岩盤上面まで掘り下げた。

盛土を掘り下げると、墳端部の傾斜変化点において岩盤を削平して平坦部を作り出していることが分かった。これは前方部東側に設定したT 1 1・T 1 2においても認められるもので、盛土の事前に墳端部の輪郭づけを行っている痕跡と考えた。

墳頂部の盛土を掘り下げると盛土内から土器が出土した。これらの土器は土質の変わり目で出土することが多かった。盛土は基盤の周縁部に外側から順に周提状に盛土されていることが分かった。周提状盛土は、土質から大別すると3工程に区分できる。最も外側に低い土手状の盛土、その内側に赤褐色の盛土(周提状盛土①)、さらに内側に褐色の盛土(周提状盛土②)の順で工程が進んでいる。周提状盛土②は6層上面を境に2工程に分かれる可能性がある。つまり6層までの低い周提を作った後に、その上にさらに盛り足している可能性が考えられる。この周提状盛土②の下部盛土がT 8において検出した周提状盛土に繋がるものと思われる。周提状盛土は5～15cmの凝灰岩角礫を多く含み非常にしまりのある土質であった。

周提状盛土を除去すると下部から礫をあまり含まない赤褐色の粘性土(25層)と黄褐色粘土(24層)を検出した。これらの粘性土は周辺の丘陵状ではみられない土である。平地より人為的に運ばれた土である可能性が高い。特に24層は比較的質の良い粘土であり、他のトレンチでは検出していない異質な土である。また、岩盤上の粘性土上面では炭化物が散布する状況を確認した。炭化物は植物形態の判別できそうなもののが多かったためサンプルとして採取した。

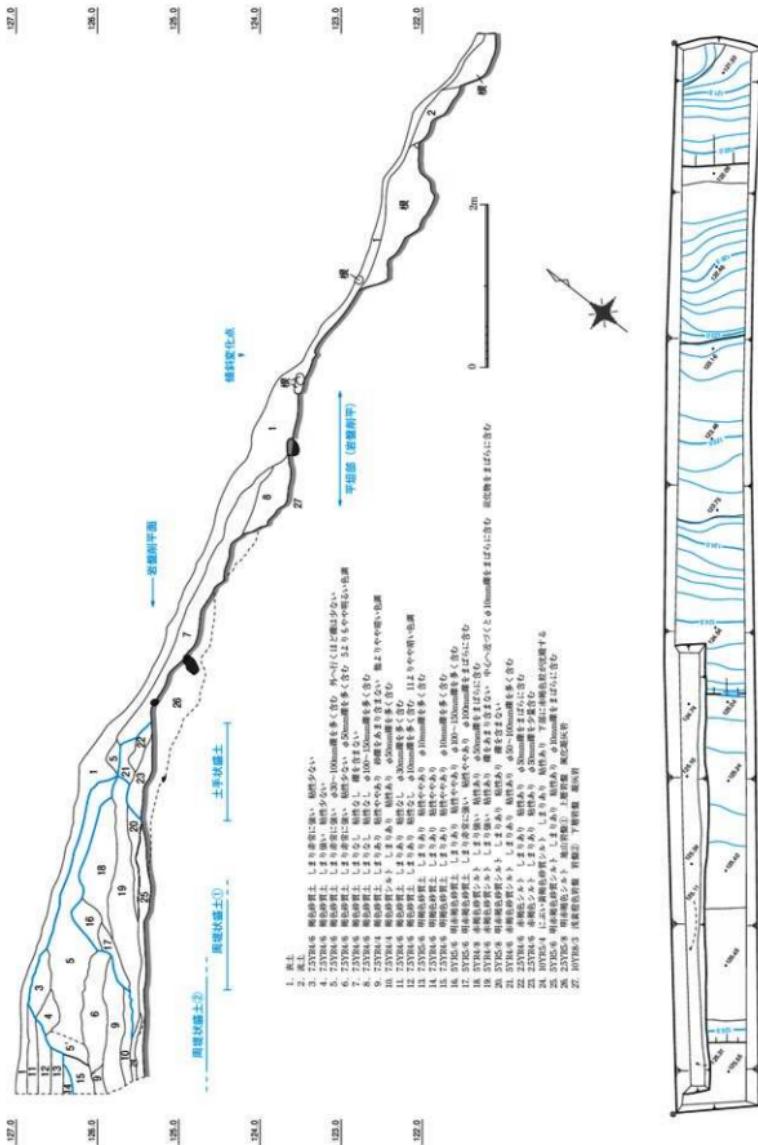
この粘性土の上面の標高が125.6～125.7mを計り、前年度調査のT 8で確認した棺底の標高125.7mと近似していることから、この面が基盤造成面であると特定した。周提状盛土との関係においても、粘性土上面から盛土が為されている点が確認できるため整合性があると判断した。

また、黄褐色粘土24層の端部付近から周提状盛土①が始まっている点には留意したい。つまり24層は周提状盛土①を盛る直前に敷かれている可能性も指摘しておきたい。

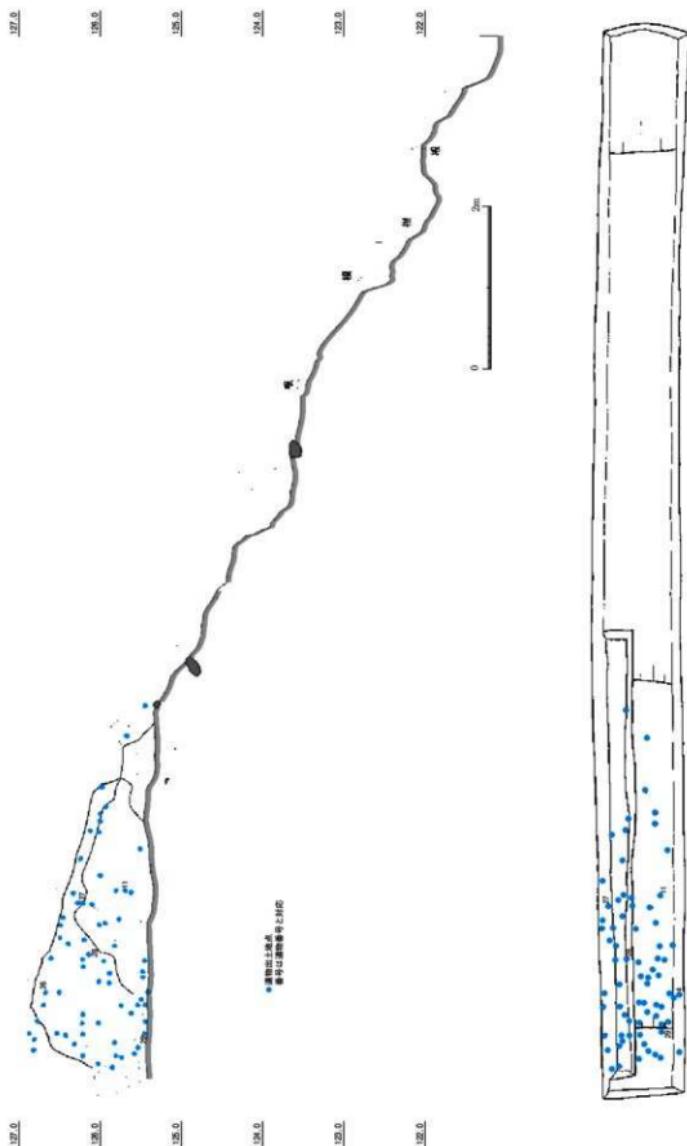
粘性土はトレント北壁沿いにサブトレントを設定し掘り下げると、10～20cmほどで岩盤に至った。岩盤は標高125.4mで水平になっており、人為的に地山を削平した結果と判断した。

以上の点から墳頂部の構築工程を以下のように推測した。

- ・第1段階：地山を岩盤まで削平して基盤を造成する。頂上部を水平に削平する。
- ・第2段階：頂上平坦面の外縁に土手状の盛土を行う(21～23層)。
- ・第3段階：頂上平坦面に粘土を敷く(20・25層)
- ・第4段階：内側に黄褐色粘土(24層)を敷き周提状盛土①(16～19層)を構築する。



第20図 後円部東側T10実測図 (S=1/60)



第21図 後円部東側T10遺物出土ドット (S=1/60)

- ・第5段階：周堤状盛土②を2段階に分けて（6・9・10層→3・4・5・15層）を構築する。
- ・第6段階：最終盛土（11～13層）を行い墳頂部を平坦にする。

後述するが、墳頂部の岩盤上に敷かれた粘性土24・25層で検出した炭化物を分析した結果、樹種はバラ属とクワ属判定された。バラ属は野バラ（イバラ）、クワ属はヤマクワなどが想定される。野バラは植生の特徴として日当たりの良い野原や山野に生息する植物であり、高木の茂る森林には適応しない。バラ・クワとともに材として用いる植物ではないので周辺に繁茂していたのではないだろうか。古墳築造時の植生を考える上で非常に重要な情報である。

また、これらの炭化物が焼土とともに散布している状況を確認しているので、造成面でこれらの植物を燃やす行為があったと考えている。バラやクワは周辺に繁茂していた可能性が高い事から考えると作業工程のひとつとしての雑木燃却が行われたと考え方が妥当であろう。

次に遺物の出土状況であるが、出土土器は弥生時代終末期～古墳時代初頭のもので、破片での出土であった。基盤造成面上の粘性土24・25層の内側寄りで最も集中して出土している。他にも周堤状盛土①の上面、墳頂部での出土も目立った。出土遺物は壺形土器の割合が多い。

T10で確認された諸属性については以下の通りである。

- ・地山削平面…………標高125.0m
- ・墳端削り出し部…………標高123.5～123.6m
- ・後円部東側墳端…………標高123.5m
- ・墳丘傾斜角…………墳頂付近15度、墳端付近30度

（3）T11について〔第22図〕

T11は前方部の墳端や墳形と、墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅1.0m、長さ10mで、調査面積は10m²を測る。前方部の横断土層を把握するために1次調査T1東西と繋がるように設定した。

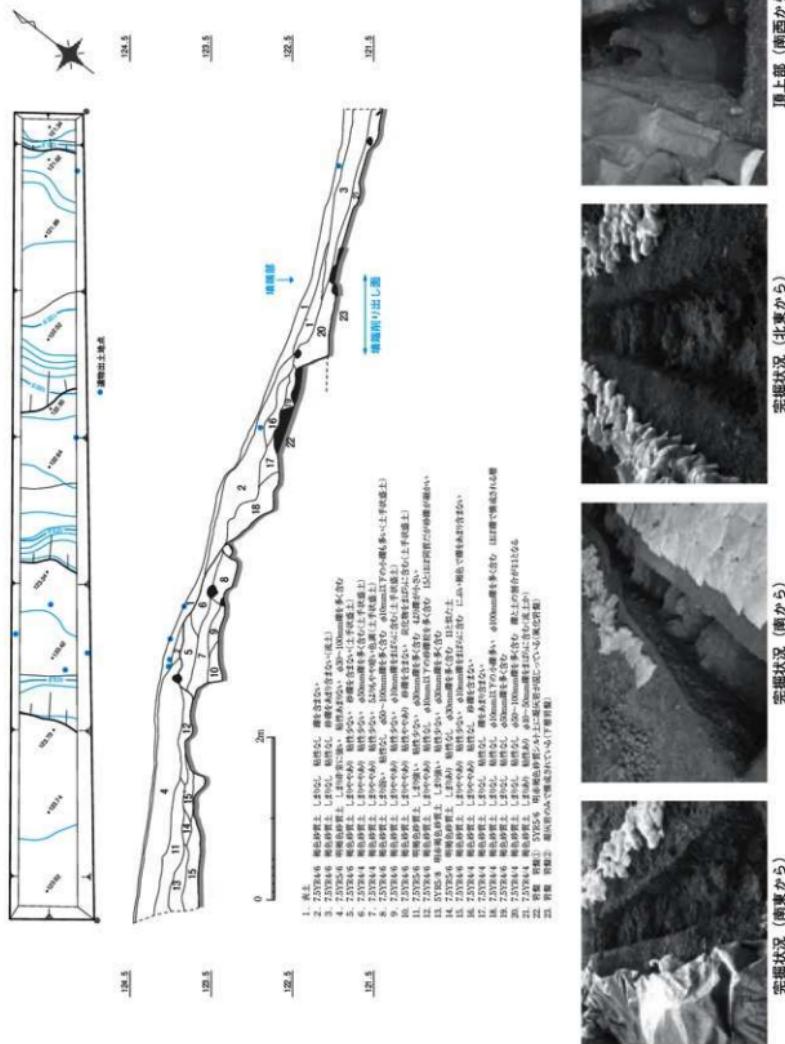
表土5～10cmを除去すると、墳頂部で3～10cmの凝灰岩角礫を多く含みしまりのある明褐色土（4層）を検出し、盛土と特定した。東の傾斜面は礫があまりみられなかった。盛土工程を把握すること優先し、調査区全体を風化岩盤上面まで掘り下げた。

盛土の前の地山整形は、風化岩盤まで及んでいた。岩盤は階段状に削り出されている。墳頂部が標高123.7m付近、1段目が123.3m付近、2段目が122.7m付近、最下段が122mラインで平坦に削り出されている。前方部の風化岩盤は表層が非常に脆く、削るのは容易である。

現況でT11とT12の墳頂部下には段があるようにみえるが、この部分は山仕事用の道として利用されている。道に削られている部分もあり、当初からあった段が踏みしめられて道になったのかどうかは判別はできなかった。

盛土は、墳頂部側から行っていると推定している。1段目の平坦部に凝灰岩角礫を含む土手状の盛土（5～8層）を行い、墳頂部を外側から5～10cmの厚さで水平に盛土（11～15層）している。最終盛土と思われる4層は厚さ20～30cmでやや厚い盛土単位である。

傾斜面の盛土は礫をあまり含まない。2層は礫を含まない盛土であるが頂上部側は比較的しっかりしており、崩れ出しはあるが構築当時の状況に近いものと思われる。ただし、傾斜が急になる裾部付近は土の流出が認められる。トレーナー北東端に堆積する流土3層は、側面部の土が流れ出して堆積したものと思われる。



墳端部に列石等は認められず、岩盤を平坦に削り出しているのみである。上述の通り傾斜面の土が流出しているため、墳端部の特定は難しかったが、岩盤を階段状に削り出した最下段が墳端に近いものと思われる。20層が凝灰岩角礫が多く、裾部には礫を混ぜた土を配している可能性はあるが、明瞭に墳端部を作り出す意図は認められない。

遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭、廻間様式の土器が出土した。出土位置は墳丘斜面が多い。墳頂部で利用されたものが流れている可能性が高い。

T 1 1で確認された諸属性については以下の通りである。

- ・地山削平面…………標高 123.4 m
- ・前方部東側墳端……標高 121.9 m
- ・墳丘傾斜角…………15～28度を測る。

(4) T 1 2について〔第23図〕

T 1 2は前方部の墳端や墳形と、墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅1.0m、長さ10mで、調査面積は10m²を測る。

表土5～10cmを除去すると、墳頂部で3～10cmの凝灰岩角礫を多く含みしまりのある明褐色土(4層)を検出し、盛土と特定した。東の傾斜面は礫があまりみられなかった。盛土工程を把握するためトレチを半裁する形で北半部を風化岩盤上面まで掘り下げた。

14層の赤褐色土は地山堆積物であり、頂上部の地山整形は、風化岩盤直上まで及んでいない。側面の傾斜部は風化岩盤まで削り出して整形している。頂上部が標高123.0m付近、下段が121.9mラインで平坦に削り出されている。下段の標高はT 1 1と整合しており、この下段の削り出し部分を墳端部と意図していることは間違いないだろう。

盛土は、墳頂部側から行っている。地山を削平した平坦部に凝灰岩角礫を含む土手状の盛土(10・11層)を行っている。現在の踏みしめ道で削られているため分かれづらいが、9・12・13層も本来は土手状に盛土した堆積物の可能性が高い。その後、墳頂部を外側から5～10cmの厚さで水平に盛土している。最終盛土と思われる4層はやや厚い盛土単位である。

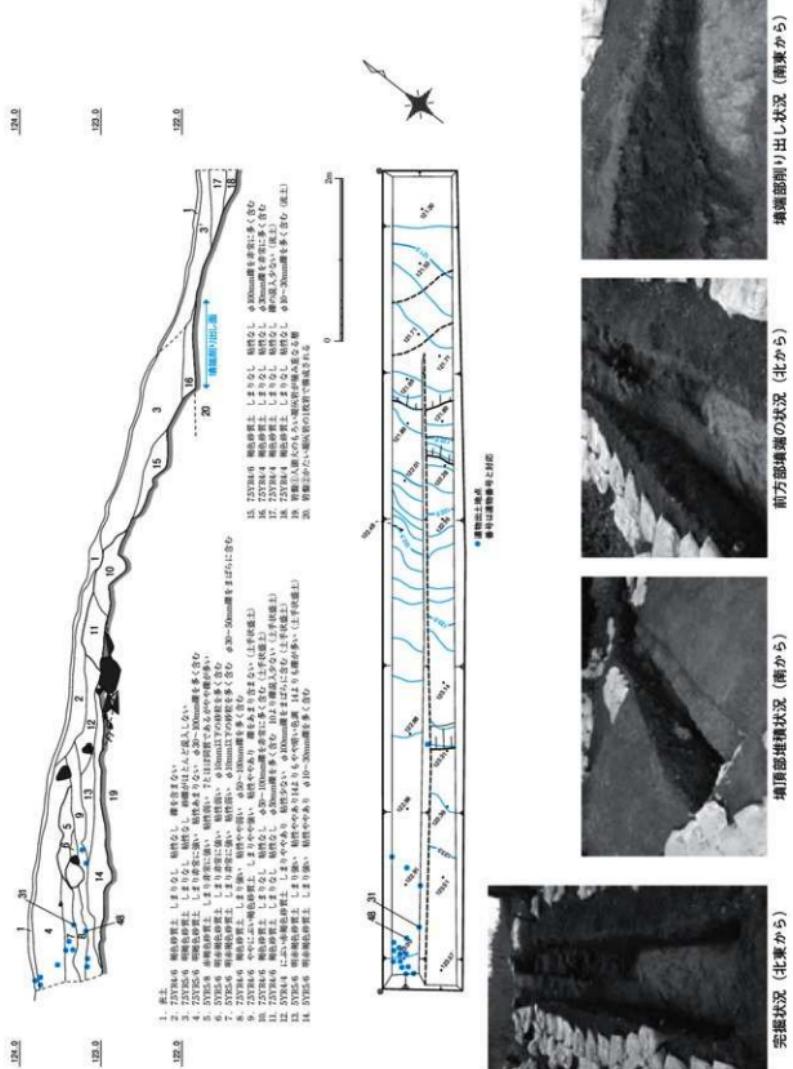
傾斜面の堆積もT 1 1とよく似ている。T 1 1同様に傾斜面の盛土は礫をあまり含まない。3層は礫を含まない盛土であるが頂上部側は比較的のしっかりとしており、盛土であると考えている。ただし、傾斜が急になる裾部付近は土が流れ出して動いている可能性があり、墳形や墳端を盛土から特定するのは難しかった。トレチ北東端には流れ出した傾斜面の土が堆積している。

墳端部に列石等は認められず、岩盤を平坦に削り出しているのみである。岩盤を階段状に削り出した下段が墳端に近いものと思われる。15・16層に凝灰岩角礫が多く、裾部には礫を混ぜた土を配している思われるが、明瞭に墳端部を作り出す意図は認められない。

遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭、廻間式期の土器であった。小破片が多かった。盛土下層から壺底部(第26図31)や高坏脚部(第27図48)が出土している。土器の出土位置は墳頂部の盛土からが多い。現場での印象として、盛土の変わりで出土することが多いようと思われる。盛土の際に土器を混ぜている可能性がある。墳頂部の表土直下でも土器が出土しているが、盛土内のものと明確な時期差は無いように思われる。

T 1 2で確認された諸属性については以下の通りである。

- ・地山削平面…………標高 123.0 m



第23図 前方部東側T12実測図

- ・前方部東側墳端……標高 121.9 m
- ・墳丘傾斜角…………15～25 度。

(5) T13について〔第24図〕

T13は前方部前面の墳端や墳形と、墳丘盛土の方法を調査する目的で設定した調査区である。幅1.0m、長さ10mで、調査面積は10m²を測る。前方部の横断土層を把握するために1次調査T1東西と繋がるように設定した。1次調査T1で前方部前面の墳端部がはっきりとしない点や、T1で検出したSD01が区画溝と認定して良いのか疑問が残ったため、T1を南へ延長して確認する事となった。また、地山の鞍部を削り出しているのかどうかも検討委員会での課題として指摘されていたため、トレンチは鞍部まで延長している。

トレンチ北端部で幅3.0m、深さ45～50cmの溝SD02を検出した。溝の北面立ち上がりが傾斜角は28～30度で前方部の前面へ繋がる。前方部東面の傾斜角とほぼ同様の傾斜であり、T5で確認した前方部南西コーナーとの平面的な位置関係も整合性が認められるため、SD02を区画溝と認定した。自然地形と墳丘を分ける目的で設定された区画溝であるが、コーナー部分のT5では明確な溝を確認しておらず、前面のみ掘削されていると考えている。現況では溝の落ち込みは残っていなかったが、埋土の状況から一定期間は埋没せず機能していたものと推定される。

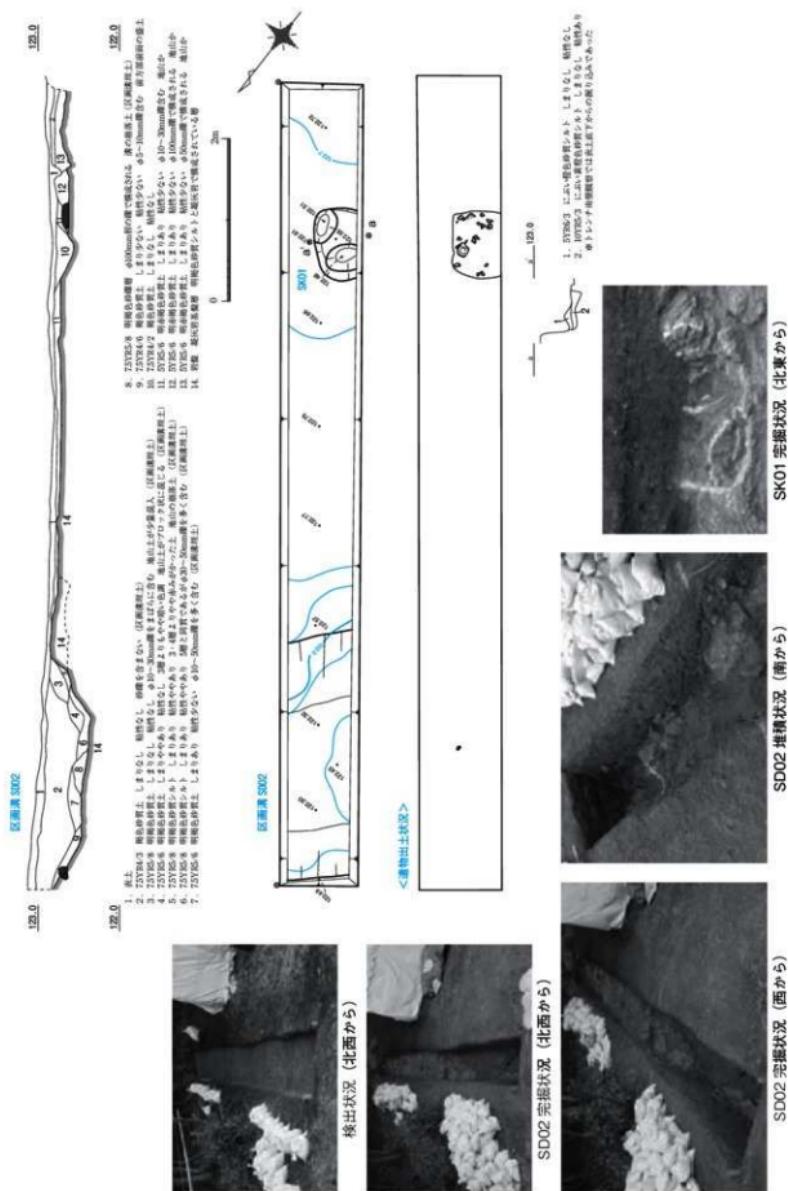
T13では10～15cmの表土を除去すると5～10cmの凝灰岩角礫を含む11層が5～10cm堆積し、風化岩盤層に至る。11層はおそらく岩盤の表面が風化した堆積物であろう。トレンチ南端から2mほどの位置において、11層上面で浅い掘り込みSK01を検出した。SK01からは赤彩を施した広口壺（第25図13）が出土している。おそらくこの広口壺を据えるための掘り込みであろう。据え付けのための窪みを掘削している点から考えて、古墳に伴うものと考えているが、SD02からは4.3mの距離が開いている。墓前祭祀に関連する遺構である可能性を指摘しておく。

広口壺は同一個体と思われる胴部の片断が集中して出土しており、原位置の状況に近い。頭部・口縁部が欠損している点は後世の影響が考えられるが、底部が出土していない点は気になる点である。

前方部前面の鞍部については区画溝の掘削以外に地形の変化は認められない。区画溝の外側については基本的に旧地形を保っていると判断している。

T13で確認された諸属性については以下の通りである。

- ・区画溝…………幅3.0m、深さ45～50cm
- ・前方部墳端……標高 122.5 m
- ・墳丘傾斜角…………28～30 度。



第24図 前方部前面T13実測図

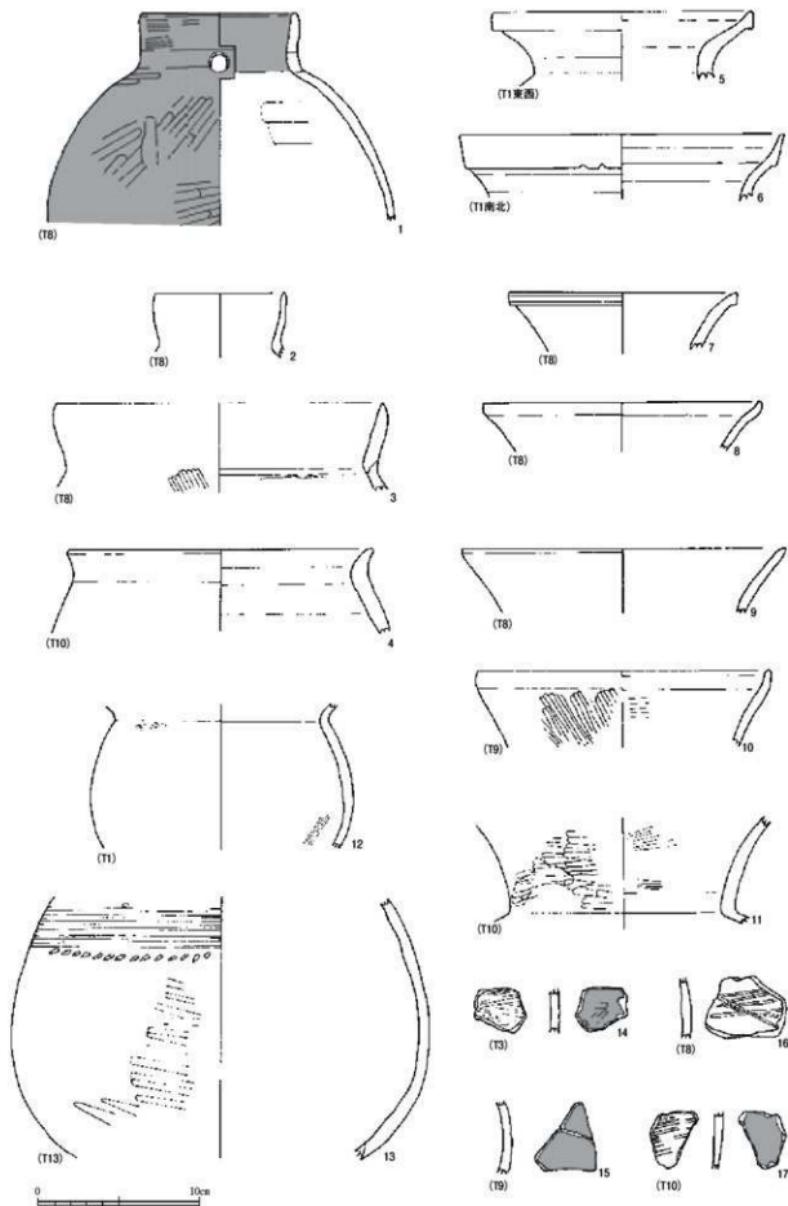
第7節 出土遺物について

(1) 出土遺物の状況〔第25~27図〕

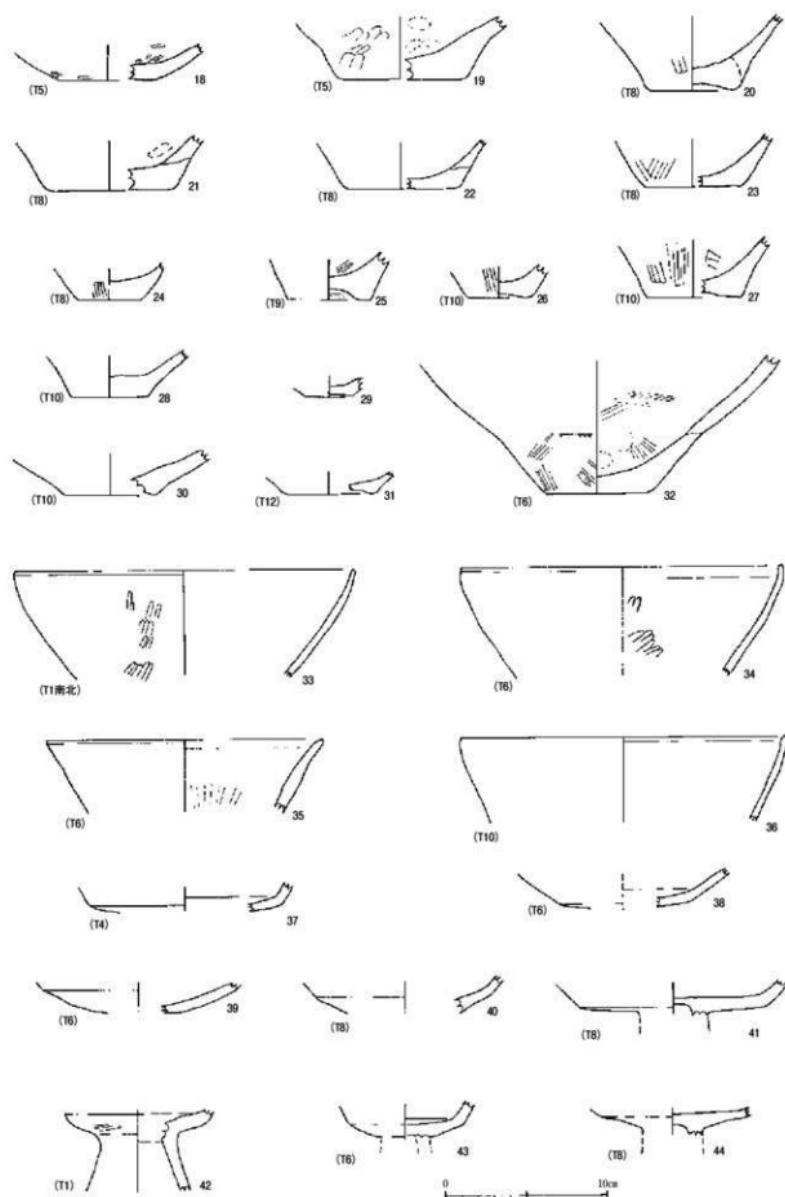
今回出土した遺物の総点数は1,284点で、土器片1,219点、須恵器3点、灰釉陶器2点、山茶碗8点、中世陶器（経筒）50点、砥石1点、石鎌1点である。盛土内から出土しているものが多く、いずれも小破片で、遺物の全体形がわかるものは僅かである。これらのうち比較的形を推察できるものを図示した（第25図~第28図）。

1~17は壺の口縁部・胴部である。1はT8の墳壙最終盛土より出土しており、出土状況から墳頂部に供献された土器と考えられる。外面及び頸部内面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。頸部と肩部の境目に直径1.4~1.5cmの孔を穿つ。口縁部はやや内彎して端部内側に面を持つ。肩部に張りを持たず、なだらかに胴部に至る。外面のミガキは胴部下半は横方向、上半は斜め方向。肩から頸部には横方向を施し、口径9.5cm、頸部長3.4cmを測る。2はT8において墳頂部周提状盛土上面で出土した直口壺の口縁部である。端部は薄く鋭く仕上げられている。3はT8盗掘坑の南付近の表土直下で出土したやや広口の直口壺で、口縁端部はやや内傾し頸部外面に縱方向のミガキがみられる。4はT8の周提状盛土から出土した短頸壺で、外反する短い口縁部を持ち厚手で外面はミガキが、頸部はナデが施される。5はT1東西の前方部墳丘端部で出土した真直ぐ延びる短い頸部から外反する口縁部をもつ広口壺である。口縁端部外面は横ナデが施されるが仕上げは甘い。頸部外面は縱方向のミガキが、内面はナデ施されているようである。6はT1南北の盛土中から出土した壺口縁部である。当該地域ではみられない壺で搬入品の可能性がある。頸部から緩やかに外反し、口縁部は内彎する。口縁部外面に稜を有する。調整痕跡は不明瞭であるが、内面はナデが施されるようである。7はT8の墳頂部盛土下層から出土した外反する口縁部をもつ広口壺で、口縁外面に1条の凹線が巡る。8はT8の墳頂部盛土から出土した薄手で内彎する壺の口縁部。9はT8の墳頂部の墳壙埋土下層から出土した薄手で外反する壺の口縁である。10はT9の盛土下層から出土した内彎する口縁を持つ壺で、口縁部には横ナデが施される。外面は斜め方向のミガキが、内面は横方向のミガキが施される。11はT10の基盤造成面上で出土した広口壺頸部で、緩やかに外反して口縁部に至る。内外面ともに横方向のミガキが施される。12はT1南北の盛土上で出土した小型壺の胴部である。頸部は外反し、外面にはハケメが施される。13はT13のSK01で出土した加飾壺の胴部である。外面には2帯の櫛描直線文と刺突文が施される。櫛描直線文の上部に刺突状のくぼみがあり、頸部にかけてもう1帯の文様帯があったものと思われる。14~17は赤彩壺の破片である。内外面ともミガキ調整がほどこされている。赤彩壺は、くびれ部や後円部側で出土している。14はT3くびれ部のテラス状平坦部上で、15はT9の盛土から、17はT10の墳頂部で出土している。16はT8の墳頂部盛土上層で出土した擦痕のある土器片である。壺の破片の外面に棒状工具で横方向に施されている。

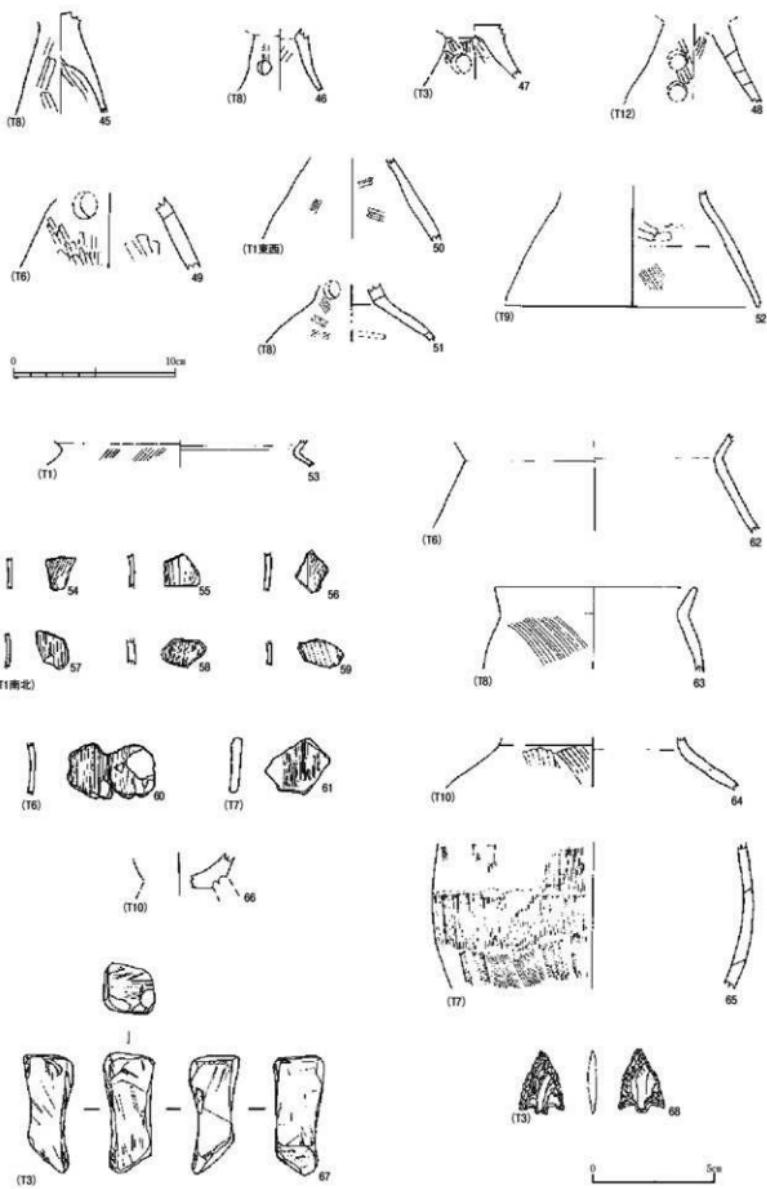
18~32は底部である。平底のものが多いが、底部に粘土紐を付けて上げ底状になるものが(20・25・26・27・30・31)ある。18・19はT5の前方部コーナー付近で出土した。18は底部から直線的に開く形状で大型の壺と思われる。19は底部が突出する大型の壺。20はやや上げ底になり直線的に立ち上がる。21はT8の墳壙埋土上層より出土した大型の壺。22・23・24はT8の墳壙埋土上層より出土した平底の壺である。25はT9の地山削平面で出土した。底部に粘土紐を貼り付けて突出部を作る大型の壺である。26はT10の周提状盛土の上部で出土した壺底部。27はT10の周提状盛土①上面で出土した平底の底部に粘土紐を貼り付ける大型の壺底部。28・30はT10の周提状盛土から出土した大型の壺底部。29はT10の基盤造成面で出土した小型壺の底部。31はT12の前方部墳頂盛土から



第25図 出土遺物実測図① (S=1/3)



第26図 出土遺物実測図② (S=1/3)



第27図 出土遺物実測図③ (S=1/3)

出土した大型の壺底部。18・29・30・31は底部から直線的に開く形状で球形の胴部をもつ大型の壺と思われる。32はT6の墳端部で出土した大型の壺底部。平底の底部から緩やかに開き、胴部にかけて急に外反する。

33~36は高壺・器台の口縁から坏体部である。33・34・36は深みのある坏部で、口縁部にかけて内彎する。内外面ともにヘラミガキ調整が施される。33はT1南北の盛土上で、34・35はT6の基盤造成にからむ平坦部で、36はT10の墳頂部で出土した。35はやや外反する口縁で、器台の可能性も考えられる。

37~44は高壺の坏底部である。37はT4の基盤造成面(盛土工程③)上部から出土した。明瞭な稜を有し、底部は比較的平坦である。38はT6の基盤造成にからむ平坦部で出土した。稜部は不明瞭で底部は小さい。39はT6のトレーナー北端の流土から出土した。坏底部に緩やかな傾斜をもつ。40はT8の墓壙埋土下層より出土した。明瞭な稜部をもち、坏底部は緩やかに傾斜する。41はT8の周提状盛土上面で出土した。明瞭な稜部をもち、坏底部は平坦化になる。42はT1南北の盛土中から出土した。坏底部は緩やかな傾斜をもつ。43はT6の口縁部北側の墳丘墳端部から出土した。明瞭な稜部をもち、坏底部は平坦になる。44はT8墳頂部前方部側の周提状盛土下層から出土した。坏底部は平坦である。

45~52は高壺・器台の脚部である。45はT8の盛土上層で出土。細身の脚部で外面にヘラミガキがあり、内面にはしづり痕が認められる。46はT8の墳頂部表土下で出土した器台である。非常に薄手で、脚中央で外反する低脚小型の器台と思われる。47はT3くびれ部の上段の後円部盛土から出土した。坏部との取り付き付近の高い位置に孔があり内面にしづり痕が見られる。坏底部は平坦なものと考えられる。48はT12の前方部墳頂盛土下層より出土した2孔の脚部で、緩やかに内彎しながら開く形態である。49・50・52も緩やかに内彎しながら開く脚部である。49はT6の基盤造成にからむ平坦部で、50はT1東西の盛土下層で、52はT9の墳丘盛土斜面で出土した。51はT8の墳頂部東西サブトレーンの盛土上層で出土した低脚の高壺で、屈曲して開く内彎脚と思われる。

53~66は壺である。53~59はT1南北のSD01埋土から出土したS字状口縁台坏壺である。口縁部は非常に薄く、頸部は屈曲せず比較的緩やかに立ち上がるよう開く形状である。口縁端部が欠損しているが、廻間分類におけるA類またはB類に属する資料であると思われる。62はT6後円部墳端の流土から出土したくの字状口縁壺、63はT8周提状盛土上面で出土したくの字状口縁壺で、体部からほぼ垂直に立ち上がる直口口縁。外面にはハケメ調整がみられる。64はT10の墳頂部より出土している。肩が張る形状である。外面調整は条痕の可能性がある。65はT7の前方部への斜面盛土上層で出土した壺の体部。縦方向のハケメ調整が施される。外面に煤が付着する。66はT10の地山削平面の上に堆積する粘性土上面で出土した台坏壺の底部である。

67は砥石である。T3のくびれ部上段で出土した。変成岩系の石材で全面に擦痕や擦り窪みが認められ、使い込まれた砥石である。基盤造成の盛り足し土より出土しており、遺棄された可能性がある。細砥と呼ばれる仕上げ用のもので、鉄製品などに使用したと思われる。68はT3のくびれ部テラス状平坦部で出土した有茎式石鎌である。

(2) 出土土器の所属時期

夕田茶臼山古墳から出土する土器については小破片が多いが、ほぼ全てが弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期的には比較的まとまった資料と思われる。

まず壺についてであるが、壺では短頸の内脣壺が多く出土している。最も完形に近い状態に復元できた赤彩のある有孔直口短頸壺¹は、非常に精練された胎土で、他の土器よりも精製と言える。T 8 後円部墳頂の最終盛土中と中世墓 SX02 の埋土から出土しており、おそらく墳丘の完成時か、それに近い段階で墳頂部に供献された土器と推定している。古墳の所属時期を考える上で非常に重要な土器である。赤塚氏によると愛知県一宮市の西上免遺跡の調査成果から、短頸内脣壺は廻間 I 式～II 式期に存在する器種とされる²。また有孔の短頸壺では、近隣の遺跡では美濃市古村遺跡 SZ08、美濃加茂市為岡遺跡 7 号周溝墓など廻間 I 式期の方形周溝墓から出土している。中濃地域において弥生時代終末期の墓や墓域に供献する土器として使用されている可能性がある。他にも閔市深糸前遺跡 SBF02、安城市鹿乗川流域遺跡群、一宮市朝日遺跡環濠、川原遺跡墓域溝でも類例がみられるが、時期的には廻間 I 式期に多く、この時期に盛行する器種のようである³。型式的にみると、夕田茶臼山古墳出土の有孔直口短頸壺は加飾が無く、口径が小さく、口縁部の内脣が緩い。為岡遺跡や古村遺跡出土のものは文様加飾があり、口径が広い。また為岡遺跡出土のものは孔が口縁部付近に穿孔されており、型式差が認められる。この点を考えて、夕田茶臼山古墳出土のものが、やや時期的には下る可能性を考慮し、廻間 II 式 1 ～ 2 段階の幅で捉えておきたい。広口壺についても 13 にみられる櫛描直線文と刺突文の組み合わせは中濃地域では廻間 I 式期からみられるものであり、壺の時期はおよそ廻間 I 式後半～II 式前半と捉えることができる。また壺の底部が一定量出土しており、これらは墳丘盛土上層や基盤造成面で出土する。造成段階や古墳の構築工程においても壺供献をおこなっている可能性も考えておきたい。

高坏については、坏部口縁の内脣志向が認められ、坏底部は傾斜をもつものと平坦化したもののが認められる。脚部も内脣志向が見られ、脚上部に孔がある 46・47 や、低脚で屈曲内脣する 51 など高木氏編年の第 VI・4 様式以降の特徴がみられる³。また屈曲内脣する脚部については廻間 II 式前半までみられる特徴であるため、高坏の時期については廻間 I 式後半～II 式前半と捉えておく。

S 字状口縁台付壺については口縁の頸部の立ち上がりや器壁の薄さなどから B 類以前と考えられ、廻間 I 式～II 式期を想定する。

夕田茶臼山古墳では盛土中からの土器破片の出土が多い特徴がある。当初は盛土の土に元々混入していた可能性を考えたが、量的に違和感がある。T 3 では前述したとおり、墳丘造成盛土上面で砥石が出土しており、意図的な遺棄の可能性が示唆される。T 10 では基盤造成、周提状盛土などの工程を把握したが、各工程の完了する面で土器が出土する傾向がある。また墓壙の埋土からも土器片が多数出土しているが小破片が多く、出土状況において北近畿にみられるような「墓壙内土器破碎供獻」と特定できるものは無いが、こうした事例との関連性や意図的に凝灰岩などの礫とともに土器を盛土に混入させている可能性も考慮しておく必要があろう。今後の事例増加を待って検討したい。

夕田茶臼山古墳の出土土器は小破片が多いため詳細を捉えにくい状況ではあるが、概観するとおよそ廻間 I 式後半～II 式前半の特徴を有するものと考えられる。さらに時期をしづら里むとすれば、特に重要なものとして墳頂部から出土した赤彩有孔直口短頸壺である。墳丘の築造時期を示すものと考えられ

¹ 赤塚次郎 1997 「西上免遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 号

² 赤塚氏からご教示頂いた。

³ 高木宏和 2005 「弥生時代後期条痕文化圏の有孔高坏の変遷について」『古村遺跡』 美濃市教育委員会

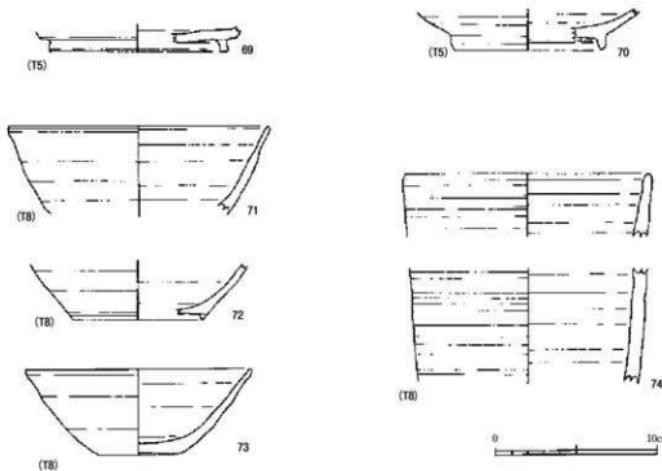
る有効な資料である。現段階では有孔直口短頸壺の時期と推定した週間II式前半段階が古墳の築造年代の有力候補であるが、中濃地域における週間II式併行期の土器の様相が判然としない。良好な資料が不足している状況であるが、地域的な土器様式も加味して考える必要があり、今後の資料の増加を待って再度検討する必要があると考えている。

(3) 古代・中世の遺物 (第28図)

前方部コーナーの裾部で古代の遺物が出土している。69は須恵器有台坏である。坏部は底部に傾斜をもち、細身の高台が坏底部外縁につき、坏部が張り出さないもので8世紀前半のものと思われる。70は灰釉陶器は三日月高台をもつ有台碗で9世紀後葉から10世紀初のものと思われる。

T8の中世墓からは山茶碗と経筒が出土している。71は均質手の山茶碗で、口径は15.8cmを測る。72は均質手の山茶碗で碗底部の外縁につぶれた高台が付く。高台径は7.9cmを測る。73は均質手の山茶碗で、体部から口縁にかけて緩やかに開く器形で、口縁端部は肥厚せず尖り気味に細く仕上げられる。高台は剥がれており、口径は13.8cm、底部径は5.0cmを測る。いずれも外面はロクロナデで整形され、底部は糸切り痕が残る。74は陶製の経筒である。外面は回転ヘラ削りが施される。体部から口縁へかけては僅かに開くものの直立的に立ち上がり、端部は厚く丸く仕上げられる。端部内面には若干の面をもつ。口径は15.2cmを測る。

山茶碗の時期については東濃窯編年の大谷洞14号窯期～大洞東窯期に該当すると考えられることから、中世墓については14世紀後葉～15世紀前葉の時期を当てておきたい。



第28図 出土遺物実測図④ (S=1/3)

第4章 自然科学分析について

第1節 放射性炭素年代測定と炭化材樹種同定

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林純一

Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也

1. はじめに

岐阜県加茂郡に位置する夕田茶臼山古墳で出土した試料について、樹種同定と加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、T10の古墳盛土炭化物層から出土した遺物番号171の炭化材である。樹種同定は、その中から抽出した炭化材2点(試料No.1、試料No.2)について行った。放射性炭素年代測定は、炭化材2点のうち最終形成年輪が確認できる試料No.1(PLD-24646)について行った。なお、発掘調査所見では、古墳の時期は3世紀前半であると考えられている。

・放射性炭素年代測定

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3 測定試料および処理

| 測定番号 | 遺跡データ | 試料データ | 前処理 |
|-----------|---|--|--|
| PLD-24646 | 遺構: 盛土 位置: T10 遺物 No.171 試料 No.1 層位: 炭化物層 | 種類: 炭化材(バラ属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry | 超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス処理 |

・樹種同定

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柵目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

・放射性炭素年代測定

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図版1-3に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めてない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴C

の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ:IntCal3) を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表4 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

| 測定番号 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$) | ^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$) | ^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲 | |
|----------------------|------------------------------|----------------------------------|---|--|--|
| | | | | 1σ 曆年年代範囲 | 2σ 曆年年代範囲 |
| PLD-24646 試料 No.1 | -26.71 \pm 0.26 | 1794 \pm 19 | 1795 \pm 20 | 172AD(10.9%) 193AD 211AD(47.1%) 255AD 300AD(10.2%) 317AD | 137AD(79.1%) 258AD 284AD(16.3%) 322AD |

・樹種同定

同定の結果、広葉樹のクワ属とバラ属が各 1 点産出した。同定結果を表3 に示す。

次に、同定された材の特徴

を記載し、図版1 に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クワ属 *Morus* クワ科 図版1 1a-1c (No.2)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が、数個複合して斜め方向に断続的に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は單穿孔を有し、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 ~ 2 列が方形となる異性で、1 ~ 5 列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し、日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(2) バラ属 *Rosa* バラ科 図版1 2a-2c (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 2 列並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列のものと広放射組織がみられるが、試料は髓に近いため、放射組織はいずれも直立する異性となっている。

バラ属にはノイバラやヤマイバラなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉低木の蔓性の広葉樹である。現在では材利用は行われていない。

4. 考察

・放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定の結果、試料 No.1 (バラ属 : PLD-24646) は ^{14}C 年代では 1795 ± 20 yr となり、

2 σ 暗年範囲（確率 95.4%）では 137-258 cal AD (79.1%) および 284-322 cal AD (16.3%) で、2 世紀前半～4 世紀前半を示した。

ただし、1 世紀から 3 世紀は日本産樹木が數十～100 ^{14}C yr、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている (Sakamoto, 2003; 尾嵩, 2009)。今回、IntCal09(欧米産樹木で作成)で較正した暦年代範囲は、見かけ上実際の年代より数十から 100 年程度古い可能性が考えられる。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセットで較正し直した場合、今回の測定試料の暦年代範囲は、より新しい方に動く可能性がある。

今回の結果は、赤塚 (2009) による土器編年との対応関係を参照すると、古墳時代早期～前期に相当する。

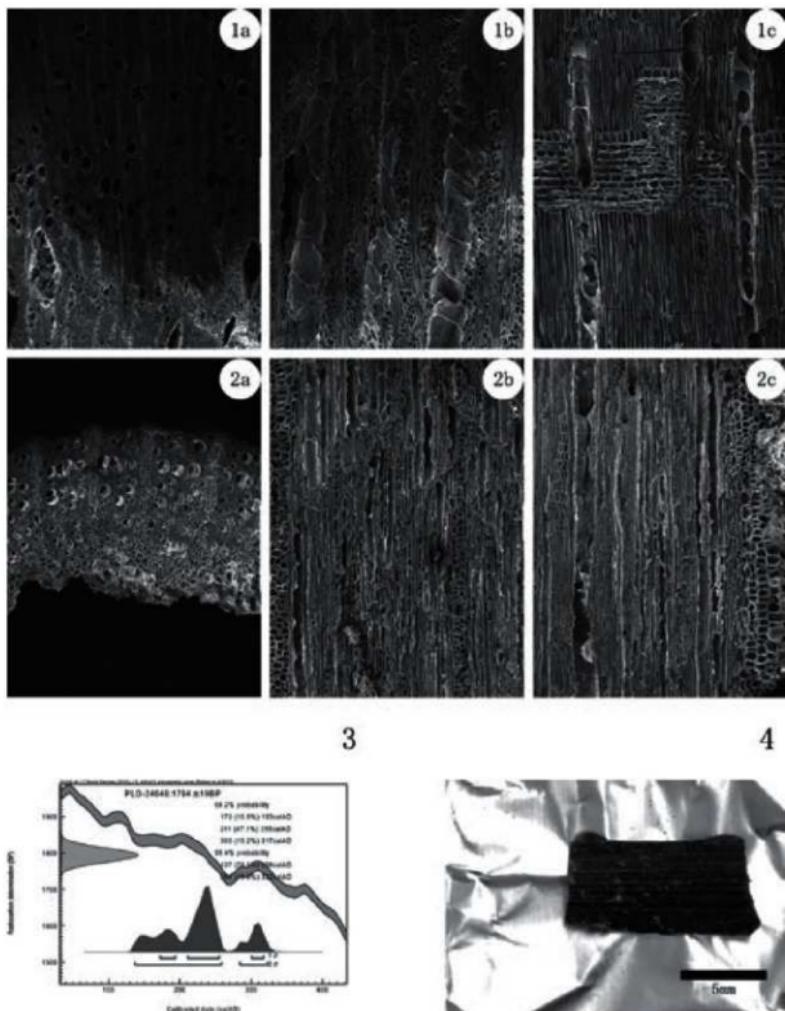
・樹種同定

樹種同定の結果では、試料はクワ属とバラ属であった。産出したクワ属とバラ属は日本全国の山中で生育する樹種である (伊東ほか, 2011; 佐竹ほか, 1989)。

これらの試料は、後円部の墳丘構築の際に、山を岩盤まで削った整地面の上に敷かれた粘土質赤土面の上で、焼けた土粒と共に出土した。そのため試料は、盛土を行なう前に火を焚いた痕跡であると考えられている。よって試料は、古墳建造前である古墳時代早期～前期に生育していたクワ属とバラ属が、築造に伴って燃焼されたと考えられる。

<参考文献>

- 赤塚次郎 (2009) 弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代。日本文化財科学会第 26 回大会実行委員会編「日本文化財科学会第 26 回大会研究機発表要旨集」:14-20. 日本文化財科学会.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 卷弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54. 雄山閣.
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p. 青海社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
- 尾嵩大真 (2009) 日本版較正曲線の作成と新たなる課題。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 卷弥生農耕のはじまりとその年代」: 4-8. 雄山閣.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T. and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. Radiocarbon, 45, 81-89.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 (1989) 日本の野生植物 木本 II. 304p. 平凡社.



第29図 夕田茶臼山古墳出土炭化材の実体および走査型電子顕微鏡写真と暦年較正結果

1a-1c. クワ属 (No.2)、2a-2c. バラ属 (No.1)

3. 試料 No.1 (PLD-24646) の暦年較正結果、4. 試料 No.1 (PLD-24646) の実体顕微鏡写真

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第2節 夕田茶臼山古墳出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1.はじめに

夕田茶臼山古墳は、廻間II式期の築造とみられている岐阜県最古の前方後円墳である。古墳より出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、土器に付着する赤色顔料である。土器口縁部外面の赤色顔料を、セロハンテープに極微量採取して分析試料とした。図版1-1に採取位置を示す。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である㈱堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μm または10 μm 、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA（自動設定による）、ビーム径100 μm 、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・バラーメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図版1-2に示す。ケイ素(Si)、鉄(Fe)、アルミニウム(Al)が主に検出された。他にリン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)が検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版1-3に示す。パイプ状粒子は認められなかった。

4. 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe_2O_3)、鉱物名は赤鉄鉱を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬, 2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μm のパイプ状の粒子形状からなるものが多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田, 1997）、含水硫酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬, 1998）。

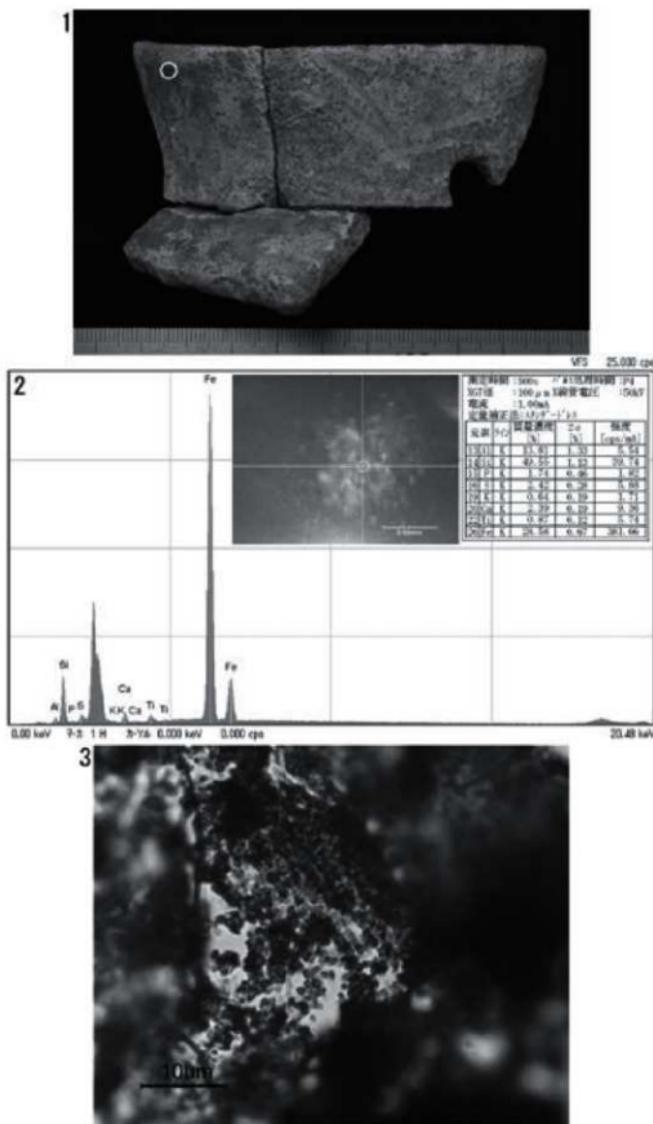
今回分析した試料からは、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が高く検出されており、赤い発色は鉄によると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。パイプ状粒子は検出されておらず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった。

5. おわりに

土器に付着する赤色顔料について分析した結果、鉄が多く検出され、鉄(Ⅲ)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

引用文献

- 成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料I—赤彩土器—、考古学ジャーナル, 438, 10-14, ニューサイエンス社。
- 成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料、正倉院紀要, 26, 13-61, 宮内庁正倉院事務所。
- 岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元、日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39。



第30図 試料採取位置、赤色顔料の蛍光X線分析結果および生物顕微鏡写真
1. 試料採取位置 2. 蛍光X線スペクトル 3. 生物顕微鏡写真

第5章 考察

第1節 墳丘構築工程の復元

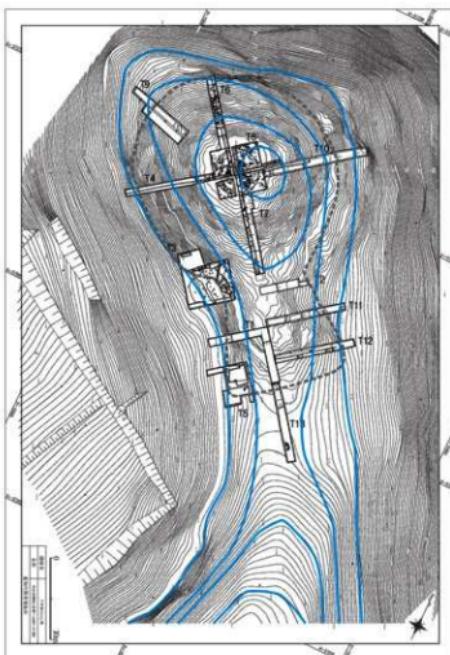
【旧地形の復元】〔第31図〕

各トレンチの調査において検出された地山堆積物や、岩盤の状況などから古墳が築造される前の旧地形を復元してみる。夕田茶臼山古墳が築造された丘陵は北西へ舌状に延びる丘陵の先端部で、丘陵の頂上部はやせ尾根状になっている。尾根の付け根あたりの南西部がピークで、そこから下りながら鞍部にいたり、舌状丘陵の先端へ向けてまた緩やかな登りになっている。

現況地形を観察すると、標高122m辺りで丘陵の傾斜が変化し、それより下は急傾斜になるため、標高122mのコンターラインがおおよそ尾根の旧地形の形状と考えられる。北西へ延びる尾根が、先端付近で西へ緩やかに曲がるような形状となっている。岩盤や地山堆積物の傾斜角などから推測して、丘陵の頂上部の推定標高は126.5mほどで現在とあまり変わらない。しかし頂上部の面積は、現在よりもかなり狭く直径5m程度と想定される。また、尾根先端部では西側の傾斜が緩やかで東側は急であり、頂上のピークは現在よりも3~5mほど東であったと考えられる。

この旧地形に墳形を重ねると、古墳が丘陵尾根のやや西側へ寄った位置に構築されていることがわかる。おそらく東側は旧地形の形状をほぼそのまま利用し、後円部の西側の墳丘端部を尾根の西端に設定したのだろう。このために西へ迫り出す形となつたのだろうが、「西へ迫り出す」ために後円部西側は結果的に大規模な基盤造成をする事になった。このことから「西から見られる」「西へ見せる」事を意識していることは想像に難くない。

古墳の軸は尾根の向きに合わせるように設定されたこともわかる。前方部はこの尾根の形状を活かすように設定されており、それは盛土の状況からも読み取れる。尾根の西端を後円部墳丘端部と決めて、前方部は尾根形状を活かすという設定をした場合、必然的にこの傾きになるといえる。旧地形への墳形の割付では、この2点が重視されたようと思われる。



第31図 旧地形と墳丘の関係

【後円部の墳丘構築工程の復元】〔第33図〕

各調査区の調査成果や、T10・T8・T4土層図を接合した後円部東西横断図（第33図上）とT6・T8・T7の土層図を接合した後円部南北縦断図（第33図下）や縦断面図（34図）を基に、墳丘構築工程を復元した（第33図）。

■第1段階……地山削平工程

後円部の東側は標高125.5mで地山頂上部を削平している。一方、西側は標高123mと東側より2.5m低い位置で地山を削平している。北側T6、北西側T9においても同様に低い位置で地山を削平している。東面は前方部も含めて傾斜面も岩盤まで削平している。

また、墳丘の端部となる部分は、T10・T11・T12の調査成果から岩盤を階段状に削って平坦部を作っている。特に東側は墳端部裾を一定の幅で巡っている可能性がある地山削平工程での墳形の「輪郭づけ」を行っている可能性が高い。

■第2段階……基盤造成工程

後円部西側T4の調査では標高123mの低い位置で地山を削平して、その上に3工程にわけて水平に盛土している状況が確認された。同様の状況は北側T6、北西側T9、南側T7においても認められる。そして、これらの水平盛土の上面が標高125.5mではほぼ揃っているのが興味深い。おそらくやせ尾根状の丘陵頂上部を削平しているため、埋葬部を構築するための十分な面積の平場が確保できなかつたのではないか。北・西・南側に「盛り足し」を行うことで、必要な面積を作り出したものと想定している。これにより直径約14mの平坦面を造成している。基盤造成のための盛り足しは地山傾斜が緩やかな北、西、南側に三日月状に造成されたと推定する。

■第3段階……造成面調整工程

T10・T6では基盤造成面の上に赤褐色の粘性土が敷かれている状況が確認できた。T8で確認された棺底のレベル（標高125.7m）とT10の地山削平レベル（標高125.5m）の標高差20cmはこの工程分であることがわかる。おそらく基盤造成面上に20cmほどの土を盛ることで、造成面の高さ調整や整地を行うという意図があったものと思われる。

■第4段階……周提状盛土工程

基盤造成面の周縁部に3~4m幅の盛土を周提状に巡らせる。周提状盛土は外縁部から2~3工程に分けて外から中へ盛土している。周提状盛土の高さは12~14m程度である。周提状盛土は拳大礫が多く混じる。

■第5段階……埋葬及び墳丘盛土工程

墓壙は構築墓壙と推定した。盛り残した周提の中央部に木棺を据え、棺の周縁部を小礫混じりの粘性土で埋める。その後、棺の上部に大きめの礫を混ぜた土で埋め最後に全体を周提の上面まで埋める。墳丘の完成後にはさらに上面に粘性土に小礫を混ぜた土を全面に10cm程度盛っていると思われる。

上記の後円部の墳丘構築工程は、大きく分けると基盤を造成する段階と埋葬部を構築する段階の2段階に分けられる。前述したように、着手の当初から埋葬部の規模についてはイメージや想定があり、丘

〔旧地形推定〕



〔地山削平工程〕



〔基礎造成工程〕



〔造成面調整工程〕



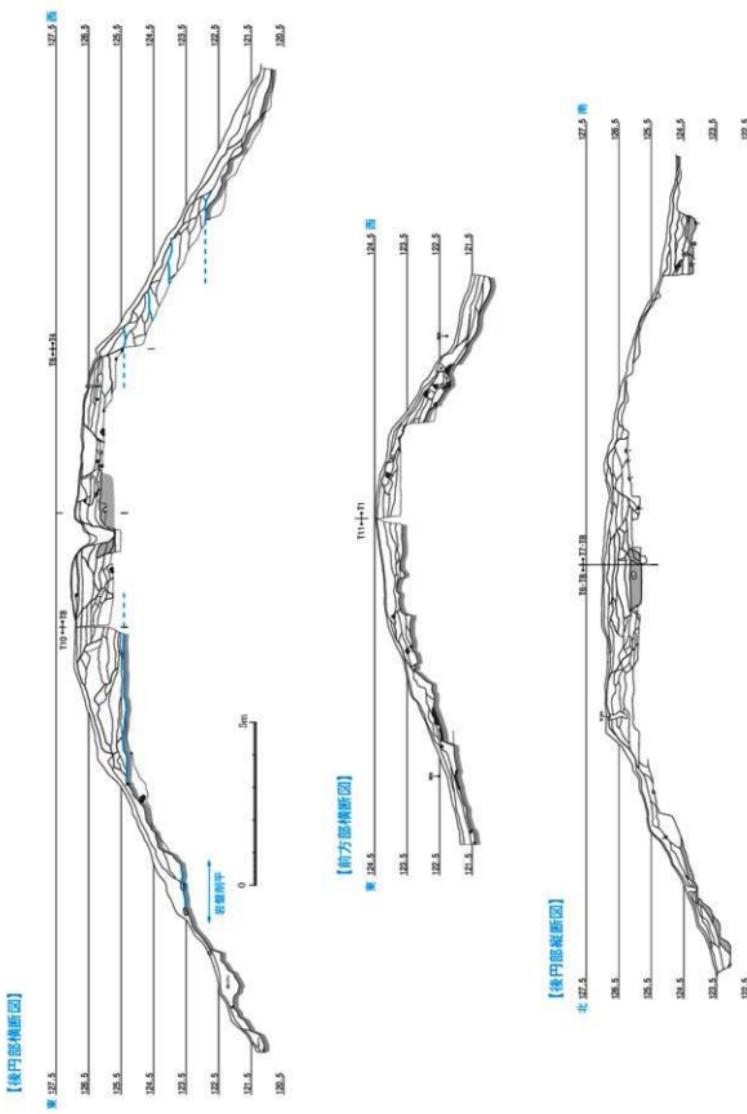
〔周堤状盛土工程〕



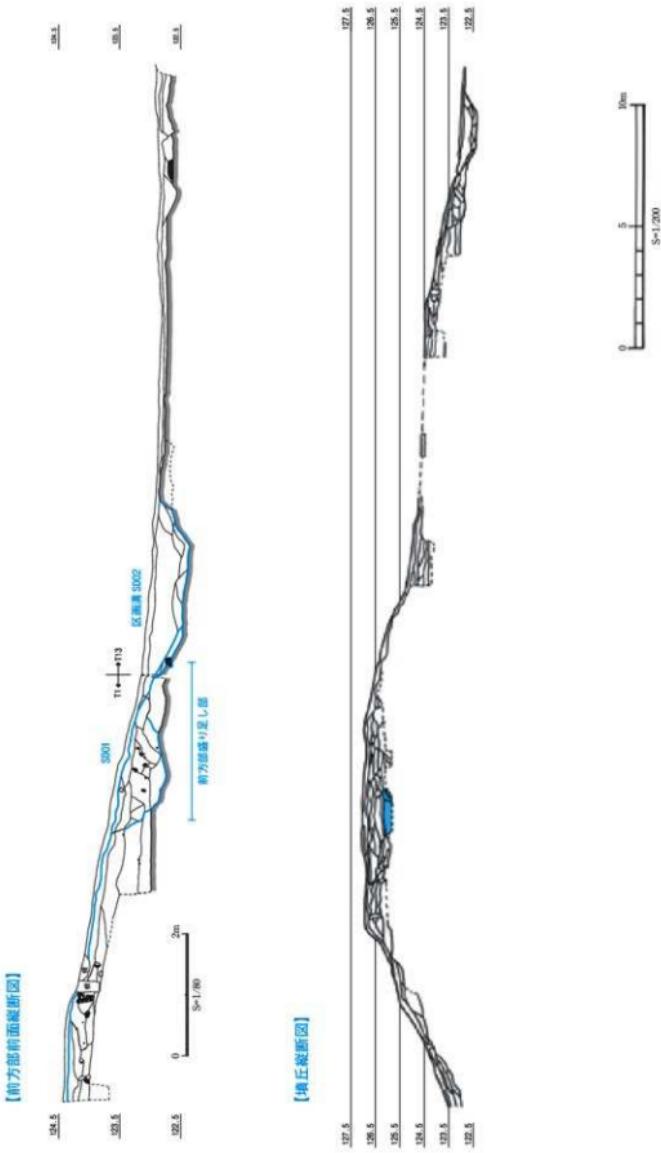
〔埋葬工程〕



第32図 後円部整造工程復元図



第33図 墳丘縦横断図① (S=1/150)



第34図 塗丘縦横断図② (S=1/80, 1/200)

陵上にそれを構築するために基盤造成を行っていると思われる。埋葬構築部分自体は直径 14m ほどであり、弥生時代終末期の墳丘墓の規模とそれほど相違ない。大規模な造成面の上に墳丘墓を造ったような印象を受ける。

【基盤造成から埋葬部構築への連続性について】

第3工程の造成面調整工程で敷かれた粘性土上面において炭化物や焼土が散布することが T 10 の調査で認められた。限られた面積の部分的な調査であるので、全体の詳細な状況を把握したわけではないが、この状況について若干の所見を加えておきたい。

炭化物は樹種同定の結果「バラ属」と「クワ属」と判明した。材としてあまり使用しない樹種であり、周辺に繁茂していた植物を基盤造成面で燃やしていると考えるのが妥当であろう。古墳建築にあたっては地山の削り出しなどを行っているので、周辺雑木などの処理はそれ以前に行っているはずであり、なぜ基盤造成の段階で周辺植物の炭化材が出るのかは気になる点である。

造成儀礼や、作業中に暖をとったなど可能性は幾つもあるが、「バラ属」植物が検出された点に着目してみたい。バラ属に関しては繁殖力は強く、棘を持つため今でもその処理は手間取る。樹木を伐採し、表土が流れた山野でも繁茂すると聞く。少し踏み込んで推測するならば、近くに繁茂している植物や雑木を「燃焼消却」した結果とも考えられるのではないだろうか。その場合、状況の解釈として何故、基盤造成面で燃却を行ったのかが気になる。一般的に考えて、伐採した樹木をあえて丘陵上へ集めて燃やすのは効率的ではない。ましてや大規模な土木工事で整備した面であれば尚更であろう。「燃焼消却」であれば、基盤造成面があるいは墳丘上に繁茂した植物を燃やしたと考え方が蓋然性が高いように思える。そうであるとするならば基盤造成が完成してから、埋葬部の構築までの間に一定の期間が空いていた可能性が考えられる事になる。この想定が成り立つならば、選地から基盤造成までを被葬者の生前に行っている可能性が考えられる。断定的に言及できる状況ではないが、ひとつの可能性として提示しておく。

【前方部の墳丘構築工程の復元】

前方部については、丘陵の尾根上部に収まるように設計されており、基本的に地山削り出しで輪郭づけを行い、その上に凝灰岩礫を混ぜた土で盛土を行っている。くびれ部については地山を平面的に抉るように大規模な削り出しが行われており、T 3 で検出された、テラス状の平坦部はこの地山削り出しによってできたものであると考えられる。

前方部の横断面図（第33図中）をみると旧丘陵の頂上部は平坦に削平されている。縦断図（第34図）をみると頂上部の削平は前方部前面側では標高 123.5 m、後円部側では 124.5 ~ 125.5 m であるので、緩やかな傾斜をつけている事がわかる。おそらく旧地形の傾斜に合わせて、頂上部を平らに均し、その上に 60 ~ 80cm の盛土を施している。

前方部の傾斜角は東面が 30 度前後であるのに対し、西面は 40 度近くあり急である。横断面図でも旧地形よりやや西へ迫り出している事が確認できる。盛土も、西面は礫を多く混ぜており、傾斜変化点には人頭大の礫を土留めで用いている様子が確認できた。後円部同様に西面を丁寧に造っており、西からの眺望を意識していると考えられる。

T 5 の調査結果から、前方部前面及びコーナー部分については、地山削り出し段階で大規模に削平し「輪郭づけ」を行っている。T 1 で検出された溝 SD01 については、この輪郭づけの段階で設定された

ものと推定した。最終的には区画溝SD02が設定され、前方部前面とコーナー部分に盛り足し（第34図上前方部盛り足し部）を行って形状を作出している。こうした構築方法について類例をみることができなかったが、当古墳においては基盤造成段階においての盛り足し工程が確認されており同じ工法を前方部にも応用したと考えている。

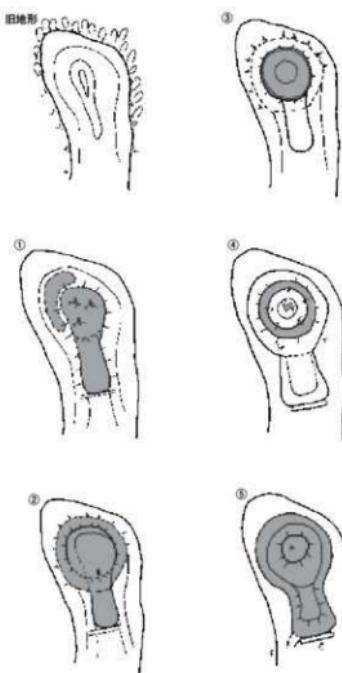
【前方部構築と後円部構築先後関係】

T7の調査によって、前方部の丘陵頂部削平面の上に後円部の基盤造成盛土が堆積し、その上に前方部盛土が堆積することが確認できた。このことから、後円部基盤造成は、前方部の盛土に先行する事がわかる。埋葬部構築と前方部盛土の先後関係については盛土の直接の重なりがないため判別できないが、ほぼ同時に構築されたと考えておきたい。

【まとめ】

以上の成果を整理し、推定される古墳全体の構築過程を提示しておく（第35図）。

- ①地山を削り出して整形することで、墳形の輪郭を形成する。墳端部には平坦部を設けるなど輪郭づけも行う。後円部西半には盛り足しのための削平段を掘削する。
 - ②後円部の西半部分に盛り足しを行い埋葬部の基盤造成を行う。
 - ③後円部基盤造成面に20cm程度の粘性土を敷いて整地する。
 - ④後円部基盤造成面の外縁部に周堤状盛土を施し、墓壙を構築する。前方部前面に区画溝を掘削し、前方部を盛土して成形する。
 - ⑤棺を埋葬して埋める。疎混じりの盛土を全面に施す。
- 夕田茶臼山古墳の造営に関して特徴的なことは、大規模な基盤造成を行っている点である。この点において、周辺地域の弥生墳丘墓とは一線を画する。一方、埋葬部の構築に関しては、弥生墳丘墓との類似性が指摘できるとともに、規模においてもそれ程の格差はみられない。弥生時代から古墳時代への過渡期の様相を良好に示す構築方法であると考える。



第35図 夕田茶臼山古墳 墓造過程模式図

第2節 夕田茶臼山古墳の墳丘盛土について（日紫喜 勝重）

はじめに

夕田茶臼山古墳では、墳丘盛土の土層観察を行った結果、新見地が見られたことから現在までの墳丘盛土の研究史を振り返ったうえで、今回の調査成果を踏まえ、墳丘盛土に関して考察を加えたい。

1. 墳丘築造技術研究の歴史

古墳における遺構論を考える時、従前の研究においては墳丘築造論を中心に検討が行われてきた¹⁾。近年の調査事例の増加により、墳丘土層のデータが蓄積されてきており、墳丘の構築技術を検討することが可能となりつつある。今回の夕田茶臼山古墳の調査では、墳丘構築の良好な資料が得られた。この成果と各地の事例との対比から地域の墳丘築造技術の変遷を考えてみたい。

古墳の墳丘盛土の構築法に関する先学を紐解くと、土層断面の観察結果から様々な検討が加えられてきた。名古屋市に所在した前方後円墳である大須二子山古墳の調査では、田中氏が1953年に検討し、土層監察結果から墳丘構築過程の復元を行うなかで盛土の単位のひとつに小丘状の盛土の存在を示した²⁾。1988年に刊行された丸山遺跡の発掘調査報告書³⁾では、東日本の古墳の盛土に関し検討を行い、墳丘盛土は水平堆積のものばかりではなく、部分盛土後、水平堆積を行っているとし、A工法・B工法に分け分類を行った。その他、1997年に刊行された日上天王山古墳⁴⁾の発掘調査報告書や2002年に刊行された玉手山古墳⁵⁾の発掘調査報告書においても、墳丘土層観察結果から墳丘構築過程の復元が試みられている。

古墳時代の前段階の墓制である弥生時代の墳丘墓においては盛土の残存する事例が少ないとあり、研究事例が少ないが東海地方の事例において2007年に宮腰氏が検討を行っている⁶⁾。宮腰氏の研究によると廻間式期の弥生墳丘墓より、方台部の端部に土壘状の盛土を行い、その後凹んだ中央部に土を充填する工法の墳丘が出現するとした。

列島規模で古墳の築造技術の網羅的な検討を加えた事例として2003年に刊行された青木氏の古墳築造の研究⁷⁾が挙げられる。網羅的な事例収集の中で、墳丘構築は地山面中央に小丘の造成を行い、その外側に積土を行い墳丘を構築するものと、地山面外側に土手状の盛土の造成を行い墳丘を構築するものの大きく2つに大別できるとし、前者を東日本の工法、後者を西日本の工法として類型化した。

これらの先行研究により、土層観察結果から構築方法が次第に明らかとなってきた。特に近年では、土層観察結果から墳丘構築過程の復元が行われており、その結果、工法に地域差が指摘されている。

2. 分析の方法

分析の対象として東海地域の廻間式期の弥生墳丘墓のなかで墳丘観察が行われた墳丘墓（表6）と3世紀の古墳で墳丘の土層観察の行われている事例（表7）を収集した。夕田茶臼山古墳との比較の中で検討を加えることとする。なお古墳の事例については、東海地域の廻間式期の古墳は墳丘盛土観察が少なく、4世紀と報告されるものも含め寺澤氏の提唱する縦向型前方後円墳⁸⁾の集成を援用した。また、愛知県においては廻間式期の墳丘墓での土層観察事例が無いため、朝日遺跡における山中式期の墳丘墓1基のみを掲載した。

3. 考察

宮腰氏の論考⁶⁾においても指摘されているが、表6からも見て取れるように東海地方の弥生時代の中前期段階では墳丘墓の盛土は水平堆積盛土が基本であると考えられる。しかし、後期以降になると、方台部の端部に周堤状の盛土を行い、その後凹んだ中央部に土を充填する工法が出現することが窺える。岐

表6 東海地方の墳丘盛土一覧（墳丘盛土観察が確認できたもののみ）

| 番号 | 遺跡名 | 墳丘墓名 | 所在地 | 盛土方法 | 時期 |
|----|-------------|-----------|-----------|----------|-------------|
| 1 | 伊瀬栗地遺跡 | 墳丘墓 | 岐阜県美濃加茂市 | 水平積み | 3世紀前半 |
| 2 | 山神古墳(飯野)号古墳 | 上野山神弥生墳丘墓 | 岐阜県可児市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 3 | | 上野桐野弥生墳丘墓 | 岐阜県可児市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 4 | 金ヶ崎遺跡 | SX01 | 岐阜県可児郡御嵩町 | 周堤状盛土積み | 3世紀中頃か後半 |
| 5 | | SX02 | 岐阜県可児郡御嵩町 | 周堤状盛土積み | 3世紀後半 |
| 6 | | SX03 | 岐阜県可児郡御嵩町 | 周堤状盛土積み | 3世紀中頃か後半 |
| 7 | | SX05 | 岐阜県可児郡御嵩町 | 周堤状盛土積み | 3世紀中頃か後半 |
| 8 | 朝日遺跡 | SZ159 | 愛知県清須市 | ブロック積み | 1世紀後半 |
| 9 | 平手町遺跡 | SZ09 | 愛知県名古屋市 | 水平積み | 1世紀前半 |
| 10 | | 方形周溝墓1 | 愛知県名古屋市 | 水平積み | 1世紀前半 |
| 11 | | 方形周溝墓2 | 愛知県名古屋市 | 水平積み | 1世紀前半 |
| 12 | 金塚遺跡 | 金塚2号墳丘墓 | 三重県四日市市 | 周堤状盛土積み | 2世紀後半 |
| 13 | 倉谷遺跡 | 1号墓 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 1世紀前半 |
| 14 | 大城遺跡 | 3号墓 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 2世紀末から3世紀前半 |
| 15 | | 4号墓 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 2世紀末から3世紀前半 |
| 16 | | 5号墓 | 三重県津市 | 不明(一部残存) | 2世紀末3世紀初め |
| 17 | | 6号墓 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 18 | | 7号墓 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 19 | | 9号墓 | 三重県津市 | ブロック積み | 2世紀前半 |
| 20 | 殿村遺跡 | SX1 | 三重県津市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 21 | 繩糸遺跡 | SX5 | 三重県多気郡明和町 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 22 | | SX6 | 三重県多気郡明和町 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 23 | | SX7 | 三重県多気郡明和町 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 24 | | SX8 | 三重県多気郡明和町 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |

表7 前期古墳の墳丘盛土一覧（墳丘盛土観察が確認できたもののみ）

| 番号 | 古墳名 | 所在地 | 盛土方法 | 時期 |
|----|----------|-------------|-----------|-------|
| 1 | 福荷森古墳 | 山形県南陽市 | 地山削り出し | 4世紀後半 |
| 2 | 杵ヶ森古墳 | 福島県河沼郡会津坂下町 | 水平積み | 4世紀前半 |
| 3 | 秋葉山3古墳 | 福島県河沼郡会津坂下町 | 周堤状盛土積み | 3世紀後半 |
| 4 | 神明塚古墳 | 静岡県沼津市 | 水平積み | 3世紀後半 |
| 5 | 高尾山古墳 | 静岡県沼津市 | 地山削り出し | 3世紀中頃 |
| 6 | 宿東山2号墳 | 川越市羽佐宮志水町 | 周堤状盛土積み | 4世紀前半 |
| 7 | 弘法山古墳 | 長野県松本市 | 地山削り出し | 3世紀中頃 |
| 8 | 象鼻山1号墳 | 岐阜県養老郡養老町 | 周堤状盛土積み | 3世紀中頃 |
| 9 | 神郷龜塚古墳 | 滋賀県東近江市 | 周堤状盛土積み | 3世紀前半 |
| 10 | 經向石塚古墳 | 奈良県桜井市 | 水平ブロック積み | 3世紀中頃 |
| 11 | 木ヶ／山古墳 | 奈良県桜井市 | 水平ブロック積み | 3世紀中頃 |
| 12 | 見田大沢1号墳 | 奈良県宇陀市 | 水平ブロック積み | 3世紀前半 |
| 13 | 大田南2号墳 | 京都府京丹後市 | 地山削り出し | 3世紀後半 |
| 14 | 矢張山古墳 | 岡山市 | 一部盛土 | 4世紀前半 |
| 15 | 才町・茶臼山古墳 | 広島県福山市 | 地山削り出し | 3世紀中頃 |
| 16 | 歲ノ神墳墓 | 広島県山県郡北広島町 | 地山削り出し | 3世紀中頃 |
| 17 | 平尾2号墳 | 香川県丸亀市 | 地山削り出し | 3世紀前半 |
| 18 | 平尾3号墳 | 香川県丸亀市 | 地山削り出し | 3世紀前半 |
| 19 | 平尾4号墳 | 香川県丸亀市 | 地山削り出し | 3世紀前半 |
| 20 | 宮谷古墳 | 徳島県徳島市 | 地山削り出し | 3世紀後半 |
| 21 | 妙見山1号墳 | 愛媛県今治市 | 一部盛土 | 3世紀後半 |
| 22 | 那珂八幡古墳 | 福岡県福岡市 | 一部周堤状盛土積み | 4世紀前半 |
| 23 | 光正寺古墳 | 福岡県糟屋郡宇美町 | 周堤状盛土積み | 3世紀中頃 |
| 24 | 菅葉2号墳 | 福岡県糟屋郡志免町 | 一部周堤状盛土積み | 4世紀後半 |
| 25 | 福葉古墳 | 福岡県糸島市 | 一部周堤状盛土積み | 4世紀中頃 |
| 26 | 徳重本村2号墳 | 福岡県宗像市 | 一部周堤状盛土積み | 3世紀中頃 |
| 27 | 能満寺古墳 | 福岡県築上郡上毛町 | 周堤状盛土積み | 4世紀中頃 |
| 28 | 酒野3号墳 | 熊本県宇土市 | 水平積み | 4世紀中頃 |

阜県下では廻間Ⅰ式期の伊瀬栗地遺跡⁹においては水平堆積であることが報告されている。一方、同じく廻間Ⅰ式期である上野桐野弥生墳丘墓及び上野山神弥生墳丘墓¹⁰においては、周堤状の盛土がみられた。廻間Ⅱ式期以降では、金ヶ崎遺跡¹¹ SX03 や SX05 においてこの工法が見られる。以上の点から、中濃地域においては廻間Ⅰ式期がこの技術の導入期であり、廻間Ⅱ式期が定着期と推測される。

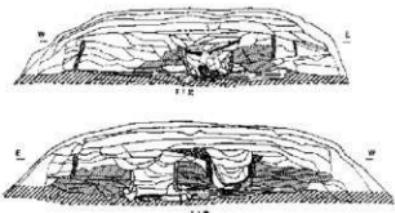
古墳に関しては、時期を絞って表7から推測すると3世紀後半から4世紀かけて全国的に墳丘盛土の方法に地域差があり、いくつかのブロックに分かれるようである。東海・九州では周堤状盛土積みが主体と考えられるが、中国、四国、北近畿では地山削り出ししが主流である。同じ近畿でも奈良県においては水平積みが見られ、東日本は長野県弘法山古墳¹²のような地山削り出し、水平積み、周堤状盛土積みが混在している。

夕田茶臼山古墳の周堤状盛土の起源については、弥生時代後期以来の東海地方の墳丘墓の構築方法の伝統の上に成り立っている事は十分に考えられる。この工法は地域の伝統的工法として夕田茶臼山古墳の埋葬部構築にも引き継がれている可能性が高い。周堤状盛土については青木氏が西日本の工法として分類しているが、詳細をみれば夕田茶臼山古墳のように埋葬部においてみられるものと、墳丘盛土においてみられるものの2者があるよう

に思われる。この違いは今後検討する必要がある。夕田茶臼山古墳と同様に埋葬部に周堤状の盛土を行う工法が見られたのは、周辺地域では滋賀県神郷亀塚古墳¹³のみであった。後者については岐阜県養老町象鼻山1号古墳¹⁴において周堤状盛土が墳丘全体で行われており、その形状は大須二子山古墳に酷似する。

次に夕田茶臼山古墳の重要な特徴は地山削平を行い基盤造成のため水平盛土を行う工法である。地山削平に関しては、岐阜県下で時期の下る象鼻山1号墳や愛知県犬山市の東之宮古墳でも確認されている。この2例は夕田茶臼山古墳の地山削平よりもさらに大規模になるが、同様の築造工法の連続性が認められる点で興味深い。

夕田茶臼山古墳の築造工法の特徴は、墳丘全体では地山削平や基盤造成といった新しい要素と、埋葬部については弥生時代後期以来の東海地方の埋葬部構築の伝統的工法である周堤状盛土が見られる点である。地山削平や基盤造成のための水平盛土などの工法は、現段階においては東海地方で夕田茶臼山古墳が初現といえる。東海地方では時期が下って象鼻山1号墳や東之宮古墳などで、基盤造成のための地山削平後に水平盛土を行っている。基盤造成や地山削平という技術は東海地方ではそれまでに見られない工法であり新しい要素である。この技術は自然発生したものなのか。それとも他の地域から持ち込まれたものなのか。他の地域からの影響の可能性を考えるとすれば、表7から類推すると地山削平の技術については、地山削り出しを行う中国・四国・北近畿の影響の可能性を、象鼻山1号墳等の水平盛土については奈良県で見られる水平積みの工法の影響の可能性が挙げられる。周堤状盛土については、表7でも東海地方より離れた九州地方において多く見られるが、中四国、近畿では見られず、東日本で一部が見られる状況であるため他の地域的な繋がりはこの表からは読み取ることはできない。



第36図 神郷亀塚古墳断面図 (S=1/120)

4.まとめ

以上の点から、夕田茶臼山古墳における墳丘構築には幾つかの要素が複合している可能性を指摘し、地域の伝統的な工法から繋がるものと新しい技術によるものがひとつの古墳で融和している可能性がある。夕田茶臼山古墳の技術が自然発生的であるのか、それとも他地域からの伝わった新しい技術であるのかを考えることで、夕田茶臼山古墳の意味づけが広がっていくだろう。これらの技術が、持ち込まれた技術とするならば、どの地域から持ち込まれたのか、またこの新しい技術を持った集団がどのように関わっていったのかも含め今後の検討課題である。

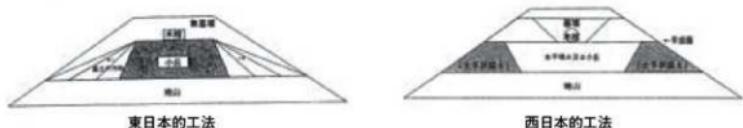
本稿作成にあたっては、本稿作成に快諾をいただいた富加町教育委員会の島田崇正氏に深く感謝いたします。その他、下記の方々にご指導、ご助力をいただきました。記して感謝いたします。

(敬称略)

佐藤祐樹、鈴木とよ江、瀬尾正人、西森忠幸、濱田教靖、藤田英博、前田清彦

<註>

- *1 岸本直文 1992 「前方後円墳建造企画の系譜」『考古学研究』第39巻第2号
- *2 田中一稔 1953 「前方後円墳の墓造法一名古屋市大須二子山古墳の場合」『歴史評論』49 民主主義科学者評議会
- *3 小野昭・桑原陽一・富田和気夫ほか 1988 『丸山遺跡発掘調査報告書』大治町教育委員会
- *4 津市教育委員会 1997 『日上天王山古墳』
- *5 柏原市教育委員会 2002 『玉手山古墳群の研究Ⅱ』
- *6 宮澤健司 2007 「伊勢湾周辺地域における方形圓溝墓の埋葬施設」『(財)愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号
- *7 青木敬 2003 『古墳建造の研究—墳丘から見た古墳の地域性』六一書房
- *8 寺澤 黒 2011 『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
- *9 美濃加茂市教育委員会 1994 「伊集野地道路発掘調査報告書」
- *10 可児市教育委員会 2012 「山神古墳・横野1号墳発掘調査報告書」
- *11 (財)岐阜県文化財保護センター 2003 『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
- *12 松本市教育委員会 1978 『長野県松本市弘法山古墳調査報告』
- *13 能登川町教育委員会 2004 『神都龜塚古墳』
- *14 能登川町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997 『象鼻山1号古墳』

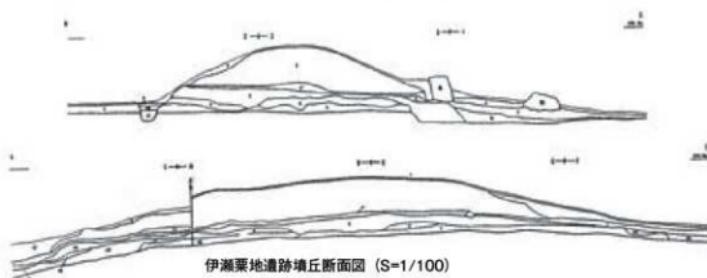


東日本の工法

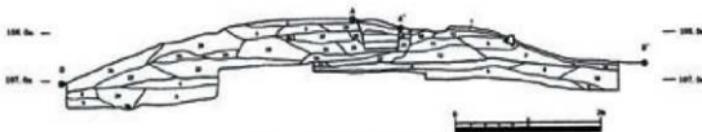
西日本の工法



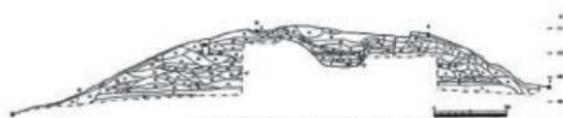
象鼻山 1号古墳埴丘断面 (縮尺任意)



伊瀬葉地遺跡埴丘断面図 (S=1/100)



上野山神弥生埴丘墓断面図 (S=1/100)



上野桐野弥生埴丘墓断面図 (S=1/200)



金ヶ崎遺跡 SX03 墓断面図 (S=1/160)

第 37 図 墓断面の類例①



朝日遺跡 SZ159 墳丘断面図 (S=1/100)



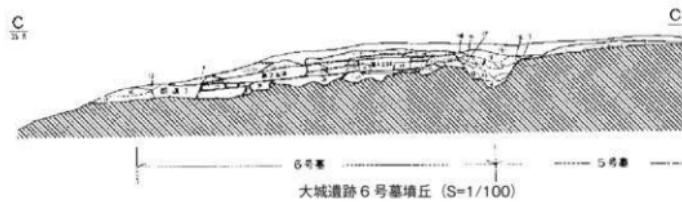
倉谷遺跡方形台状墓埴丘断面図 (S=1/40)



金塚遺跡金塚2号墳埴丘断面図 (S=1/200)



大城遺跡9号墳埴丘断面図 (S=1/100)



大城遺跡6号墓埴丘 (S=1/100)



織糸遺跡 SX6 墳丘断面図 (S=1/200)

第38図 墳丘盛土の類例②

第3節 夕田茶臼山古墳の墳丘形態について

ここでは夕田茶臼山古墳の墳丘形態について調査所見を提示しておく。

主丘部については、調査前には方形の可能性も考慮したが、くびれ部T3の調査とT9での岩盤削り出しの位置により円形と確定した。また、T3及びT7の調査において前方部と後円部の盛土の連続性が確認された。この調査成果により、最終形態としては前方後円形を志向した古墳であると確定した。

各トレンチの調査成果の中でも述べたが、葺石や列石などの外護・外郭施設を有しない。盛土には意図的に岩盤由来の凝灰岩角礫を混入して使用していると考えている。墳形の形成は基本的にはこの盛土のみで行っている。保存状態は良好な古墳であるが、盛土の流出等で厳密な墳丘端部を特定することは非常に困難であった。すべてのトレンチの調査成果を考慮しながら、これらを総合して当該古墳の「造成イメージとしての墳形」を第37図に提示した。ただし、調査は限られた部分のみの調査であるので、想定を含んだ墳形の提示ではあることに留意されたい。

【立面形状について】

まず最初に古墳の立面形状に注目したい。第1節の墳丘築造過程の復元においても考察したが、当該古墳は西からの視覚を重視しており、旧地形から西へ迫り出して墳丘を構築している。そのため西側と東側で築造方法に差異がみられたが、これは立面形においても同様である。表8は墳端部の標高と、墳丘傾斜角をまとめたものであるが、前方部・後円部ともに西側の墳丘端部が平均で1mほど、最大差で2mほど低い。傾斜角を比較すると、前方部西側が東側よりも平均で12.4度も傾斜が急である。全体に西面の傾斜が急で東面が緩やかである。つまり古墳の位置を丘陵の西側へ寄せているだけでなく、墳形の立体形状においても西側へ偏った歪んだ形状をしているといえる。特に前方部はこれが顕著である。この立面形状の歪みは平面形にも反映している。

西面は急な墳丘傾斜角と盛土による整形で比較的明瞭に形作られるが、東面は傾斜が緩いだけでなく盛土も少ない。東側は地山（岩盤）の形状を活かした作り方で、西側は削り出しによる成形と盛土での整形という手の込んだ工程をとっており、特に前方部の東側については丘陵との境界は不明瞭である。作り方の違いが形状に反映していると考えられ、築造当初から東側への意識は少ないものと考えられる。

【平面形状について】

全体の平面形は、左右非対称で不整形な前方後円形である。

まず前方部については、西側の墳端部はラインを描えているが、東側はT11辺りで少し彌れておりラインが直線的ではない。前方部の頂上は全体に西へ寄っており、左右非対称である。さらに、頂上の平坦部は南西コーナーへ向けて少し曲がっている。コーナー部分は隅丸状になり、丘陵部分との境界が不明瞭であった。前方部前面には区画溝が設けられている点も考慮すると隅角墓道の可能性も考えられる。

表8 墳丘端部の標高と墳丘傾斜角

| 部位 | 地区 | 標高(m) | 傾斜角(°) |
|-----|---------|--------|--------|
| 西側 | T5 | 121.5 | 39 |
| | T1 | 121.6 | 43 |
| | T3 | 122.5 | 40 |
| | Average | 121.9 | 40.7 |
| 前方部 | T2 | 123.1 | 30 |
| | T10 | 123.5 | 30 |
| | T11 | 121.9 | 28 |
| | T12 | 121.9 | 25 |
| 前面 | Average | 122.6 | 28.3 |
| | T5 | 122.2 | 18 |
| | T13 | 122.5 | 28 |
| | Average | 122.3 | 24.8 |
| 後円部 | T3 | 121.9 | 40 |
| | 西側 T4 | 121.6 | 40 |
| | T9 | 123.7 | 30 |
| | Average | 122.40 | 36.7 |
| | 北側 T6 | 123.0 | 40 |
| | 東側 T10 | 123.5 | 30 |

後円部は直径が約 24.5 m の円形で、全長の約 2/3 を占める。前方部のような歪みは少なく、円を意識して丁寧に構築されていると考えられるが、北西部 T 9あたりが少し張り出す形状で正円ではない。これについては旧地形の形状に左右されている可能性が考えられる。

後円部と前方部の比高は 2.4 m あり、前方部の頂上平坦部が狭小であるのが特徴である。



第39図 夕田茶臼山古墳墳形復元図

表9 夕田茶臼山古墳の諸属性

| 墳形 | 前方後円墳 | 主軸 | N-39°~40° ~W |
|----------|---------|-------------|--------------|
| 全長 | 39.5m | 前方部最高標高 | 124.55m |
| 後円部径 | 24.5m | 前方部と後円部の比高 | 2.4m |
| 前方部長 | 15.0m | 前方部平坦面長さ | 8.2m |
| 前方部くびれ部幅 | 10.5m | 後円部高さ西側端部から | 5.5m |
| 前方部前面幅 | 15.1m | 後円部高さ東側端部から | 3.5m |
| 後円部最高標高 | 126.95m | 前方部高さ西側端部から | 3.2m |

古墳の墳形については、築造第1工程の地山削平においておおよその輪郭付けを行っている。西面は地山の削り出しで、東側は T 10・11・12 において階段状の岩盤削平で平坦部を作り輪郭付けを行っていることがわかった。前方部前面には岩盤削り出しで輪郭付けを行い、その後に盛り足し整形を行っている。最終的には旧地形との境に幅約 2 m の区画溝を掘削し、丘陵と古墳の区別している。区画溝が掘削されているのは前方部前面のみで、墳墓と地形を分断し明確な境界を設けることを意識しており、尾根伝いに古墳へ入る事を防ぐ意図が窺える。

当該古墳は全体的に墳丘端部を明瞭に形成する意図がみられない。地形に制約されているという点は考慮されるが、この点に関してはルーズであり、定型化された前期古墳との明らかな差異があり、当該古墳の特徴として捉えている。

第6章 総括

夕田茶臼山古墳では弥生時代終末期から古墳時代初頭の廻間式期のものと思われる土器片が総数で1,219点出土している。盛土からの出土で小破片が多く編年の位置づけが難しいが、高环は内唇指向の見られ、坏部と脚部の形状から廻間I式後半からII式前半と位置づけた。少なくとも廻間III式期には下らないものと思われる。また壺類も同様の時期を想定できる。そのなかで、墳頂部T8で出土した赤彩のある有孔直口短頸壺は墳頂部に供献された可能性が考えられる壺であり、編年の位置づけが重要である。直口短径壺は廻間I式期からII式期に存在する器種であり、近隣では美濃加茂市の為岡遺跡7号周溝墓¹や美濃市の古村遺跡SZ08²など廻間I式期の方形周溝墓から出土する例が見られ、中濃地域においては、この時期の墳墓へ供献される器種として選択されている可能性がある。高环との編年の整合性も認められる。ただ為岡遺跡7号周溝墓や古村遺跡SZ08出土のものは頸部や口縁部への加飾がみられるが夕田茶臼山古墳のものは無文である。形態の面でも夕田茶臼山古墳のものはやや肩から胴部が張る形態であり、型式学的な相違が見られる。これらを後出の要素と捉え廻間II式期前半の位置づけを想定した。また、T10の基盤造成面で検出した炭化物のAMS年代測定では3世紀前半の可能性が比較的高いとの分析結果を得ており、土器の編年の位置づけと乖離が無い結果が出ている。これらの所見から、現段階では赤彩有孔直口短頸壺の編年の位置づけを基に、廻間II式前半を古墳の埋葬年代を示すものと想定しておく。歴年代では幅を持たせて3世紀前半を当てるのが現段階においては妥当と考える。

上記の年代観に従えば、夕田茶臼山古墳は岐阜県において最古の前方後円墳と見なし得る事になる。さらに全国的にみても極めて初期の段階で前方後円墳が造営された地域が美濃の地にある事を示す点で非常に重要な。東海地方において3世紀前半の前方後円墳が確認されていない状況下で、そこから派生する問題はあまりにも大きい。考察でも触れたが夕田茶臼山古墳は弥生墳丘墓との構造的親和性が強い。ここでは、夕田茶臼山古墳の特徴を整理し、地域の墳丘墓との比較の中でその属性を位置づけてみたい。

夕田茶臼山古墳の築造過程を考えるとき、その重要な特徴は丘陵上に立地する点と事前に大規模な造成を行っている点が挙げられる。まず丘陵上に造営される点については、岐阜市に所在する長宜子孫銘内行花文鏡が出土した瑞龍寺山山頂墳³や象鼻山古墳群⁴など弥生時代後期の山中式期以降、隔絶された首長墓が丘陵上に造られる。夕田茶臼山古墳が所在する中濃地域においては、金ヶ崎遺跡⁵(御嵩町)や伊瀬栗地遺跡⁶(美濃加茂市)、上野桐野弥生墳丘墓⁷(可児市)、加佐美山1号墳⁸(各務原市)など廻間I式期から集落と隔絶された丘陵上への造墓活動が盛んとなる。丘陵上への造墓は廻間III式期、中濃地域では美濃觀音寺山古墳⁹を例として廻間II式期までは継続するようである。

次に、埋葬部を構築する前の準備段階として、やせ尾根状の旧地形の頂上部を削平して埋葬部構築の基盤を造成している点については、犬山市の東之宮古墳は墳丘構築の前に旧地表を基盤層まで削平していることが報告されている¹⁰。また養老町の象鼻山1号古墳においても旧地表を削平し整地していることが知られている¹¹。いずれも廻間III式期の前方後方墳であるが、地山削平という工程において類似性



第40図 有孔直口短頸壺の類例
(S = 1/6)

が見られる点は地域性による共通点として注目したい。中濃地域をみると、廻間II式期の前方後方墳である美濃市の美濃觀音寺山古墳において丘陵上の立地と地山の削り出しという共通点が認められる。この造成技術の美濃における初現は象鼻山3号墳でみられるので、山中式期後半からはじまる可能性が考えられる。夕田茶臼山古墳を弥生墳丘墓と位置づけるか初現的古墳と位置づけるかは議論があると思われるが、調査所見としては、この基盤造成過程を重要視して弥生墳丘墓との差異とみなし、東之宮古墳や象鼻山1号墳などの初現期の古墳へ繋がる技術と考え、夕田茶臼山古墳を初源的な古墳と位置づけた。ただし、両古墳がいずれも削平面に前方部も含めた墳丘盛土を行っているのに対し、夕田茶臼山古墳の削平は、あくまで後円部の埋葬部分の基盤整備が目的である点が相違している。前方部は基本的に削り出しベースで盛土の量は少ない。この差異については時期差であり、過渡的な様相と考えている。

さて、埋葬部の構築方法は地山削平によって形成した基盤造成面に周提状盛土を行い構築するのが特徴であり、墓壙は構築墓壙で、木棺直葬と推定した。この埋葬部の構築方法は規模の違いはあるが、廻間I式期である金ヶ崎遺跡SX03やSX05において同様の様相が看取される¹²。また周提状の盛土については弥生時代後期以降の弥生墳丘墓の構築方法のひとつであり方として当該地域に定着している可能性がある¹³。この点からも夕田茶臼山古墳の構築方法が弥生時代後期以降の墳丘墓の様相を色濃く残していると考えられる。

さらに、夕田茶臼山古墳の周提状盛土を行う埋葬部のみの規模に限定してみると、直径14m程度であり、弥生時代終末期の墳丘墓と比較して隔絶したものではない(表10)。つまり夕田茶臼山古墳の特異性は盛土造成ではなく、基盤造成過程にあると考えられ、最終的な墳形や規模は弥生墳丘墓と比して隔絶した様相を見せているが、埋葬部の構築自体は弥生墳丘墓の延長線上にあると考えることができる。山を切り開き、山頂を削平した土台の上にあたかも弥生後期以来の墳丘墓を築いたという印象を受けるのである。そしてこの構造こそが当該地域における弥生墳丘墓とも前期古墳とも違う夕田茶臼山古墳の最大の特徴であり、弥生時代終末期から古墳時代早期への過渡期の様相を映し出していると解釈することが可能である。夕田茶臼山古墳が古墳時代前期の前方後円墳へどのように発展するのかが注目されるが、地山削平による基盤造成を基調とした構築方法や埋葬部の構築方法は、決して前期の前方後円墳へは繋がっていない属性であり、あくまで弥生墳丘墓の発展形で留まっているという様相が強い。夕田茶臼山古墳が、前期の前方後円墳古墳へ直接的に繋がっていくとは現段階では考え難い。この点は最大

表10 丘陵上に立地する弥生墳丘墓主丘部の規模

| 遺跡名 | 長辺又は直徑(m) | 墳形 | 時期 | 備考 |
|-----------|-----------|------|-------|-------------|
| 加佐美山1号墳 | 12 | 方形 | 山中式期 | 前方後方の可能性有り |
| 伊瀬粟地 | 10.8 | 方形 | 廻間I式期 | 多孔銅鑿・刃闌双孔鉄劍 |
| 上野桐野弥生墳丘墓 | 18.3 | 円形 | 廻間I式期 | 鐵劍 |
| 上野山神弥生墳丘墓 | 10 | 円形 | | |
| 蘇原東山1号墳 | 9.5 | 方形 | 廻間I式期 | |
| 象鼻山8号墳 | 18.4 | 円形 | 廻間I式期 | |
| 金ヶ崎遺跡 | SX03 | 11.6 | 方形 | 構築墓壙 |
| | SX05 | 9.8 | 方形 | 構築墓壙・多孔銅鑿 |
| | SX01 | 20.5 | 前方後方 | 廻間II~III式期 |
| | SX02 | 18.7 | 方形 | 鐵劍 |
| Average | 14.0 | | | |

※計測値については長辺の最大値。前方後方部は後方部の最大値を採用した。

限に注目する必要があり、これをどう解釈するかは今後の課題である。夕田茶臼山古墳の造営の母胎となつた集落の様相がはつきりとしていないのは課題である。造墓活動と対応する集落の動向を地域ごとに考えていく必要があるだろう。

東海地方においては弥生時代以来の方形の墳墓の伝統を基調に、廻間I式期以降に廻間遺跡SZ02¹⁴や、後続する西上免遺跡SZ01など方形に突出部をもつ前方後方形が誕生する。美濃においては東町田遺跡SZ01¹⁵や金ヶ崎遺跡SX01など廻間II式期に前方後方形が築造され始める。上記の年代観に従えば、これらとほぼ同時期において前方後円形が存在した可能性が示された意義と問い合わせる問題は極めて大きいと言える。東海地方では前方後方形が先行するという見方が主流であり方形墓からの発展と捉えられるが、夕田茶臼山古墳の主丘部は円形を指向し墳形は前方後円形を呈している。つまり前方後円墳が、前方後方墳と同様に墳丘墓からの発展形として廻間II式の段階に美濃で成立している可能性を示唆しているのである。

しかし、方形周溝墓から発展すると捉えられる西上免遺跡SZ01や東町田遺跡SZ01とは、立地や規模、築造技術において相違点は小さくない。両者は違った原理での発展を想定しておく必要がある。それは丘陵立地と地山削平や削り出し技術に特徴づけられるもので、その属性について他地域との比較の上で考えていく必要があろう。また、弥生時代以来、方形の墳墓を基調とする当地において円形志向の夕田茶臼山古墳の存在は確かに異質であり、この点をどう理解するかは夕田茶臼山古墳の評価における争点のひとつとなろう。

円形墓については、近年、美濃において弥生時代終末期の円形墓の類例が増えている。象鼻山古墳群では、3号墳・8号墳などの弥生時代終末期の円形墓が確認されており、古墳群には同時に方形と円形の混在がみられる。また、大垣市の東町田遺跡においても廻間I式期の円形墓が確認されている¹⁶。可児市の上野桐野弥生墳丘墓や上野山神弥生墳丘も弥生時代終末期の不整形な円形墓である。事例は少ないが、廻間I式期以降、美濃において首長墓の形態に円形が導入されている可能性が考えられる。これらの事例と夕田茶臼山古墳との関連性は追求していく必要があるとともに、東海地方において定型化した前方後円墳の築造が始まる4世紀までは前方後方形が優勢ではあるが、多様性を有している可能性は排除できないように思う。墳形の選択はその時々の地域間の関係性や首長の裁量に委ねられるような多様なあり方を想定する必要もあるのではないか。

円形墓の発生や伝播については瀬戸内東部、播磨地方を中心として大阪湾沿岸や琵琶湖沿岸へなど東への波及との見解が考えられている¹⁷。夕田茶臼山古墳の直接のルーツをどこに求めるかは現段階では想像の域を出ないが、近隣では滋賀県長浜市虎姫町の五村遺跡¹⁸において、庄内式期前半の円形墓に突出部が付いた前方後円形の周溝墓が検出されており、墳墓からは東海系の加飾壺が出土している点は注目される。湖北地域では大亥亥・鶴田遺跡でも同様の墳丘墓が確認されている¹⁹。湖北地域と美濃、特に西濃との繋がりは以前から指摘されており、円形墓のルーツの有力な候補として考えておきたい。

さて、夕田茶臼山古墳の成立を考える上で、中濃地域、特に長良川中流域と木曾川中流域を結ぶ武儀・可茂地域の墳丘墓の動向を考えることは重要である。この地域の弥生時代終末期の墳丘墓を特徴づける遺物として鉄剣と多孔銅鏡の副葬が挙げられる。多孔銅鏡は東海地方に分布する地域色の強い銅鏡の形式で、伊瀬粟地遺跡、金ヶ崎遺跡SX05で出土している。鉄剣については上野桐野弥生墳丘墓、金ヶ崎遺跡SX02において、伊瀬粟地遺跡では刃闘双孔鉄剣が出土している。鉄剣は、弥生時代後期後葉以降に山陰や北陸において方形台状墓や周溝墓に積極的に副葬されることが知られており、大陸からの鉄刀や刃闘双孔鉄剣の流通に北近畿や北陸の首長が果たした役割は大きいと考えられている²⁰。また、廻間

II式期の前方後方墳である美濃市の美濃觀音寺山古墳は、方格規矩四神鏡や重圓文鏡などの漢鏡が出土しており、丘陵上立地や地山削り出しなど夕田茶臼山古墳と類似点も見られ、その関係は注目すべきである。漢鏡については弥生時代終末期の中濃地域でその流入が顕著になる事が指摘されており、これらの流入経路のひとつとして、北近畿から近江湖北を経るルートが想定されている⁷³⁾。当該期の中濃の遺跡出土遺物から、弥生時代後期以降に成立する北近畿から近江湖北地域を経る主に金属製品の流通ネットワークに当該地域の首長層が参入している可能性が考える。こうした地域間交流の中で付随する情報や人の流入を想定することも十分可能であり、夕田茶臼山古墳に関する諸属性もこうした中から生まれている可能性を今後も注目していきたい。

そして前述より強調している夕田茶臼山古墳と弥生墳丘墓を画する大きな特徴である旧地形の削平による基盤造成と地山の削り出しについてであるが、これだけ大規模なものは、それまでの美濃には見られない技術であり、外部からの影響の上で成立している点は考慮する必要がある。丹波・丹後地域など北近畿では弥生時代後期以降、京都府京丹後市赤坂今井墳墓に代表されるような丘陵を切断して墳丘や周辺の平らな面を造成して墳墓を形成する台状墓が盛行する。夕田茶臼山古墳において直接的な繋がりを示す資料は出土していないが、属性としては共通する点として注視していきたい。また湖北地域においても古保利古墳群のように丘陵上に墳墓を構築する例が見られる。夕田茶臼山古墳の特徴である丘陵上の立地や地山の削平削り出しの技術についても、前述の北近畿から近江湖北ルートとの関係に注目をしたい。

夕田茶臼山古墳が所在する中濃の武儀・可茂地域においては、弥生時代終末期以降に丘陵上に築かれる墳丘墓が増加するのと連動するかのように、成瀬正勝氏が「砂行型急斜面集落⁷⁴⁾」と定義した丘陵斜面を利用する特徴的な集落が形成される。これらは時代の変化の中での激しい階層分化を想起させるとともに、当該期の地域社会における激しい変化とそれに起因した地域的なまとまりを読み取ることができる。この領域は古代のムゲツとカモ県主の領域として、古墳時代以降に密接な地域的連帯をみせる地域である⁷⁵⁾。この領域の原型が当該期に成立した可能性があり、夕田茶臼山古墳は現段階ではこの領域の初現期における盟主的存在と位置づけることができよう。また、こうした地域的まとまりが加速する背景として、弥生時代後期以降成立する北近畿～近江湖北地域～美濃・東海という地域間のネットワークに当該地域の首長層が参入し、影響を受けている可能性が高く、当該地域の弥生時代終末期の墳丘墓の成立や夕田茶臼山古墳のような初現的な前方後円墳の誕生の背景としても、こうした社会変化や首長間あるいは地域間ネットワークの成立が無関係ではないと考える。今後も当該地域と近江湖北地域・北近畿との繋がりは注意深く考察する必要がある。

誕生期の前方後円墳については、寺沢薰氏が定型化した箸墓古墳以前の庄内3式期～布留0式期にヤマトで誕生した纏向石塚古墳・纏向矢塚古墳・ホケノ山古墳などの前方後円墳が地方へ波及したとし、これらを「纏向型前方後円墳」として類型化し、岡山市矢篠治山古墳、三重県松阪市上野1号墳、千葉県市原市の神門古墳群、福岡県小郡市の津古生掛古墳など各地へ広がる過程を多数の類例を基に検証している⁷⁶⁾。夕田茶臼山古墳も短い前方部の様相や築造企画の面から見れば纏向型前方後円墳との関わりが注目されるが、ヤマトからの波及と捉えるだけの根拠は得られていない。ただし大和盆地南東部に前方後円墳が誕生するのとほぼ同時に美濃の地に前方後円墳が築造されたことをどのように理解するのかについては、この古墳の評価の大きな争点として今後追求する必要があろう。

夕田茶臼山古墳の同一丘陵には現況において墳墓は確認されておらず、現状では単独墳と考えている。西濃や湖北地域では連続と造墓活動が続く事例が多いが、中濃地域においては単独墳が点在するように

思う。地域の中での首長権継承のあり方と関係する可能性がある。

今回の調査では保護を優先して埋葬主体部の調査は実施していない。そのため副葬品の様相は明らかでなく、古墳の系統的考察や被葬者像に迫るには限界があることは事実であり、限られた情報から拡大解釈している感は否めない。しかし、今回の調査で墳丘の築造工程が復元できるデータを得られたことは非常に大きな成果といえる。この成果は、美濃における初現期の古墳の誕生過程を考える上で重要な示唆を与えるものとなる。

夕田茶臼山古墳の調査後、古墳へ上の見学道がきれいに整備された。現在も町内の児童達が授業の一環で毎年古墳を訪ねてくれる。今後もこうして足を運んでくれる方が増えることを願うとともに、地域の宝として認知され、永く地域に愛される古墳であることを望む。

今回、本報告書をまとめることができたのは志を共にする多くの仲間からの助言や協力があったからである。筆者の力量不足により古墳に関する有益な情報を網羅し適切に評価できたかは心許ないが、本書が美濃の古墳誕生の鍵を解く一助となることを願っている。

末尾になりましたが、調査の方針や成果の評価について多岐に亘りご指導下さいました調査検討委員会の諸先生方に御礼申しあげます。また地元夕田自治会の皆様には、調査に当たって暖かいご理解と御協力を頂きました。記して感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

<註>

- *1 渡辺博人 1995 「『飛岡遺跡』美濃加茂市教育委員会
- *2 高木宏と 2005 「古村遺跡」美濃市教育委員会
- *3 萩野繁治 1985 「瑞應寺山頂遺跡」「岐阜市埋蔵文化財報告書」岐阜市教育委員会
- *4 赤塚次郎 1992 「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」「弥生文化博物館研究報告」第1集大阪府立弥生文化博物館
- *5 中島和哉 2010 「象鼻山古墳発掘調査報告書 - 第1~4次発掘調査の成果」養老町教育委員会
- *6 成瀬正勝 2003 「金ヶ崎遺跡・青木横穴墓」(財)岐阜県文化財保護センター
- *7 齋藤基生 1994 「伊勢美山1号墳発掘調査報告書」美濃加茂市教育委員会
- *8 長江真と 2012 「山神古墳・樹野1号古墳」可見町教育委員会
- *9 渡辺博人 1990 「山神古墳・樹野1号古墳」「各務原市教育委員会
- *10 高木宏と 2012 「美濃親音寺山古墳・長福寺遺跡・西親音寺遺跡・東親音寺遺跡」美濃市教育委員会
- *11 田中幸生・中野秀昭 1998 「第4章 1 墳丘と墓坑の築造」「象鼻山1号古墳 - 第2次発掘調査の成果」富山大人文学部考古学研究室、養老町教育委員会
- *12 成瀬正勝 2003 「第8章考察 第1節金ヶ崎遺跡における方形周溝墓の埴丘造成について」「金ヶ崎遺跡・青木横穴墓」(財)岐阜県文化財保護センター
- *13 宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における方形周溝墓の埋葬施設」(財)愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号
- *14 赤塚次郎 1997 「戀間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター
- *15 鈴木元 2004 「東町道路」大垣市教育委員会
- *16 大垣市教育委員会高田康成氏よりご教示いただいた。
- *17 岸本一宏 2001 「弥生時代の低地円丘墓について」「兵庫県埋蔵文化財研究紀要」創刊号
- *18 植野浩三 1997 「古村遺跡・生きがいセンター建設に伴う発掘調査報告書」奈良大学文学部・虎姫町教育委員会
- *19 松室孝樹 2000 「近江・湖北地域における弥生時代集落の様相」「みずは」第33号 大和弥生文化の会
- *20 野鳥水 2004 「弥生時代後期から古墳時代初期における銅製武器をめぐって」「阿波正利先生退官記念論集」
- *21 高木宏と 2012 「第7章 考察」「美濃親音寺山古墳・長福寺遺跡・西親音寺遺跡・東親音寺遺跡」美濃市教育委員会
- *22 成瀬正勝 2000 「第7章考察 第1節 砂行道路における住居跡と集落形態」「砂行道路」(財)岐阜県文化財保護センター
- *23 野村忠夫 1982 「古代の美濃」教育社
- *24 寺沢義 1988 「禮向型前方後圓墳の築造」「同志社大学考古学シリーズIV 考古学と技術」同志社大学
- *25 寺沢義 2011 「前方後円墳出現論 - 禮向型前方後圓墳再論 - 」「王権と都市の形成史論」

＜参考文献＞

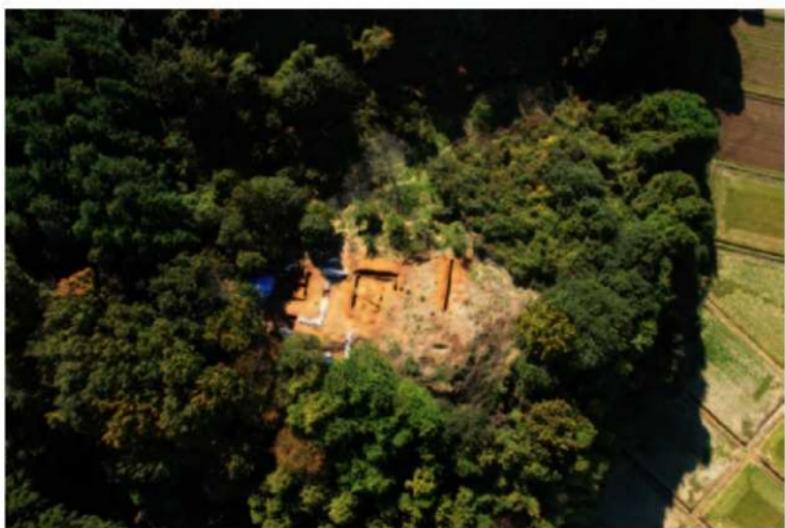
- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレス – 3・4世紀の伊勢湾岸地域 –」『古代文化』44
- 赤塚次郎 2013 「2・3世紀の東海と関東 東海系のトレス再論」シンポジウム『邪馬台国時代の関東と近畿』資料集
- 石黒立人 1999 「土器から古墳時代初頭の地域類型 – 器種組成を指標に –」『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 黒坂秀樹 2006 「近江の出現期古墳」『古式土師器の年代学』
- 近藤義郎 1995 「前方後円墳と弥生墳丘墓」青木書店
- 高木宏和 2005 「第9章 弥生時代後期条痕文文化圏の有稜高坏の変遷について」『古村遺跡』美濃市教育委員会
- 中井正幸 2001 「前期古墳から中期古墳へ」『美濃・飛騨の古墳とその社会』
- 林大智 2004 「北陸における鉄器導入と社会の変化」奈良大学考古学研究室総会資料
- 美濃古墳文化研究会 1990 『美濃の前期古墳』
- 第6回東海考古学フォーラム 1995 『土器・墓が語る』

写真図版





空撮（南西から）



空撮（右が北）



くびれ部T 3 (南西から)



くびれ部T 3 (北から)



くびれ部T 3 (西から)



T 3くびれ取り合い部 (西から)



T 3くびれ取り合い部 (南西から)



填頂部 T 8 (上空より)



填頂部 T 8 (東より)



填頂部 T 8 (南東より)



填頂部 T 8・T 6 (北西より)



T 8 赤彩有孔短頸壺出土状況



T 8 南北土層珪西半（西より）



T 8 棺部埋土検出（東より）



T 8 南北土層珪南半（東より）



T 8 南北土層珪北半（西より）



T 8 東西土層珪東半（南より）



T 8 東西土層珪西半（南より）



T 8 南北土層畦北半 棺部陥没による崩落部(南東から)



T 8 東西土層畦西半 (北から)



T 8 (東から)



T 8 (南から)



T 10 墓頂部 (東から)



T 10 西端粘土層 (東から)



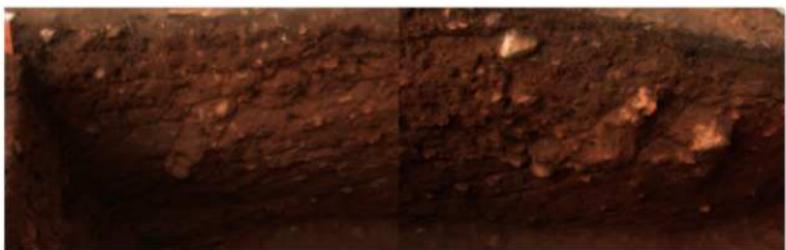
T 10 炭化物検出状況 (東北から)



T10 完掘 (西から)



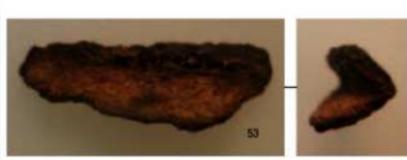
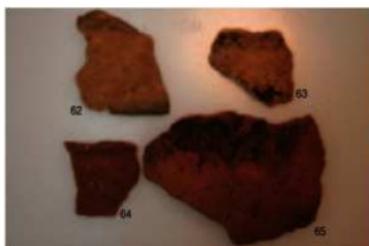
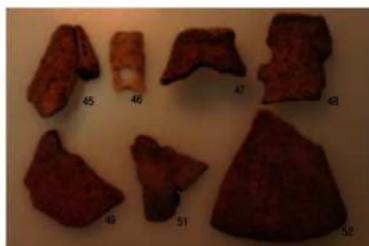
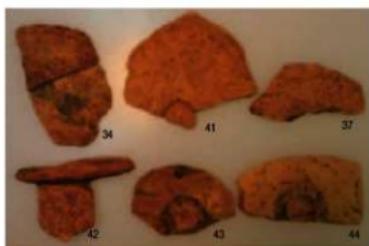
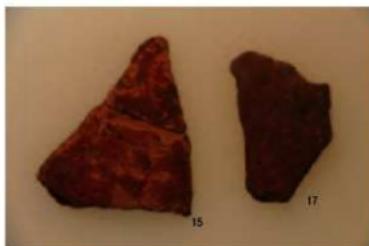
T10 (西南から)



T10 周堤状盛土堆積状況 (南から)



古墳頂上より西を眺む (左に金華山、右奥に伊吹山がみえる)



報告書抄録

| | |
|------------|---|
| ふりがな 書名 | ゆうだちやうすやまこふんはんいかくにんちょうさほうこくしょ 夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書 |
| 副書名 | |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 富加町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 27 号 |
| 編著者名 | 島田崇正 |
| 編集機関 | 岐阜県 富加町教育委員会 |
| 所在地 | 〒 501-3305 岐阜県加茂郡富加町淹田 1511 TEL (0574) 54-2177 |
| 発行年月日 | 西暦 2014 年 3 月 10 日 |

| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|--|-----------------------------------|-----|------|----------------------|----------------------|--|--|------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ゆうだちやうすやまこふんはんいかくにんちょうさほうこくしょ 夕田茶臼山古墳 | ぎふけんかみのくに 岐阜県加茂郡 富加町夕田692-1 | 502 | 4360 | 35 度 29 分 24 秒 | 136 度 59 分 1 秒 | 地形測量 2009.8.27 ~ 2009.11.27 第 1 次調査 2010.1.6 ~ 2010.3.15 第 2 次調査 2011.10.5 ~ 2012.1.13 第 3 次調査 2012.11.24 ~ 2013.3.16 第 4 次調査 2013.12.1 ~ 2013.3.15 | 19.0m ² 60.9m ² 58.3m ² 57.2m ² | 範囲確認 調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------|----|--------------------|------|-------------------------------|---|
| 夕田茶臼山古墳 | 古墳 | 弥生時代終末期～ 古墳時代初頭 | 墳丘 | 土器・砥石・石鎚・ 須恵器・灰釉陶器・ 山茶碗 | 丘陵を削平し、墳丘の 基盤造成を行っている。 墓壙は構築墓壙、主体 部は木棺直葬と推定。 |

| | |
|----|--|
| 要約 | 墳丘盛土の事前に丘陵を削平して基盤造成を行っている。 墳丘保存状態は良好で、前方後円形を呈する。 葺石等の外護施設は確認されなかった。 墳丘盛土の事前に丘陵を削平して基盤造成を行っている。 出土土器や炭化物の年代測定等から 3 世紀前半の築造と推定した。 墳形は前方後円形でありながら、埋葬方法や墳丘の築造方法、出土遺物等は弥生時代の伝統 を引き継いでおり、弥生時代終末期から古墳時代初頭の様相を示していると思われる。東海 地方における古墳出現の状況を考える上で貴重な資料と言える。 |
|----|--|

夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書
(平成 21 ~ 24 年度)

発行年 西暦 2014 (平成 26) 年 3 月

発行者 岐阜県富加町教育委員会

〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町淹田1511

Tel 0574-54-2111 FAX 0574-54-2461

U R L <http://www.town.tomika.gifu.jp/>

印 刷 西濃印刷株式会社

〒 500-8074 岐阜県岐阜市七軒町 15 番地